

北大時報

December 2010

No.681

平成22年

12

次期総長候補者として 佐伯 浩 現総長を選出

名誉教授 鈴木 章 氏 2010年ノーベル賞授賞式へ



総長室にてノーベル賞受賞報告(2010.12.15, 関連記事2頁に掲載)

目 次

全 学 ニ ュ ー ス

○次期総長候補者として佐伯 浩 現総長を選出	1
○名誉教授 鈴木 章 氏、2010年ノーベル賞授賞式へ	2
○北海道大学「サステイナブルキャンパス推進本部」を設置	12
○中国 上海海洋大学と大学間交流協定を締結	13
○柴原幹典 名誉教授が平成22年度原子力・放射線安全管理功労表彰受賞	14
○平成22年度科学研究費補助金審査委員表彰に本学から2氏 ー理学研究院 片倉晴雄教授と工学研究院 森田隆二教授ー	15
○法学研究科 道幸哲也教授が厚生労働大臣表彰（「厚生労働行政功労者に 対する表彰」及び「労政行政関係功労者に対する表彰」）を受賞	16
○平成22年度医学教育等関係業務功労者表彰、本学から2氏が受賞	17
○電子科学研究所 竹内繁樹教授らが大和エイドリアン賞を受賞	19
○平成22年度一般会計経済危機対応・地域活性化予備費（本学関係分）の 主要事項、平成22年度補正予算（第1号）案（本学関係分）の主要事 項	20
○AO入試合格者の発表	21
○帰国子女入試合格者の発表	22
○大学入試センター試験・本学一般入試個別学力検査等 実施体制等の 決定	23
○大学入試センター試験志願者数の発表ー本学会場は札幌地区試験場 5,240人、函館地区水産学部試験場391人が受験ー	26
○「北海道大学進学相談会 in 東京・大阪・名古屋」の開催	27
○北大フロンティア基金	28
○（財）北海道大学クラーク記念財団への寄附	29
○サステナビリティ・ウィーク2010の開催	
・サステナビリティ・ウィーク2010を振り返って	30
・サステナビリティ・ウィーク2010オープニングシンポジウム 北海道大学「持続可能な発展」国際シンポジウム 「ひとり一人がすこやかに人間らしく生きる社会を目指して ーわたしたちが直面する危機の原因を包括的に探るー」	32
・「少子化と持続可能な未来」	34
・サイエンスカフェ「地球の調べ方・カフェ」（第一夜～第三夜）	35
・経済学部主催 第7回プレゼン・ディベート大会	36
・市民向け講座 北海道大学サステナビリティ・フォーラム	37
・みんなで考えようー身近な環境と子どもの健康ー	38
・グリーン回路とシステムに関する国際ワークショップ	39
・自転車タクシー-DEおしゃべり&ECO	40
・第5回フェアトレードフェア	41
・第2回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト	42
・インフルエンザなどの人獣共通感染症を克服するー統合科学実験展示ー	44
・留学希望者向けセミナー	45
・サステナブル・キャンパスツアー	46
・第1回 サステナブル・キャンパス・コンテスト	47
・再生可能エネルギー国際シンポジウム	48
・Candlize2010	50
・シンポジウム「北の山で何が起きているのか：変容の持続的観測」	51
・国際シンポジウム「サステイナビリティー学教育のグローバルキャン パス化をめざして」	52
・CLARK THEATER 2010	53
・北海道地域医療シンポジウム	54
・「崩壊する地球生態系を救えるのか？」生態炭素と生物多様性の 鍵ー熱帯泥炭・森林ー	55
・シンポジウム「グリーンな福祉国家は可能かー社会保障・環境・ 経済の新しい連携ー」	56
・公開シンポジウム「都市・農村の地域連携を基礎とした低炭素社会 のエコデザイン」	57
・「子どもの未来可能性を大切に社会の実現をめざして」	58
・2011年アムール・オホーツクコンソーシアム第二回会合に向けた 国際ワークショップ	59
・第3回センチネルアース国際シンポジウムー衛星画像・データとGISの 新展開とその先進的利用ー	60
・国際講演・実習：顎関節症診断法の国際基準	61
・公開講座「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」	62
・環境政策セミナーー生物多様性保全と気候変動ー	63
・産学官セミナー「地理空間情報が拓く未来IIー自治体GISー」	64
・北海道海洋生物科学シンポジウム	65
・国際シンポジウム「子どもの貧困と対抗戦略ー研究・市民活動・ 政策形成」	66
・国際シンポジウム「持続可能な女性の健康のために：歴史の中の 避妊と中絶を問う」	67
・第14回アイヌ語弁論大会 イタカン ローーアイヌ語で話しま しょう！ー	68
・特別講演「高齢化社会における世代間正義と健康」	69
・市民フォーラム「サステナビリティ水産科学の理論と実践 ーあなただけいるから、私も生きていけるー」	70
・日本学術会議北海道地区学術講演会「北海道から発信するグリー ンイノベーション」	71
○平成22年度北海道地区国立学校等安全管理協議会に北大より担当職員が参加	72

○新化学物質管理システム部局管理者説明会を開催	73
○漕艇部「小艇庫」落成式の開催	74
○イルミネーション点灯式	75
○第50回全国七大学総合体育大会「公式マスコット」の決定！	76
○放射線障害防止のための教育訓練及びエックス線障害防止のための教 育訓練を実施	77
○「北海道ブロック大学等安全保障貿易管理説明会」の開催	78
○ビジネスEXPO「第24回 北海道 技術・ビジネス交流会」に参加	79
○平成22年度北海道大学国際産学官連携セミナーを開催	80
○北海道大学交流デー（長春）を開催	81
○海外大学とのコンソーシアム活動の報告：「大学同士のESDコンサル テーション」を実施	82
○2010年韓国大学生訪日研修団の本学訪問	83

部 局 ニ ュ ー ス

○附属図書館北図書館で「鈴木章名誉教授ノーベル賞受賞記念図書展示」 を開催	84
○水産学部附属練習船おしよ丸に対し内閣府から感謝状	85
○「法科大学院に関するアドバイザーグループ会議」を開催	86
○北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラ ブ・ユーラシア世界」が「国境フォーラム in 対馬」を開催	87
○経済学研究科・経済学部で「経済学部3年生、研究生のための大学院ガ イダンス」を開催	88
○経済学部で札幌国税局長の特別講演会を開催	89
○歯学研究科で動物供養祭を挙行	90
○北方生物圏フィールド科学センターで畜魂祭挙行	91
○薬学研究院・薬学部で「実験動物慰霊祭」を挙行	92
○平成22年度 薬学部成績優秀賞授与式を実施	93
○水産学部で北大ベンハロー賞授賞式を実施	94
○水産学部で体験学習教室「マクロ生物学への招待ーヤドカリの繁殖行動 を科学するー」を開催	95
○第一回AASPPアジア原子核反応データベース研究開発会議を北大に て開催	96
○「サイエンスカフェ in えりも」を開催	97
○農学研究院で市民公開・農学特別講演会「農学の連携」を開催	98
○メディア・コミュニケーション研究院公開講座「『学問的』読書の方 法」が終了	99
○観光学高等研究センター公開講座「旅の楽しさを考える」が終了	100
○総合博物館土曜市民セミナー「トリニダード トバゴ共和国の歴史と 文化、自然…常夏の島…」を開催	101
○教育GPワークショップ「博物館で個性が活かせる授業を創ろう！」 第2回（題材：植物）を開催	102
○第14回北海道大学教育GPセミナー「CoSTEPーこれまでとこれから ー」開催	103
○予科昭和23年入学同期会関係資料を大学文書館で受贈	104
○出征壮行会の「日の丸」寄せ書きを大学文書館で受贈	105
○資料見学会「平塚直治・直秀の『銹菌研究』来し方ー宮部金吾との師 弟結びつきを中心にー」を大学文書館で開催	106
○「消防訓練」の実施（歯学研究科、情報基盤センター、北キャンパ ス）	107

お 知 ら せ

○冬期間の駐車についての注意ー除雪・通行の障害となる駐車はやめましょうー	109
--------------------------------------	-----

レ ク リ エ ー シ ョ ン

○全道フットサル選手権札幌地区予選に出場	110
----------------------	-----

研 修

○平成22年度北海道地区大学等留学生担当職員研修	111
○平成22年度北海道地区国立大学法人等会計基準研修	111

表 敬 訪 問

	112
--	-----

諸会議の開催状況

	113
--	-----

学 内 規 程

	114
--	-----

人 事

○新任教授紹介	116
	117

資 料

○平成22年度外国人留学生数（平成22年11月1日現在）	118
○平成22年度国別外国人留学生数（平成22年11月1日現在）	119
○北大時報掲載記事事項別一覧（平成22年掲載分）	120

表 紙：総長室にてノーベル賞受賞報告（2010.12.15、関連記事2頁に掲載）

裏表紙：北の息吹④チシマキンレイカ（*Patrinia sibirica*）

全学ニュース

次期総長候補者として佐伯 浩 現総長を選出

佐伯 浩 現総長の任期満了に伴う次期総長候補者の選考が行われ、佐伯 浩 現総長が次期総長候補者として選出（再選）されました。

本選考は、国立大学法人北海道大学総長選考会議規程に基づく所定の手続きを経て、12月10日（金）開催の総長選考会議において、同会議委員の投票により行われたものです。

なお、任期は平成23年4月1日から平成25年3月31日までの2年となります。



佐伯 浩 現総長

（総務部総務課）

名誉教授 鈴木 章 氏，2010年ノーベル賞授賞式へ

いよいよ授賞式

10月6日のノーベル化学賞受賞決定から、鈴木章名誉教授と陽子夫人の生活は一変しました。もちろん、鈴木先生がよくおっしゃるように、「受賞前後で、気持ちは何も変わっていない」としても、数々の取材、公式行事など「人生で一番忙しい」日々を過ごされていることは確かです。

また、ご夫妻以外では特に、鈴木先生の研究室出身である宮浦憲夫特任教授、原正治教授、石山竜生准教授、山本靖典助教は鈴木先生の人柄や研究に関する取材、撮影、原稿執筆に追われたことでしょう。

随行者も、日本に残って様々な対応をした者も、全ての関係者が忙しくもやりがいのある日々を過ごし、いよいよ鈴木先生のノーベル賞授賞式を迎えることとなりました。

北大随行団

鈴木先生には、陽子夫人、長女の恵理子さん、次女の里香子さんの他、本学からは本堂理事・副学長、工学研究院から馬場研究院長、宮浦特任教授、原教授、石山准教授、山本助教、触媒化学研究センターから高橋教授、北大病院から横田助教、国際本部国際連携課から野田課長、佐藤係長、総務部広報課から菅原主任、佐々木係員が随行しました。

一連の行事に出席していたパデュー大学やストックホルム大学などの学長との意見交換など、今後のさらなる交流につながる有意義な場を作った執行部。鈴木先生に代わって研究内容をメディア向けに解説し、取材を受け、そして鈴木先生にも取材するなど大忙しだった共同研究者。ご夫妻のみならず、周囲の健康管理にも気を配ってくれた随行医師。手配関係、メディアなどとの渉外、記録などを担当した事務職員。ノーベル・ウィークを楽しみつつ、それぞれの役割を担えた良いチームでした。

ノーベル・アタッシェ夫妻との出会い

ストックホルムでは、ノーベル財団が任命するノーベル・アタッシェが財団のルールに則って、受賞者ご夫妻の案内役から日程管理その他全ての窓口となります。鈴木先生のアタッシェはカイ・レイニウス在日スウェーデン大使館参事官。本来は一度限りの任命ですが、流暢な日本語を話し、日本人受賞者に関する経験豊富な彼は何と5度目の任命。スウェーデン語通訳もこなし、特に奥様へのきめ細やかなサポートをしてくださった豊子夫人と共に、鈴木先生のご家族が安心して、ノーベル・ウィークを楽しめるように全力を尽くしていただいただけではなく、随行団にも温かなおもてなしをしてくださいました。日本を出発する前に、随行団の一部のメンバーとも会っていただき、ノーベル・ウィークとはどういうものか、どういう対応が必要なのかについて、ご教示いただいたことは、右も左もわからない私達にとって、とてもありがたいことでした。

ニュース発信の現場

世界中の関心事項としてニュースが発信されるノーベル・ウィークという国際的な現場で取材を受け、各国のメディアと会えたことも大変印象に残りました。

日本メディアの人数と取材の熱心さは他国を圧倒していましたが、それはおそらく、最近明るい話題が少ないということもさることながら、受賞対象となった研究内容のみならず、受賞者の人間性や国民が喜ぶようなエピソードを報道したいというメディアの熱意の表れなのだろうと思います。それだけに、随行団の広報・渉外担当者は、息の抜けない1週間でした。

鈴木先生とご家族

鈴木先生に随行させていただき、世界中の学者にとって憧れであるノーベル賞を受賞することがいかに素晴らしいことか、そしてここに至るまでの過程が並大抵の苦労ではなかったであろうことを肌で感じることができました。

しかし、その苦労を垣間見せることもなく、楽しそうに研究についてお話しされている先生の姿を拝見して、研究者としての素晴らしい体験を身近に感じることができました。

また、鈴木先生は受賞者として各行事に加えて、メディアからの個別取材に応じるなど多忙を極めていたにも関わらず、いつも真摯に対応されていたことが大変印象的です。陽子夫人共に相当お疲れだったはずですが、お二人ともいつも周囲を気遣われ、困っている人がいれば、率先して手を差し伸べられ、また、笑顔でユーモアを交えながら楽しい場をいつも作ってくださいました。お二人の素晴らしい人間性に触れ、感謝すると共に大変勉強になりました。

ノーベル・レクチャーや授賞式など、鈴木先生の研究の集大成となる場において、ご家族で喜びを分かち合っているその場所に共にいることができ、この上ない幸せを感じました。このような貴重な場に随行させていただいた鈴木先生にあらためて感謝申し上げます。

◆12月3日(金) 日本出発前夜、駐日スウェーデン大使主催祝賀会

新千歳空港につめかけた大勢の報道陣に見送られ、東京へ。

夕刻、ステファン・ノレーン大使夫妻主催のノーベル賞受賞祝賀会に出席されました。過去の受賞者である江崎玲於奈博士(1973年物理)、利根川進博士(1987年医学生理学)、白川英樹博士(2000年化学)、野依良治博士(2001年化学)、田中耕一博士(2002年化学)、小林誠博士(2008年物理学)各ご夫妻も出席され、これほど多くの日本人ノーベル賞受賞者が一同に会する場面はまさに圧巻です。鈴木先生、根岸先生ももちろん、受賞者たちは皆、分野を超えて楽しく語らい、高木義明文部科学大臣ら多数のゲストと共に、喜びを分かち合っていました。

また、大使夫妻と親交の深いピアニストの中村紘子さんが、ショパン「英雄ポロネーズ」などを演奏され、力強く情熱的な響きに、会場は大いに沸き立ちました。

鈴木先生は、謝辞と共に「ストックホルムで、懐かしい研究者仲間と会うことが楽しみ」と語られました。



歴代の日本人ノーベル賞受賞者が一堂に



ノレーン大使を囲んで乾杯

◆12月4日(土) 成田空港での出国会見、ストックホルム到着

鈴木先生、根岸先生の共同記者会見を成田空港にて行った後、同日夜にアランダ空港に到着。ストックホルム滞在中は、各受賞者ご夫妻に1台、ノーベル・マークが描かれた専用のリムジンが用意され、どこに行くにもこのリムジンに乗車することになります。そのリムジンが、ご夫妻を出迎え、ノーベル賞受賞者の定宿グランドホテルへ。

ホテルのエントランス前には、大勢の報道陣が待ち構えていました。鈴木先生は、「こっちは寒いね。今年は札幌も暖かいからね」と半日がかりの長旅の疲れの中、笑顔で答えられました。

ロビーには、今年のノーベル賞各賞のポスターが置かれるなど、6日(月)から始まるノーベル・ウィークに向け、準備が整えられて

いました。

翌5日（日），ご夫妻は休養などに充てられました。



成田での出国会見



ホテル前でにこやかに取材に応じる鈴木先生



受賞者に届く招待状

◆12月6日（月）ノーベル・ウィーク開始，「パリトキシシ」模型寄贈，随行団親睦会

鈴木先生ご夫妻が1日遅れで到着した工学研究院の面々とストックホルムで初対面。宮浦先生らは「日本では忙しくてなかなかお目にかかれませんが」と再会を喜びました。

午前中，ノーベル博物館で開かれる受賞者顔合わせに参加されました。歴代の受賞者に続いて，ノーベル・ファミリーの一員として迎えられる行事です。この時に，各受賞者は自身の研究などに関わりのある物を寄贈品として持参することになっています。鈴木先生の寄贈品は書籍「Organoboranes in Organic Syntheses」と，鈴木カップリングで作った代表的な分子「パリトキシシ」模型。

この模型を提案し，現地での組み立てを担当したのが山本先生。5個に分割した模型を組み立てている最中から，「素晴らしい寄贈品だ」との声が寄せられました。鈴木先生から完成品を寄贈すると，周囲からもひときわ目立ち，博物館側も大喜びでした。

その後，鈴木先生は館内のカフェで客が使う椅子座面の裏側にアルファベットで署名し，下に漢字でも名前を書かれました。この行事は，2001年の開館以来恒例となっています。

夜は，1722年創業の伝統的なスウェーデン料理店「Den Gyldene Freden」に鈴木先生ご夫妻がレイニウスご夫妻と随行団を招待してくださいました。店内の個室で，楽しく大いに盛り上がりました。特に，昔はよく皆でお酒を飲んでいたという研究室の面々に，鈴木先生は「宮浦さんも飲めるようになったか」「原は，昔強かったな」「石山，最近はあまり飲まないのか」「山本がこの中では一番強いのか」など懐かしく昔と変わらないであろうやりとり。受賞決定後，それぞれに忙しい日々を過ごし，初めて喜びを分かち合えた貴重な時間だったのではないのでしょうか。レイニウスご夫妻と北大随行団との顔合わせの場ともなり，現地でお互いのコミュニケーションを円滑にする良い機会ともなりました。カイさんが美声でスウェーデンの歌を披露してくれたり，豊子さんが料理の説明をしてくれたり，本当にとっても楽しい時が流れました。



ノーベル博物館職員に「パリトキシン」模型を説明する鈴木先生



椅子の裏にサインをする鈴木先生

◆12月7日(火) 王立科学アカデミー主催記者会見、レセプション

朝から行われたスウェーデン王立科学アカデミー本部での記者会見では、物理学、化学、経済学賞の各受賞者が初めて揃う記者会見となりました。各国のプレスからの質問が寄せられる中、日本メディアの関心が日本人受賞者の鈴木先生、根岸先生に集中し、質問が相次ぎました。

お二人は若者へのメッセージとして、好きな分野を追い続ける大切さを強調されました。鈴木先生は「私たちが受賞できたのは幸運だった。炭素と炭素をつなぐことで、様々な新しい

物質を作ることができる。重要で面白い分野で、若い人にはもっと関心を持ってもらいたい」と話されました。授賞理由となった有機化学について「医薬品や液晶の材料など新しい物質をたくさん作り出せるのが面白い。日本はこの分野に強く、さらに活発になる」と分析、夢中になった分野を追い続けた人生を振り返られました。

夕刻からスウェーデン王立科学アカデミー本部で開かれたレセプションでは、ノーベル化学賞の選考委員でもあるストックホルム大学のヤン・ベックバル教授、またスクリプス研究所のK.C.ニコラウ博士など鈴木先生とも親交の深い有名化学者が数多く出席しており、随行団と共に、鈴木先生も久しぶりの化学談義を大いに楽しまれているようでした。

その後のディナーにはご夫妻と随行医師として横田先生が出席され、夜遅くお嬢様お二人が現地入りされました。



王立科学アカデミー主催の記者会見



記者からの質問に答える鈴木先生



パデュー大学フランス・A・コルドバ学長（左）とクリスチャン・J・フォスターディレクター（右）

◆12月8日（水）ノーベル・レクチャー，ノーベル賞コンサート

鈴木先生ご夫妻は，随行団より一足早くホテルを出発し，ノーベル・レクチャー会場となるストックホルム大学の講堂アウラ・マグナへ。

この日は，ストックホルム入りしてから一番の晴れ模様。明るい日が差す中，長女の恵理子さん，次女の里香子さんも我々と共にバスに乗り込み，会場へ向かいます。

講演タイトルは，「Cross-coupling Reactions of Organoboranes: An Easy Way for C-C Bonding」。堂々と，落ち着いていつもどおりに講演される鈴木先生ですが，いつもと違うのは，ノーベル・レクチャーという最高の晴れ舞台であるということ。学生や市民ら約1,200人の聴衆を魅了されました。

鈴木先生による2010年ノーベル・レクチャーの概要は，以下のとおりです。

「1965年から，我々は有機ホウ素化合物を利用する有機合成に関する研究を北大で続け，多くの成果を報告してきたが，1970年代の後半頃から遷移金属触媒の存在下，有機ホウ素化合物と有機ハロゲン化合物のクロス・カップリング反応でC-C結合を作ること考えていた。

しかし有機ホウ素化合物の反応性が低く，カップリング反応を実現することができなかった。その後，パラジウム触媒と塩基の存在下，総ての種類有機ホウ素化合物が多く有機ハロゲン化合物と反応し，期待するC-C結合を作ることが可能であることが明らかになった。この反応の一つとして有機芳香核同士を結合させる反応があるが，この反応は製薬化学，

農薬化学の分野だけでなく，多くの分野で世界的に利用されている。

例えば，スイスのノバルティスファーマが販売するバルサルタン（一般名）は大変優れた血圧降下剤で，世界で約2,200万人が使っている。また，ドイツの化学会社BASFは殺菌剤の製造に，日本のチッソなどは液晶製造に利用しているほか，有機ELのポリマー材料などの製造が検討されている」。

レクチャー後は，ストックホルム大学の学生らがステージ下に詰めかけ，科学アカデミーが作成した記念ポスターを片手に，鈴木先生を取り囲みサインを求めました。鈴木先生は「何枚サインが必要？ 3枚？ OK」と終始笑顔で若者たちの求めに応じられました。

ノーベル・レクチャーの原稿やスライドは事前に科学アカデミーや財団以外に渡すことは厳禁とされています。しかし，日本メディアは締め切りの関係で，講演後すぐに記事を書かなければならず，専門的な内容を理解することが困難となります。そこで，講演終了後にステージ前で山本先生から，講演概要を日本メディア向けにわかりやすく解説し質問にも応じてもらいました。

講演後にはノーベル化学賞受賞の3人が揃って，各国メディアが集まるノーベル財団主催の記者会見に出席され，「日本では定年になったら自分のリサーチを続けることはまず不可能で，続けられるのはレアケース。それが日本の組織の悪いところだ。米国では定年はない。自分で資金を集められれば，研究を続けられる」と述べられました。

夜には，市内中心部のコンサートホールで，恒例のノーベル賞コンサートが開かれました。米クラシック界の人気男性バイオリニスト，ジョシュア・ベル氏がロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団とともにチャイコフスキーのバイオリン協奏曲を熱演。インディアナ州出身のベル氏。パデュー大学もインディアナ州ということで，鈴木先生，根岸先生は大いに喜ばれたようです。



ノーベル・レクチャー前の鈴木先生と
根岸英一パデュー大学特別教授、
リチャード・F・ヘックデラウェア大学名誉教授
©The Nobel Foundation 2010



鈴木先生によるノーベル・レクチャー



聴衆を引き込む鈴木先生の発表
©The Nobel Foundation 2010

◆12月9日(木) 日本大使主催昼食会, 日本メディア向け記者会見, ノーベル財団レセプション
渡辺芳樹駐スウェーデン日本大使主催昼食会

がグランドホテルで開かれ、大勢の現地日本人も参加し、鈴木先生はサインや記念撮影に応じられました。

その後、日本メディア向けの記者会見に出席され、ストックホルム到着以来の慌ただしい数日間を振り返るとともに、今後の研究への意欲を語られました。鈴木先生は「受賞が決まってからこんなに忙しかったのは初めて。もう帰りたい」としながらも「帰国後は論文執筆や講演もあるなど、賞を受けるのは大変なことだと改めて感じている」と述べられました。

鈴木先生は恩師で1979年ノーベル化学賞受賞者の故ハーバート・C・ブラウン博士から生前、ご自分と根岸先生を「ノーベル賞にノミネートした」と聞いていたが、博士が亡くなり「受賞は期待していなかった」というエピソードを披露されました。

夕刻からは、ノルディック博物館にて、ノーベル財団主催のレセプションが開かれました。入場の際には招待状と共にパスポートなどのID提示も求められる警備の厳しいもの。天井が高く、厳粛な雰囲気漂う会場で、鈴木先生は随行団やシカゴ大学の山本尚教授、マサチューセッツ工科大学のグレゴリー・C・フー教授、東北大学の山本嘉則教授、京都大学の杉野目道紀教授などと歓談や記念撮影を楽しまれました。



謝辞を述べる鈴木先生



大勢の現地日本人在住者から喜びの声



鈴木先生、根岸先生揃って笑顔の記者会見



幻想的なレセプション会場



鈴木先生ご夫妻、レイニウスご夫妻と

◆12月10日（金）授賞式、晩餐会

授賞式、晩餐会ともに男性は燕尾服、女性はロング・イブニングドレスまたは民族衣装で、招待状とID提示を求められます。

鈴木先生は、ホテル出発前に、家族写真や随行団との記念写真を撮影。

会場は、一昨日訪れたコンサートホール。華やかさに厳かな雰囲気加わり、ステージ床には鮮やかで深いブルーの絨毯に金色でNに丸模

様。陽子夫人とお嬢様二人は、1階2列目中央の家族席に、随行団は他の受賞者の随行者と共に、3階席ステージ向かって右手に着席。ステージは少し遠いですが、全体がよく見渡せます。

授賞式は、物理学、化学、医学生理学、文学、経済学の順番に行われ、スウェーデン語と英語で選考理由が読み上げられた後、カール16世グスタフ国王自ら、記念の金メダルとディプロマを受賞者一人ずつに手渡されます。各賞の授賞が終わる毎に、音楽の生演奏で、ますます荘厳な雰囲気となります。

いよいよ鈴木先生が授与される時、随行団もピンと背筋を伸ばします。鈴木先生は他の受賞者同様に国王、アルフレッド・ノーベルの銅像、聴衆に3回お辞儀。メダルは直径66mm、約200g。化学賞のメダルの表にはアルフレッド・ノーベルの肖像、裏にはラテン語が彫られ、古代ローマの叙事詩からの引用といわれる「人生が技芸の発明によって美しくなるのを快く眺めんことを」という文言と共にA. Suzukiと彫られています。

鈴木先生は、式終了後も、ステージ上で関係者と談笑したり、記念撮影に応じられていました。

その後は、市庁舎に移動し、1階「青の間」で晩餐会に出席となります。会場入口のクローク前には、約1,300名分の座席表である小冊子が山積みされており、招待客はこの表を頼りに自分の席を見つけます。出席者の使用言語や人間関係など、細かなバランスを見ながら、席を決めるのだそうです。注目の食事メニューについては、ノーベル賞と同様、発表当日まで極秘とされますが、今年は、前菜「カモのテリーヌ」、魚料理「白身魚のトリュフ入りブラウンソース」、デザート「チョコレートのオレンジババロア」で、料理に合わせた飲み物が彩ります。料理の合間にミュージカルなどの余興もあり、リラックスした雰囲気の中、約1,300名の食事をテーブルごとに瞬く間に給仕するスタッフの姿はまさに圧巻です。ホールスタッフは300人以上とも言われます。

晩餐会の後は、2階の「黄金の間」で恒例の舞踏会が催されます。フォーマルというよりは派手で激しい音楽に合わせて多くの招待客が踊ります。鈴木先生ご夫妻は別室にて、カール16世グスタフ国王、シルヴィア王妃に謁見された後、ホテルへ戻られました。



授賞式前に鈴木先生と随行団一同



授与後、ステージで満場の拍手を受ける鈴木先生
©The Nobel Foundation 2010



カール16世グスタフ国王からメダルとディプロマを授与
©The Nobel Foundation 2010



授賞式後、ディプロマと共に

◆12月11日（土）文部科学大臣主催昼食会，王宮バンケット

鈴木先生，根岸先生両ご夫妻で，高木義明文部科学大臣主催の昼食会に出席されました。

昼食会に先立って報道陣の取材に応じた鈴木先生は，「いつもと同じだよ」とおっしゃいながらも，リラックスした満面の笑顔。「昨夜は疲れたけど，晚餐会は料理もおいしくて楽しかった。日本ではなかなかできない経験だしね」。さらに「僕は医師も同行しているし，ぐっすり寝て体も問題ないけれど，報道の皆さんは風邪などひかないように」と気遣われました。

ノーベル賞をもう一度取りたいか，との質問には「impossibleでしょう」と笑顔でコメント。

夜は王宮バンケットに鈴木先生ご夫妻が出席され，深夜にホテルへ戻られました。お疲れにもかかわらず，テレビカメラにもこやかに対応。翌日日本に帰国されるからか，ご夫妻共ほっとした表情に見えました。



高木文部科学大臣を囲んで

◆12月12日（日）ストックホルム出発，12月13日（月）成田空港・新千歳空港での帰国会見

午前中，ホテルで日本の新聞各社による合同取材。メダルやディプロマを見せてほしいとのリクエストに応じられ，ノーベル・ウィークを終えての感想や帰国後にしたいことなどを答えられました。

午後には，随行団が一足早く，そして鈴木先生ご夫妻は約1時間後に専用リムジンにてアーランダ空港に到着し，飛行機内で合流しました。機材トラブルや雪害のため，定刻より少し遅れたものの翌13日夕方，成田空港に到着し，少しの休憩を挟んで，会議室で帰国後初の記者会見を開催しました。「現地で知らない人から

もおめでとうと声をかけられ，嬉しかった」，「国王からメダルを渡されたときは本当に感動した」，「子供たちに理科の大切さを知ってもらうのが私の責任」など，笑顔でコメントされました。

新千歳空港到着後は，到着ロビー前にメディアだけではなく，一般の方も大勢集まりました。「無事，色々な行事も終わりました。受賞の発表以来，長い間お世話になり，ありがとうございました」。「（北海道の）皆さんに喜んでもらえて非常に嬉しい」と話され，「私にとって一番はやはりノーベル・レクチャー」と，ストックホルムでの日々を振り返られました。道内の研究者や学生に対しては，「札幌は研究都市として非常にいい環境にある。田舎だからなんてエキスクーズにならないから頑張してほしい」とエールを送られました。



日本の新聞各社による取材でメダルを披露



成田空港での帰国会見



新千歳空港での帰国会見

◆12月15日(水) 総長表敬

鈴木先生は、佐伯総長への授賞式報告のため、本学を訪問されました。ノーベル・メダルとディプロマを披露されてから、北欧に詳しい総長と現地での様子などについて懇談され、メダルのレプリカ二つを大学に寄贈してくださいました。一つは総長室に、もう一つは総合博物館に展示される予定です。



メダルとディプロマを前に総長と懇談

鈴木先生、このたびのノーベル化学賞受賞、本当におめでとうございます。

高い志と夢を持って、自分のやりたいことを純粹誠実に続けることの大切さ「精進努力」を、本学の学生、教職員のみならず世界中の人々の心に強く響かせてくださいました。

ご夫妻の益々のご健康を祈念申し上げますと共に、このたびの随行という栄誉に心から感謝申し上げます。

(北大随行動：文責 本堂)

北海道大学「サステイナブルキャンパス推進本部」を設置

環境への負荷の少ない持続的発展が可能な社会に貢献する環境配慮型キャンパス（サステイナブルキャンパス）の整備を図るために、必要な施策の企画及び立案を行うことを目的とした「サステイナブルキャンパス推進本部」（本部長：本堂武夫 理事・副学長）を、総長直属の運営組織として11月1日に設置しました。

同推進本部には、①キャンパスアセスメント部門（部門長：小篠隆生 工学研究院准教授）及び②環境負荷低減対策推進部門（部門長：羽山広文 工学研究院教授）の2部門を置き、サステイナブルキャンパスの整備に係る基本計画

及び環境管理活動に関する参加型プログラムの立案、サステイナブルキャンパスに関する評価、国内外の大学との連携強化等を図り、「持続可能な社会づくり」におけるリーディング・ユニバーシティとなることを目指します。また、同推進本部の庶務は施設部が担当します。

11月29日（月）に佐伯浩総長直筆の看板上掲式が挙行され、佐伯総長、本堂理事・副学長、施設・環境計画室コアメンバー、施設部職員等が出席しました。



サステイナブルキャンパス推進本部上掲式

（施設部）

中国 上海海洋大学と大学間交流協定を締結

12月1日(水)、中国の上海海洋大学との学術交流に関する協定及び学生交流に関する覚書の調印が行われました。調印式には、上海海洋大学から潘 迎捷学長ら6名、本学からは佐伯浩 総長、本堂武夫 理事・副学長、飯田浩二 水産科学研究院教授、都木靖彰 同教授ら7名が出席しました。

上海海洋大学の歴史は1912年の江蘇省立水産学校に始まります。現在では8つの学部を有す

る総合大学に発展し、14,000人の学生と1,100人の教職員が在籍しています。本学では、2005年に水産科学研究院が同大学と部局間交流協定を締結して交流を深めてきました。

これまでの交流実績を踏まえ、今後全学的な交流を推進していくために、上海海洋大学との間で大学間交流協定が締結されました。この協定締結により、両大学の交流が一層深まっていくことが期待されます。



署名を終えて握手する佐伯総長と潘学長



調印式後の記念写真

(国際本部国際連携課)

栞原幹典 名誉教授が平成22年度原子力・放射線安全管理功労表彰受賞

本学 栞原幹典 名誉教授が、平成22年度原子力・放射線安全管理功労表彰において、「放射線安全管理功労者」として文部科学大臣賞を受賞され、11月8日（月）に表彰式が行われました。

本表彰は、原子力・放射線安全に尽力して優れた成果を挙げた個人または事業所等を表彰することにより、関係者の更なる意欲の向上と原子力の安全確保及び核物質管理に関する国民の理解の増進に資することを目的として、（財）原子力安全技術センター、（財）日本分析センター、（社）日本アイソトープ協会が主催し、文部科学省の後援により実施しているものです。

同氏は昭和44年から平成7年まで北海道大学獣医学部において放射線安全管理の実務に携わり、さらに平成8年から平成19年にかけて同大学院獣医学研究科において放射性同位元素等取扱主任者として放射線安全管理に尽力されました。平成16年度からは、3年間本学放射性同位

元素等管理委員会委員長を務め、北海道大学放射線障害予防規定の見直しを始め、放射線安全管理体制の構築ならびに安全教育等に尽力されました。

同氏の放射線安全管理への貢献は学内に留まらず、平成18年から平成20年まで日本アイソトープ協会北海道支部会の支部長として、北海道内の放射線取扱施設の主任者に対する教育と啓発を行い、平成19年10月には日本アイソトープ協会主催放射線取扱主任者全国大会を会長として開催し、北海道地区のみならず国内全体に渡る放射線安全管理の普及にも尽力されました。

現在も国立大学法人弘前大学科学技術振興調整費「地域再生人材創出拠点の形成」被ばく医療プロフェッショナル育成計画事業（平成22～26年度）において、弘前大学客員教授として、原子力施設の放射線安全管理・緊急被ばく対策とその人材育成に活躍されています。

略 歴 等

昭和44年	北海道大学大学院理学研究科博士課程中退
昭和44年	北海道大学獣医学部助手
昭和56年	北海道大学獣医学部助教授
平成8年	北海道大学大学院獣医学研究科教授
平成19年	北海道大学名誉教授
平成22年	弘前大学客員教授



受賞後の様子

（獣医学研究科・獣医学部）

平成22年度科学研究費補助金審査委員表彰に本学から2氏 —理学院 片倉晴雄教授と工学研究院 森田隆二教授—

科学研究費補助金の配分審査を行っている独立行政法人日本学術振興会では、審査の質を高めるため、同会設置の学術システム研究センターにおいて、審査終了後、審査結果の検証を行い、その結果を翌年度の審査委員の選考に反映させています。

さらに平成20年度からは、検証結果に基づき模範となる審査意見を付した審査委員の表彰を実施しており、今年度は約5,000名の第1段審査（書面審査）委員の中から39名が選ばれ、本学からは理学院 片倉晴雄教授と工学研究

院 森田隆二教授の2氏が表彰の対象となりました。

本学の研究者から表彰対象者が選ばれるのは、表彰制度が設けられて以来、初めてとなります。

表彰の伝達式は11月16日（火）に行われ、岡田尚武 理事・副学長（研究担当）から片倉教授へ表彰状と記念の楯が手渡されました。また、森田教授は急用が入り伝達式に出席できなかったため、後日、馬場直志工学研究院長から表彰状等が手渡されました。



岡田理事・副学長から片倉教授（右）へ記念の楯の伝達



岡田理事・副学長と片倉教授（右）



馬場工学研究院長から森田教授（右）へ
記念の楯の伝達



馬場工学研究院長と森田教授（右）



表彰状



記念の楯

（学術部研究協力課）

法学研究科 道幸哲也教授が厚生労働大臣表彰（「厚生労働行政功労者に対する表彰」及び「労政行政関係功労者に対する表彰」）を受賞

法学研究科の道幸哲也教授が、平成22年11月23日付けで「厚生労働行政功労者」及び「労政行政関係功労者」として2種類の厚生労働大臣表彰を受賞しました。

厚生労働行政功労者に対する表彰（厚生労働大臣表彰）は、同氏が、昭和63年から北海道地方最低賃金審議会の公益代表委員として、また平成17年からは同審議会の会長として、長きに渡り同審議会の円滑な運営と北海道の最低賃金の決定に貢献された功績が顕著と認められたも

のであり、12月3日（金）に北海道労働局長から表彰状が授与されました。

労政行政関係功労者に対する表彰（厚生労働大臣表彰）は、労政行政に係る施策の推進等に顕著な功績があった者に対する表彰であり、北海道労働委員会委員（昭和57年5月～現在）、北海道労働委員会会長（平成20年12月～現在）を務められている同氏の功績が顕著と認められ、11月26日（金）に高原陽二 北海道副知事から表彰状が授与されました。



略 歴 等

昭和47年 3 月	北海道大学大学院法学研究科修士課程（民事法）修了
昭和47年 4 月	北海道大学法学部助手
昭和50年 4 月	小樽商科大学商学部講師
昭和51年10月	小樽商科大学商学部助教授
昭和58年 4 月	北海道大学法学部助教授
昭和60年 6 月	北海道大学法学部教授
昭和63年 3 月	法学博士（北海道大学）
平成12年 4 月	北海道大学大学院法学研究科教授

（法学研究科・法学部）

平成22年度医学教育等関係業務功労者表彰, 本学から2氏が受賞

本年度の医学教育等関係業務功労者として、
本学から北海道大学病院看護部 副看護師長
萬木ゆき江 氏、北海道大学病院診療支援部 主
任臨床検査技師 伊藤敬子 氏の2氏が表彰さ
れ、11月30日(火) ホテルフロラシオン青山に
おいて、表彰式が行われました。

この表彰は、文部科学省が毎年、医学または
歯学に関する教育・研究若しくは患者診療等の
補助的業務に従事し、顕著な功労のあった方々
に対して行うものです。

2氏の表彰に当たっての感想を紹介します。

(総務部広報課)

○萬 木 ゆき江 氏

(北海道大学病院看護部 副看護師長)



この度、医学教育等
関係業務功労者として
の推薦を看護部長より
お話があり戸惑いまし
た。このような受賞を
頂ける実績は自分には
無いとの思いがあり、
なぜ私がとの感情でし
た。看護部長とお話す

る場を設けていただき、患者さんが心地よく日
常生活を送れる看護の提供に対しての実践と、
後輩への指導に対しての評価のお言葉を頂きま
した。

私は昭和49年4月、北海道大学医学部附属病
院に勤務し、最初は皮膚科病棟に勤め、その後
は第二外科、手術部、第一内科、材料部、そし
て皮膚科・形成外科・放射線科が最終の病棟と
なりました。その間、一時健康を害し6ヶ月ほ
どの入院生活を送ることになり、病棟と看護部
には多大な迷惑をかけてしまいました。当時は
とても負い目を感じていました。職場復帰の際
には看護部の体調に配慮した人事のもと、徐々
に元の勤務に戻る事が出来ました。患者とな
り、患者の家族の思いにも触れた体験は、その
後の看護に活かしていったと思っています。そ
して、この35年間、医学の進歩の他、看護記録
ひとつとっても、黒表紙に万年筆の時代からス

タートした私は、めまぐるしい医療環境の変化
に着いて行くのに必死でした。精神的にも辛く
なり仕事を続けられるだろうか迷った時期も
ありました。しかし、職場の数多くの皆様の支
えと、そして患者さんの看護を通し看護職なら
ではの学びがあり、なにより看護が好きだった
から頑張れたのだと思います。

母は他界しましたが、「おまえは最後まで頑
張れる子だ」と小さい頃から私に話していまし
た。表彰式に出席し、あらためて受賞の重さ
を感じ、これまでの指導と支援をしてくださっ
た方々に感謝しつつ、心で「母さん、最後まで勤
めたよ」と伝えました。

退職まであと少しとなる中、このような身に
あまる受賞に感謝と、この受賞にご尽力いた
だきました看護部長を始め関係各位の皆様
に心より深くお礼を申し上げます。ありがとう
ございました。

○伊 藤 敬 子 氏

(北海道大学病院診療支援部 主任臨床検査技師)



この度医学教育等関係業務功労者表彰という身に余る賞を頂き、大変光栄に思いながらも、賞に値する職責を果たせていただろうか、検査・輸血部が品質管理システムとして掲げる方針に沿って努

力をしたでしょうか、私以上に長年検査部を支えてきた同僚がいる中で年長の一人としての指名もあわせて頂いたものだろうか、など複雑な思いで式典に臨み、その栄に浴してまいりました。

全国からの受賞者にお会いして受賞の重みを強く感じることができました。

表彰にあたり、ご推薦を頂いた検査・輸血部長、診療支援部長に心から感謝いたし、厚くお礼を申し上げます。

私は、北大病院検査部で36年間、生化学、血液、免疫血清の検査業務に従事させて頂きました。採用当時は用手検査が主流で、自動測定機器が導入され始めた頃でしたが、情報処理の急速な進歩に伴い、検査処理も迅速化が進み、現在では診療前検査管理加算に対応できる体制になり、今後更に発展するものと確信しております。

改めて在職してからの検査の変貌に思いを巡らせると、今では不要になってしまった検査で、苦勞したことが次々と懐かしく思い出され、検査に従事した期間の長さを感じます。

検査部の仕事以外では大学内でのセクシャルハラスメント相談員の任をいただき戸惑いの数年を経験したり、ICT（感染制御チーム）、NST（栄養サポートチーム）のメンバーとして立ち上げから参加させていただき、微力な私が、他職種の方々と仕事が出来たことは、大変貴重な思い出です。

これまで仕事を続けることが出来、賞まで頂けましたのも諸先輩のご指導、同僚のお力添えがあったのものと皆様に深く感謝申し上げます。

(北海道大学病院)

電子科学研究所 竹内繁樹教授らが大和エイドリアン賞を受賞

電子科学研究所 竹内繁樹教授が、英国ブリストル大学 オブライアン・ジェレミー (Jeremy O' Brien) 教授と共同で研究を行った「光子を用いた量子情報科学技術-ミクロな領域を支配する基本物理原理である量子力学を利用した新技術の開発」の功績により、第7回大和エイドリアン賞を受賞されました。

本賞は、英国王立協会のフェローからなる審

査委員会の選考により、3年に一度、日本と英国のグループによる顕著な共同研究業績に対して贈られます。

今回は、本共同研究を含む6件の日英間共同研究チームに対し、2010年12月2日にロンドンの英国王立協会において授与されました。

受賞にあたっての同氏の功績等を紹介します。

略 歴 等

平成3年3月 京都大学理学部卒
平成5年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了
平成5年4月 三菱電機中央研究所（後に先端技術総合研究所に改組）研究員
平成11年10月 北海道大学電子科学研究所講師
平成12年7月 博士（理学）（京都大学）
平成12年9月 北海道大学電子科学研究所助教授
平成19年6月 北海道大学電子科学研究所教授

功 績 等

物質の基本要素である原子や、光の最小単位である光子などのミクロの世界は、「量子力学」という、通常私たちが経験する古典力学とは異なる物理法則によって支配されています。今回受賞の対象となった量子力学を利用した新技術の開発では、この量子力学の性質を利用することで、現在のコンピュータでは時間がかかりすぎて解けない問題を解ける「量子コンピュータ」や、物理法則に基づいて通信の安全性を保证する「量子暗号」、さらに、「古典理論」の限界を大きく超える「量子計測」などを実現することが期待されています。

竹内教授らとオブライアン教授らは、光子を一粒ずつ操る「光量子ゲート」素子を開発、それらを組み合わせることで、量子もつれ合いを抽出する世界最大級の「光量子回路」を2009年に実現しました (Okamoto et. al., Science 323, 483 (2009))。また、4つのもつれ合った光子を用いた干渉装置により、光位相測定 of 標準量子限界 (古典理論による限界) を超えることに2007年に成功 (Nagata et. al., Science 316,



英国王立協会での授賞式
左から竹内教授、エイドリアン卿夫人、オブライアン教授

726 (2007))。この研究は、将来の超高感度光センサーの開発につながる成果として、米国科学雑誌サイエンティフィックアメリカン (日本版名: 日経サイエンス) により、2007年の世界ベスト50研究に選ばれています。

竹内教授は、海外研究開発動向調査に係わる調査研究として2001年豪州クィーンズランド大学に2ヶ月間短期滞在した時にオブライアン教授と知り合い、以来親交を深めました。オブライアン教授は、日本学術振興会による研究者招聘制度や、大和日英基金の支援などで、6ヶ月間の滞在を含め多数回本学に来学、共同研究を進展させました。オブライアン教授は2006年にブリストル大学に異動、現在はヨーロッパを代表する量子情報科学技術の研究者であり、現在ブリストル大学量子フォトンクスセンターのセンター長を務めています。

今回の受賞は、本共同研究のさらなる飛躍に繋がるとともに、本学のブリストル大学を初めとする英国科学界との交流の深化と発展の機会となると期待されます。

(電子科学研究所)

平成22年度一般会計経済危機対応・地域活性化予備費（本学関係分）の 主要事項，平成22年度補正予算（第1号）案（本学関係分）の主要事項

平成22年度一般会計経済危機対応・地域活性化予備費における実施予定事業の主要事項は，次のとおりです。

事 項	摘 要
経済危機対応・地域活性化予備費（平成22年9月24日閣議決定） 【施設関連】 [施設整備費補助金] ○マリンサイエンス実験棟（水産） ○フィールド科学実験棟改修（北方圏）	1,150㎡ (950㎡) ※（ ）は改修面積を表す。

平成22年度補正予算（第1号）案（本学関係分）における実施予定事業の主要事項は，次のとおりです。

事 項	摘 要
第1号（平成22年10月26日閣議決定） 【設備関連】 [設備整備費補助金] ○環境・エネルギー物質ナノ・ミクロ3D診断システム（工学） ○水産生物顕微解剖リアルタイム教育システム（水産） ○放射線デジタル画像管理システム（病院） ○先端医療技術から先端生命科学への展開－動体追跡技術から動体追跡科学へのプロジェクトを推進するために必要な設備（仮称）（医学） 【施設関連】 [施設整備費補助金] ○図書館改修（図書館）	(8,790㎡) ※（ ）は改修面積を表す。

（財務部主計課）

AO入試合格者の発表

平成23年度AO入試は、募集人員68名に対し、153名の出願があり、自己推薦書、個人評価書等の出願書類による第1次選考合格者115名に対して、11月21日(日)に第2次選考の課題論文と面接試験を実施し、12月7日(火)に

合格者発表が行われ、41名が合格しました。

なお、大学入試センター試験を課す医学部及び工学部の合格者発表は、2月8日(火)を予定しています。

平成23年度AO入試合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	志願者数	倍率	第1次選考合格者	合格者
理学部	物理学科	5	6 (2)	1.2	5 (2)	0
	化学科	8	20 (7)	2.5	17 (6)	8 (5)
	生物科学科(生物学専修分野)	5	15 (7)	3.0	11 (7)	4 (3)
	地球惑星科学科	5	7 (3)	1.4	7 (3)	3 (2)
医学部	医学系	5	21 (14)	4.2	8 (7)	
	保健看護学専攻	7	20 (15)	2.9	20 (15)	
	学系作業療法学専攻	4	1 (1)	0.3	1 (1)	
歯学部		5	12 (2)	2.4	10 (2)	5 (2)
工学部応用理工系(応用マテリアル工学コース)		4	3 (2)	0.8	2 (2)	
水産学部		20	48 (12)	2.4	34 (10)	21 (6)
計		68	153 (65)	2.3	115 (55)	41 (18)

※ () 内は、道内高校出身者で内数

(学務部入試課)

帰国子女入試合格者の発表

平成23年度帰国子女入試は、11学部・学科等に58名の出願があり、出願書類による第1次選考合格者29名に対し、11月21日（日）に第2次選考の課

題論文と面接試験を実施し、12月7日（火）に合格発表が行われ、13名が合格しました。

平成23年度帰国子女入試合格者数等一覧

学部・学科等			募集人員	志願者数	第1次選考合格者	合格者
文	学	部	若 干 名	10 (5)	6 (4)	2 (2)
教	育	学		5 (2)	1	1
法	学	部		7 (4)	4 (2)	2 (2)
経	済	学		5 (2)	2 (1)	0
理 学 部	数	学		0	—	—
	物	理		0	—	—
	化	学		0	—	—
	生 物	生物学専修分野		0	—	—
	科学科	高分子機能学専修分野		1 (1)	1 (1)	1 (1)
	地 球	惑星科学科		0	—	—
医 学 部	医	学		7 (4)	5 (3)	0
	保 健 学 系	看護学専攻		1 (1)	1 (1)	0
		放射線技術科学専攻		0	—	—
		検査技術科学専攻		0	—	—
		理学療法学専攻		0	—	—
		作業療法学専攻		0	—	—
歯	学	部		0	—	—
薬	学	部		3 (2)	0	—
工 学 部	応	用		0	—	—
	情 報	エレクトロニクス系		6	2	2
	機 械	知能工学系		4	1	1
	環 境	社会工学系		1	1	0
農	学	部		5 (3)	4 (3)	4 (3)
獣	医	学		2 (2)	0	—
水	産	学		1	1	0
計				58 (26)	29 (15)	13 (8)

※ () 内の数字は女子で内数

(学務部入試課)

大学入試センター試験 本学一般入試個別学力検査等 実施体制等の決定

11月24日(水)開催のアドミッションセンター企画運営会議・総務部門・試験場部会合同会議において、平成23年度大学入試センター試験及び本学一般入試個別学力検査等に係る実施体制等を決定しました。

なお、大学入試センター試験については、平成23年度から藤女子大学、天使大学、東海大学北海道キャンパスに加え、北海道武蔵女子短期大学との共同開催となります。

主な事項は、次のとおりです。

(大学入試センター試験)

1 実施本部の設置

試験実施について総括し、連絡・調整するため実施本部を設け、その下に総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を置く。

2 試験場及び担当学部 (札幌市)

試験場・会場	試験場所	担当学部等
北海道大学試験場		
農学部会場	農学部	農学部
人文・社会科学総合教育研究棟会場	人文・社会科学総合教育研究棟	※法学部・経済学部
理学部会場	理学部	理学部
工学部会場	工学部	工学部
高等教育推進機構A会場	高等教育推進機構E棟2F	※教育学部・文学部
高等教育推進機構B会場	高等教育推進機構E棟3F	※薬学部・歯学部
高等教育推進機構S会場	高等教育推進機構S棟	※医学部・獣医学部
藤女子大学試験場	藤女子大学	藤女子大学・天使大学・東海大学

(担当学部等欄の※印は、複数学部で担当する試験場の主担当学部を示す。)

(函館市)

試験場	試験場所	担当学部
北海道大学水産学部試験場	水産学部	水産学部

3 試験場関係者の集合及び解散時刻

試験関係者	1月15日(土)・1月16日(日)	
	集合時刻	解散時刻
1 実施本部、広報部	7時30分	本部長の指示による
2 総務部	7時10分	〃
3 救急医療部	8時10分	〃
4 連絡部	7時00分	連絡部会責任者の指示による
5 試験場責任者、試験場責任者補佐、試験場部員、試験場事務担当者	7時30分	本部長の指示による
6 室内監督者	8時40分	試験場責任者の指示による
7 リスニング監督補助者(15日(土)のみ)	16時45分	〃
8 室外監督者	8時10分	〃
9 連絡員	7時00分	連絡部会責任者の指示による

なお、監督者説明会を1月7日(金)に学术交流会館で開催しますので、監督者等となった方は出席願います。

(本学一般入試個別学力検査等)

1 実施本部の設置

試験実施について総括し、連絡・調整するため実施本部を設け、その下に総務部、出題部、採点部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を置く。

2 試験場及び担当学部

前期日程

試験場	試験場所	担当学部
第1試験場	農学部	農学部
第2試験場	人文・社会科学総合教育研究棟	※文学部・教育学部
第3試験場	理学部	理学部
第4試験場	工学部	工学部
第5試験場	高等教育推進機構 E 棟 2F	※経済学部・法学部
第6試験場	高等教育推進機構 E 棟 3F	※歯学部・薬学部
第7試験場	高等教育推進機構 S 棟	※獣医学部・医学部

(上記7試験場で受験者を収容できない場合、別の試験場を設けることがある。)
(医学部医学系受験者は第7試験場に割り当て、2月26日(土)は医学部が担当する。)

後期日程

試験場	試験場所	担当学部
第1試験場	農学部	農学部
第2試験場	人文・社会科学総合教育研究棟	※法学部・経済学部
第3試験場	理学部	理学部
第4試験場	薬学部	薬学部
第5試験場	歯学部	歯学部
第6試験場	工学部	工学部
第7試験場	高等教育推進機構 E 棟	医学部
第8試験場	高等教育推進機構 N 棟	獣医学部
第9試験場	高等教育推進機構 S 棟	※教育学部・文学部
第10試験場	水産学部	水産学部

(担当学部等欄の※印は、複数学部で担当する試験場の主担当学部を示す。)

3 試験場関係者の集合及び解散時刻

前期日程

試 験 関 係 者		2 月 25 日 (金) ・ 26 日 (土)		
		集 合 時 刻	解 散 時 刻	
1	実施本部, 広報部	7 時 20 分	本部長の指示による	
2	総務部	7 時 10 分	〃	
3	出題部	各系責任者・補佐	8 時 30 分	〃
		教科・科目責任者	各担当科目の試験開始の 30 分前	
		部員	各担当科目の試験開始の 10 分前	
4	採点部	採点部会責任者の指示による		
5	救急医療部	8 時 00 分	本部長の指示による	
6	連絡部	7 時 20 分	〃	
7	試験場責任者, 試験場責任者補佐, 試験場部員, 試験場事務担当者	7 時 20 分	〃	
8	室内監督者	8 時 15 分	試験場責任者の指示による	
9	室外監督者	7 時 50 分	〃	
10	連絡員	7 時 20 分	連絡部会責任者の指示による	

後期日程

試 験 関 係 者		3月12日（土）	
		集 合 時 刻	解 散 時 刻
1	実施本部，広報部	7時50分	本部長の指示による
2	総務部	7時20分	〃
3	各系責任者・補佐	9時00分	〃
	教科・科目責任者	各担当科目の試験開始の30分前	
	部員	各担当科目の試験開始の10分前	
4	採点部	採点部会責任者の指示による	
5	救急医療部	8時30分	本部長の指示による
6	連絡部	7時50分	〃
7	試験場責任者，試験場責任者補佐， 試験場部員，試験場事務担当者	7時50分	〃
8	室内監督者	8時50分	試験場責任者の指示による
9	室外監督者	8時20分	〃
10	連絡員	7時50分	連絡部会責任者の指示による

なお、監督者説明会を前期日程は2月21日(月)、後期日程は3月9日(水)に高等教育推進機構大講堂で開催しますので、監督者等となった方は出席願います。

(学務部入試課)

大学入試センター試験志願者数の発表

—本学会場は札幌地区試験場5,240人，函館地区水産学部試験場391人が受験—

このたび，大学入試センターから，平成23年1月15日（土）・16日（日）に実施される平成23年度大学入試センター試験の確定志願者数が発表されました。

志願者総数は558,983人で，前年度より5,615人，1.0％増となっています。

志願者の内訳は，高等学校等卒業見込み者が前年度より2,272人（0.5％）増の442,420人，高等学校等卒業者が3,558人（3.3％）増の110,211人，その他，高等学校卒業程度認定試験合格者等・高等専門学校第3学年修了者等が

215人（3.3％）減の6,352人となっています。

また，男女別では，男子が前年度より2,457人（0.8％）増の320,716人，女子が前年度より3,158人（1.3％）増の238,267人となっています。

なお，このうち本学が担当する志願者の内訳は，札幌地区の試験場（藤女子大学試験場は含まない）の人数は，5,240人（うち女子1,785人）で，函館地区の水産学部試験場の人数は，391人（うち女子48人）となっています。

（学務部入試課）

「北海道大学進学相談会 in 東京・大阪・名古屋」 の開催

本学主催の学部受験生向け説明会「北海道大学進学相談会」を、11月6日(土)名古屋、11月7日(日)大阪、11月13日(土)東京で開催しました。

この相談会は平成19年度に東京で初めて開催し、今年度で4回目になります。今年度は逸見勝亮 理事・副学長、脇田稔 理事・副学長をはじめ、各学部やアドミッションセンターの教職員、在学生等、3会場合わせて約80名が、高校生や保護者への説明・相談に当たりました。

各会場では、最初に脇田理事・副学長の挨拶の後、小内透アドミッションセンター副センター長による本学概要と総合入試についての説明があり、引き続き個別ブースに分かれて受験

生等からの相談対応となりました。

また、今年度はノーベル化学賞の受賞が決定した鈴木章名誉教授から受験生にあてたビデオメッセージやノーベル賞記念コーナーが特設され、熱心に見入る来場者の姿が見られました。

来場者数は名古屋275名、大阪524名、東京812名、計1,611名(昨年度比約17.8%, 243名増)にのぼり、特に大阪、東京会場では昨年度を大きく上回りました。

来場者からは「副学長先生が優しく話しかけてくれたので嬉しかった」、「先生方が熱心なのに感銘しました」等の感想が寄せられ、成功のうちに幕を閉じました。



副学長と話そうコーナー



入試・総合相談



鈴木名誉教授特設コーナー



盛況の会場内



北大生と話そうコーナー



学部ブース

(アドミッションセンター)

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、法人化後の厳しい財政状況の下、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自律性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っていくこととしています。

期限を付さない、息の長い募金活動を行うこととしていますが、平成18年から平成23年までの5年間で15億円から25億円の募金額を目指しています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

【北大フロンティア基金情報】

基金累計額 (11月30日現在)

10,219件 1,840,663,090円

教職員の寄附率 24.5% (941件/3,842人)

<11月のご寄附状況>

法人等1社、個人50名の方々から12,538,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲載、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

なお、基金累計額には、北海道大学国際交流事業基金より移し替えた2億円を含んでおります。

寄附者ご芳名

(個人)

有江 幹男, 池田 明穂, 稲垣 直人, 入谷 信昭, 岩本 章, 上野 昌美, 大鋸 友紀,
大畑 昇, 小内 透, 柏木 博, 角 幸博, 喜多 司郎, 栗原 正仁, 小長井奎幸,
蛇川 雄司, 杉浦 秀一, 鈴木 泰, 瀬名波栄潤, 園 信太郎, 高橋 光彦, 土家 琢磨,
寺澤 睦, 所 伸一, 豊田 威信, 野坂 政司, 早坂 孝一, 坂東 幸春, 本間 修,
望月 哲男, 山形 知子, 横山 和美, 吉田 広志

銘板の掲示 (20万円以上のご寄附)

(個人)

有江 幹男, 望月 哲男, 山形 知子

ご寄附のお申し込み方法

① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。

北大ホームページ > 教職員向け > 学内限定情報・システム > 北大フロンティア基金のご案内(申込書)

<http://www.hokudai.ac.jp/jimuk/gakunai/fund.pdf>

② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡しします。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ ———— 基金事務室 (事務局 1 階・学内電話 2012 / 2017)

(基金事務室)

(財) 北海道大学クラーク記念財団への寄附

このたび、(財)北海道大学クラーク記念財団から、出村克彦名誉教授よりご寄附を賜った旨ご報告がありましたので、謹んでお知らせいたします。

同財団につきましては、毎年、本学の教育・研究及び学生支援のため、多額の助成事業を実

施していただいております。本学といたしましても、このたびのご厚志に対しあらためて感謝を申し上げます。

なお、ご芳名の掲載につきましては、ご本人の同意を得ておりますことを申し添えさせていただきます。

(総務部総務課)

サステナビリティ・ウィーク2010の開催

サステナビリティ・ウィーク2010を振り返って

サステナビリティ・ウィーク2010 実行委員長
国際担当理事・副学長 本堂 武夫

今年で4回目となる「北海道大学サステナビリティ・ウィーク」は、昨年よりさらに包括する学問分野と扱う課題の多様性が増し、世界に類を見ないユニークな社会貢献・国際交流週間へと成長し、本学を代表する行事として発展しています。

2010年のテーマは「ひとり一人がすこやかに人間らしく生きる社会を目指して」でした。このテーマの下、10月25日（月）から11月7日（日）までの2週間に、38の行事を集中的に開催しました。これに、ウィーク前後を合わせると、47の行事が集いました。

【今年の特徴】

今年の特徴は、サステナビリティを考える上で、より焦点を絞ったテーマを掲げました。そのテーマは、自然環境や社会環境の議論が多かったこれまでのサステナビリティ・ウィークを鑑み、人間にスポットを当てたものにしたことです。

大量消費社会の限界が見えている今日、持続可能な社会を実現するためには、国の豊かさや国民の幸せの指標をGDP（国内総生産）のような量を競う指標から、ひとり一人が身体的、精神的、社会的に良好な状態（well-being）や生活の質（Quality of Life）に求める議論が最近盛んに行われています。

また、ひとり一人の健康や生活は、社会の仕組みや自然環境の影響を受け、逆に人間の活動はそれらに影響を与えます。このような視点で、健康、生態系、貧困、少子高齢社会を切り口に、自然界も含めた人間社会の持続可能性を考えようと、「ひとり一人がすこやかに人間らしく生きる社会を目指して」というテーマを掲げました。

【企画の全体像】

テーマに呼応し連日開催された行事は実に多様で、国際シンポジウムをはじめ、市民向けのセミナー、博物館展示、映画上映、ディベート大会、学生研究ポスターコンテストといった例年行事に加え、学生の発想を競う企画コンテストや実験サイトを巡るツアー、アイヌ語弁論大会、廃油から作ったキャンドル点灯、二酸化炭素の排出削減に向けた自転車タクシーの運行など、様々な方法で人類共通の課題を考える機会が設けられました。

【協定校との連携】

人間の存続（持続性）を脅かす課題は一国一地域では解決ができず、「連携」が重要になります。そこで毎年、海外の大学間交流協定校に対し、ウィークへの参加や行事の共同開催を積極的に働きかけています。

今年は、この1年間に協定を締結した比較的新しい大学との連携を強化しようと、ダルハウジー大学（カナダ）、マレーシア科学大学、ミュンヘン工科大学（ドイツ）、四川大学（中国）、ポーランド科学技術大学（ポーランド）、延世大学校（韓国）から代表者を招き、各大学におけるサステナビリティの取り組みを、紹介いただきました。これは、学生にとっては短期留学を考える機会、教員にとってはサマープログラムなど教育における協働を考える良い機会となったと好評でした。

特にダルハウジー大学のキース・タイラー副学長には、10月25日（月）に開催したオープニング・シンポジウムの基調講演において、カナダの企業から卒業生をぜひ就職させたいと引き合いの多い同大のサステナビリティ教育について、その精神と体系をご紹介いただき、本学の今後の全学教育や大学院共通講義のあり方を考える上で、大変参考になりました。今後も、「サステナビリティ」を共通テーマとして協定

大学と交流を続け、協働事業を行うなど互いの関係をより強固にしていきたいと考えています。

【北海道大学とサステナビリティ】

130余年の歴史を通じた北海道大学の基本理念は「フロンティア精神」「実学の重視」「全人教育」そして「国際性の涵養」です。これを時代の要請に照らし合わせると、持続可能な社会の実現に貢献する人物の輩出と言えるでしょう。

そのような文脈から2008年に、本学がホスト校の一つとなって札幌市で開催したG8大学サミットは、一つの大きな節目でした。世界35大学の代表がここ札幌市に集まり採択した『札幌サステナビリティ宣言』の中で、「大学が持続可能な社会の原動力となる」と誓ったことを具現化するため、北海道大学はサステナビリティを軸とした研究と教育をますます加速させています。

【来年に向けて】

『札幌サステナビリティ宣言』を具現化する一つの方策として、2011年も引き続きサステナビリティ・ウィークを10月24日（月）から開催する予定です。今年集まった同志が、これから1年間の研究成果と活動成果を持ち寄る機会となるよう、北海道大学はしっかり準備をしたいと思います。そして新たな仲間にも加わっていただき、持続可能な社会の実現に向けた取り組みが、これまで以上に世界規模で活発になるような、きっかけと場を提供したいと考えております。

開催レポート

サステナビリティ・ウィーク2010オープニングシンポジウム 北海道大学「持続可能な発展」国際シンポジウム 「ひとり一人がすこやかに人間らしく生きる社会を目指して ～わたしたちが直面する危機の原因を包括的に探る～」

期 日：10月25日（月）～26日（火） 場 所：学術交流会館

4年目を迎えるサステナビリティ・ウィーク2010のオープニング行事として、北海道大学「持続可能な発展」国際シンポジウムを10月25日（月）と26日（火）に開催しました。

冒頭のオープニングセレモニーでは、佐伯浩総長の挨拶の後、文部科学省の藤嶋信夫国際統括官より「当ウィークを通じて持続可能な社会の担い手づくりの観点から議論がされるよう期待している」と祝辞をいただきました。

続いて本学の本堂武夫 理事・副学長が、本学の基本理念と、持続可能な社会を実現するためのサステナビリティ・ウィークの役割の重要性について講演しました。

基調講演では、前年に大学間交流協定校となったカナダのダルハウジー大学のキース・F・テイラー副学長が、「経済と環境はともに極めて複雑なシステムであり、一元管理は出来ない。持続可能な未来への道は教育により開かれるものだ」と述べ、ダルハウジー大学でのサステナビリティの取組についての紹介を行いました。

その後、特別プログラムとして、2010年のノーベル化学賞を受賞した、鈴木章北海道大学名誉教授の受賞を祝す会を急遽開催しました。

はじめに佐伯総長のお祝いの言葉があり、続

いて、共同研究者であった宮浦憲夫 工学研究院特任教授、触媒を使った物質変換の研究をしている日本人学生や留学生がお祝いを述べた後、教職員の代表から花束が贈られました。

最後に鈴木先生からメッセージがあり、ご自身の専門である化学の分野でも、持続性のある社会づくりを目指して、環境を汚さない方法で化学の務めを果たすための研究が盛んになっているとの紹介がありました。

そして、「政府や大学の努力に加え、ひとり一人がサステナビリティの精神を肝に銘じ協力していくことが大切であり、時機を得た北海道大学の取り組みの発展に期待している」とのお言葉がありました。

セレモニーに引き続き行われたシンポジウムでは、今年のテーマである「ひとり一人がすこやかに人間らしく生きる社会を目指して」、我々が直面する危機の原因を包括的に探る試みが行われました。

初日は健康・環境・社会政策の3つの側面から、2日目は、午前中に「こども」、「生態系」、「水」、「少子高齢社会」の4つの分科会に分かれて討論が行われた後、午後の全体会にて総合討論が行われました。



ダルハウジー大学キース・F・テイラー副学長による基調講演



鈴木名誉教授のノーベル賞受賞を祝う会

全体会および分科会のセッションおよび協力部局は以下のとおりです。

初 日：全体会

セッション1：自然と社会の健康への影響（環境健康科学研究教育センター，保健科学研究院）

セッション2：生態系劣化と生活劣化（地球環境科学研究院）

セッション3：社会のしくみと生活（公共政策大学院）

2 日目：分科会

セッション1：社会の持続的発展の次世代主体－いまある「こども」の危機－（教育学研究院）

セッション2：ユーラシア・エコトーン帯：モンゴルにおける生態系の持続的利用
（地球環境科学研究院）

セッション3：世界の水の危機とWell-being（工学研究院）

セッション4：高齢社会の健康と介護：幸せとは？（医学研究科，環境健康科学研究教育センター）



湯浅誠氏と中島岳准教授の対談
(全体会セッション 3)



2 日目の午後の総合討論の様子

「少子化と持続可能な未来」

期 日：9月25日（土）

場 所：学術交流会館

代表者：医学研究科 教授 玉城 英彦

本学と協定校からなる国際コンソーシアムは昨年度以来、「持続可能な発展」における健康の社会文化的な側面について共同研究を実施しており、とくに少子化に関わる出生率について、グローバルかつ各国独自の視点から検討しています。今回は、国内の研究者および一般市民向けの講座として、「少子化と持続可能な未来」というテーマで国際シンポジウムを開催し、保健医療の視点から捉える「持続的発展」とは何かについて、国内外の大学および研究機関から少子化・人口問題の専門家を招いて活発な議論を展開しました。

シンポジウムではまず、少子化の進んだ先進国の事例として、「日本の少子化社会の現状と課題」「韓国における少子化の課題：持続可能な未来への難局か好機か」「スイスの持続可能な社会に少子化はどのように関連するか」の3題について各国の専門家が講演をし、それぞれに対して米国、タイ、スリランカの専門家が指定発言をしました。その後の討論では、少子化時代における持続可能な社会の構築に向けて参

加者全員で総合的な議論が交わされ、次の4点が将来の議論を展開する主要項目として座長により提示されました。

- ①健康が保障されるようになり、長くなった寿命に対する価値が大きくなったのは、文化や人間を含めた社会の要請によるものである。
- ②寿命が延び、健康的な生活を送ることができる期間が長くなったのは、公衆衛生が発展し、医療従事者の貢献によるものが大きい。
- ③個人および社会の資源分配が加速し、その方向性が示されることは、経済や家族、社会が期待していることである。
- ④スイスのような国では、国内外の人口移動が出生率に影響している。

最後に、サステナビリティ・ウィーク2010を通して、一般市民および国内外の専門家を交えて少子化と持続可能な未来に関する活発な議論をすることができたのは非常に大きな成果であり、少子化のみならず高齢社会も考慮した持続可能な未来構築に向けてさらなる活動が期待されます。



全体討論



会場風景

サイエンスカフェ「地球の調べ方・カフェ」(第一夜～第三夜)

期 日：10月13日(水)～10月15日(金)

場 所：Sapporo55ビル インナーガーデン

代表者：地球環境科学研究院 教授 山中 康裕

地球の調べ方実行委員会は、サステナビリティ・ウィーク プレイベントとして、10月13日(水)から10月15日(金)に、三夜連続で『地球の調べ方・カフェ 2010年 秋 ～「北海道の自然」や「秋を感じる生き物」の世界をのぞいてみよう!～」と題したサイエンスカフェを札幌駅前の紀伊國屋書店インナーガーデンで行いました。

第一夜の13日(水)は『「雪虫」ってどんな虫?～短い命でも上手につなぐ“いのちのリレー”、そこにある不思議で賢い生き方～』というタイトルで、ゲストに農学研究院 秋元 信一 教授を迎えて、「ユキムシの生き方を知ること、交配して子を残すことの意味を考える」ことをテーマに扱いました。

第二夜の14日(木)はゲストにさっぽろ自然調査館のみなさんをお迎えし、『「自然を調べる、森を育てる、生き物の姿を伝える」仕事の魅力 ～まずは、「どんぐり」の話から始めま

しょう!～」というタイトルで、ゲストが実践する「調べる、育てる、伝える」仕事の面白さ、大変さ、魅力について伝え、考える場をつくりました。

第三夜の15日(金)はゲストに地球環境科学研究院 露崎史朗 准教授(現・教授)を迎えて、タイトルに『ダメージをうけた地域に、植物はどのように戻ってくるのか ～「有珠山」「経営を終えたスキー場「あなたの足もと」に生きる植物たち～」と題して、植物の植生攪乱がどの様に回復するのか、そして、人為的に破壊してしまった植生をどの様に戻していけばよいのか、などをテーマに扱いました。

各所にて独自の広報を行った結果、平日の夜にも関わらず、会場は三夜とも大盛況になりました。また、カフェの最中では参加者からの質問なども活発に行われました。三夜とも、ゲストの研究の奥深さ、そしてそのゲストの人柄が伝わる素敵なサイエンスカフェになりました。



第一夜



第二夜



第三夜

経済学部主催 第7回プレゼン・ディベート大会

期 日：10月16日（土）

場 所：人文・社会科学総合教育研究棟

代表者：経済学研究科 准教授 高木 真吾

今年で第7回目を迎えた経済学部主催プレゼン・ディベート大会は、今回テーマを「農業再生～ビジネスの新しいデザイン～」としました。7月には大会に先駆けセミナーを開催し、研究者、実務家から「農業再生」を考える上でのレクチャーを受けました。

大会は初参加の農学部チーム、公共政策大学院チームなど13チームがエントリーしました。各チームは「農業再生」を多面的方向から、知力をつくして様々な提言案を示し、6時間余りにおよぶ熱い戦いを繰り広げました。また、今大会から新たに昼休みの時間を利用して「ポスターコンテスト」を催しました。力作の資料を試合だけではなく、このような形で公開することで参加者にとっても試合とは別な楽しみ方ができたのではないのでしょうか。オーディエンスも多方面から集い、試合後のフロアーからのコメントも活発に行われました。

数々の熱戦を繰り広げ、今大会を制したのは、優勝「takait（経済学部高井ゼミ）」、準

優勝「公開秘密結社（経済学部橋本ゼミ）」、三位「HDC（北海道大学ディベート部）」、ポスターコンテスト優勝「しゃべくり倶楽部（HOPS）」という結果でした。優勝チームは念願の初優勝を飾った高井ゼミチーム。試合を重ねるごとにパワーを増し、たくましいチームワークで勝利を勝ち取りました。準優勝はユニークな政策論で攻めた橋本ゼミチーム。初のポスターコンテストを制したのは公共政策大学院チームでした。

本行事は学部生と大学院生が一緒に作り上げる行事であり、他学部からの出場も定着してきました。この催しを通じて、学部生・大学院生両者ともコミュニケーション能力・プレゼンテーション能力を研ぐ良い機会となりました。様々な分野の方々のご協力を得、多くの方々の聴講をいただき、参加者は100名を超え、盛況のうちに大会を終えることができました。

来年もこれまで同様、学生たちに思考を喚起させる行事にしていきたいと考えています。



プレゼンテーションを行う出場チーム



ポスターコンテスト

市民向け講座：北海道大学サステナビリティ・フォーラム

期 日：10月22日（金）

場 所：学術交流会館

代表者：サステナビリティ・ウィーク2010事務局

サステナビリティ・ウィークのプレ・イベントとして、10月22日（金）夜に市民向けのフォーラムを北海道新聞社と共催しました。

「すこやかに人間らしく生きる社会を目指して」と題したこのサステナビリティ・フォーラムには、札幌市民ら約250人が参加し、18時半開始にもかかわらず学術交流会館の大講堂に多くの観客が集まりました。

プログラムは2部構成とし、第1部は「北のコンパクトシティ～持続可能な都市へ向けて～」と題して、工学研究院 瀬戸口剛教授が話題を提供し、佐藤のりゆき客員教授と農学院博士課程1年の河原愛さんを交えてディスカッションを行いました。

第2部は「すこやかに人間らしく生きるための死生観」と題して、文学研究科 宇都宮輝夫教授が話題を提供し、佐藤客員教授と公共政策大学院修士課程2年の茂木美早穂さんがコメントを添えました。

休憩時間には、茂木さんが所属する学生団体

SCSD（The Students Council for Sustainable Development in Hokkaido University）が持続可能な社会の実現のためにできることを多くの人に考えて欲しいという想いをこめて制作した映像『New Life, New Challenge』を上映しました。

ディスカッションのコーディネーターは北海道新聞社取締役広告局長の田村雄司氏が務める一方、総合司会は文学部4年の能登あすみさんが担うなど、全体として学生の活躍が印象に残るフォーラムとなりました。

来場者アンケートによると、本学への期待として、北海道を基盤とした未来社会の形成に務めて欲しいといった意見が多く見られました。また、サステナビリティ・ウィークへの期待としては、もっと市民が入り込んでいける企画を増やして欲しいといった意見が顕著であり、今後も引き続き市民に向けて研究成果や本学の動向を分かりやすく伝えることの重要性を認識しました。



フォーラムのポスター



第2部の様子
 (右から佐藤客員教授、宇都宮教授、茂木さん、北海道新聞 田村氏)

みんなで考えようー身近な環境と子どもの健康ー

期 日：10月24日（日）

場 所：学術交流会館

代表者：環境健康科学研究教育センター センター長 岸 玲子

環境健康科学研究教育センターが平成22年4月に設立となり、その設立記念として、10月24日（日）に市民公開講演会「みんなで考えようー身近な環境と子どもの健康ー」を開催いたしました。

総合司会の環境健康科学研究教育センター 半田康 特任助教の開式挨拶にてはじまり、環境健康科学研究教育センター 宮下ちひろ 学術研究員が「環境と子どもの健康に関する北海道スタディ」のこれまでの研究結果をもとに、環境化学物質が引き起こす健康影響について「私たちを取り巻く身近な環境」として講演し、続いて環境健康科学研究教育センター 荒木敦子 学術研究員が「シックハウス症候群の原因解明のための全国規模の疫学研究」のこれまでの研究結果をもとに、室内汚染による健康問題や室内の汚染物質について「子どもの健康はおうちの健康から」として講演しました。

次に、札幌市保健福祉局保健所の矢野公一 所長から、札幌市保健所、区保健センター、衛生研究所の共同制作DVDの上映後、札幌市における喫煙率や妊娠中の喫煙・受動喫煙、乳幼児の受動喫煙、受動喫煙対策について「パパ、ママ、タバコやめて！小さな命のために」としてご講演いただきました。

そして、医学研究科産科・生殖医学分野教授、環境健康科学研究教育センター兼任の水上尚典教授が、小さな赤ちゃんの出生率の増加、それによって懸念される病気について「生まれてくる赤ちゃんへー産科医からのメッセージ」として講演し、続いて環境健康科学研究教育センターの岸玲子センター長が「環境と子どもの健康に関する北海道スタディ」の概要と結果について、環境省エコチル研究の概要、当センターの理念と活動について「環境と子どもの北海道スタディの成果と今後の環境省全国調査について」として講演しました。

最後に、教育学研究院人間発達科学分野教授、環境健康科学研究教育センター副センター長兼任 河口明人教授、保健科学研究所創成看護学分野教授、環境健康科学研究教育センター副センター長兼任 齋藤健教授の司会で、会場に集まっていた参加者の方々から質問を募集し、その質問に講演者がパネラーとして答える形で総合討論を行いました。

多数の様々な質問が会場から寄せられたため、パネラーが質問に答えながら、活発に意見交換をし、それを興味深く聞き入る参加者の方々から関心の高さがうかがえ、有意義な市民公開講演会となりました。



講演中の岸玲子センター長



総合討論の様子

グリーン回路とシステムに関する国際ワークショップ

期 日：10月25日（月）

場 所：情報科学研究科

代表者：情報科学研究科 教授 宮永 喜一

10月25日（月）に，“グリーン回路とシステムに関する国際ワークショップ”が開催されました。本ワークショップでは，最先端無線ネットワークで世界的に著名なProf. Magdy A. Bayoumi（Director, The Center for Advanced Computer Studies, University of Louisiana at Lafayette, U.S.A.）〈マギィ バヨミ教授（アメリカ，ルイジアナ大学 ラファイエット 高度コンピューター科学研究センター 所長）〉を招聘し，“Wireless Sensors Networks: Challenges and Opportunities”（ワイヤレスセンサーネットワーク：課題と未来への可能性）と題して基調講演をいただきました。また，2人目の招聘者として，Prof. Eryk Dutkiewicz,

Dr.（Department of Electronic Engineering, Macquarie University, Sydney, Australia）

〈エリック ダッキウィクズ教授（オーストラリア，マッコーリー大学工学部）〉を招き，“Development of a wireless body area network platform for implantable medical applications”（医療応用のための人体領域用無線ネットワークシステムの開発）としてご講演いただきました。

その後，参加学生による最新の成果発表等も企画し，セミナー形式だけではなく，次世代情報通信システムやマルチメディアシステムの最新技術に関する活発な意見交換が行われ，活気あふれるワークショップとなりました。学生による発表題目は以下の通りです。

- （１） Robust Speech Recognition by Mr. Yiming Sun（雑音に強い音声認識）
- （２） Speech Recognition using Stochastic DTW by Mr. Yuxin Zhang（確率的DTWによる音声認識）
- （３） Low Power Design of MIMO-OFDM by Mr. Jaeseong Kim（MIMO-OFDMの低消費電力設計）
- （４） Advanced MIMO-OFDM by Ms. Nicole Shi（次世代MIMO-OFDM）



エリック教授による講演



バヨミ教授による講演

自転車タクシーDEおしゃべり & ECO

期 日：10月25日（月）～10月31日（日）

場 所：北海道大学構内

代表者：環境科学院 修士1年 藤部 拓己

■行事概要

本企画は学生企画です。「ペロタクシー」（自転車タクシー）を活用して、①サステナビリティ・ウィーク2010（SW2010）の参加者の皆様と会話し交流を図ること、②環境配慮型の乗り物であるペロタクシーによる利用者の環境意識向上を目的として行われました。本企画は大きく準備段階（5月～）と運行段階（10月～）に分けられます。準備段階においては、車体に掲載するSW2010の広報デザイン案の作成から決定までの一連のプロセスを通して、合意形成を学ぶなど、企画から実際の運行までに様々な学びがありました。

運行段階になると、10月1日（金）から24日（日）までは「SW2010」と「北海道大学」がデザインされた車体が札幌市内を走り、学外に北海道大学でSW2010が行われることをアピールしました（運行は委託による）。SW2010のオープニングセレモニーに合わせて25日（月）からは学生の運転で学内を運行し31日（日）まで、観光客の方等にご乗車いただきました。

また準備・運行期間中は新聞やラジオに出演し広く取り組みを知ってもらい、非常に多くの方にご乗車頂くことができました。

車体の借入や運行方法の研修において、札幌市内でペロタクシーを運行しているNPO法人エコ・モビリティ サッポロ様にご協力頂きました。また企画進行全般にわたり環境科学院GCOEプログラムに支援を頂きました。



構内を走るペロタクシー

■成果

学内運行期間中は1週間で約150組、計300名近くの方にご利用頂きました。市民や海外の方、学生、研究者による利用があり、特に市民の方とドライバーの会話の中でサステナビリティウィークについての質問が出て説明するという場面が多くありました。また、広告を掲載した車体は非常に多くの注目を集め、写真や動画に収められサステナビリティウィークの認知度向上に貢献しました。

さらに利用者の声には「ゆっくり走りながら景色を見ることができて良い」、「CO₂を排出せずクリーンで、学内の自然環境にマッチしている」といった声もあり、環境について考える機会となったと考えられます。

■今後の展開

広い学内の移動手段として利用される方が多く、サステナビリティウィークの期間以外にも運行して欲しいという声を多数頂きました。今後利用者の声を分析し、試験的な運行を継続して行い、北大の環境への実践的な取り組みとして、学内の新しい交通手段として、ペロタクシーの活用の道を考えていきたいと考えています。



皆で記念撮影

第5回フェアトレードフェア

期 日：10月25日（月）～11月6日（土）

場 所：北海道大学生協同組合 生協会館店

代表者：法学部2年 国際協力学生団体「結～yui」プロジェクトリーダー 橋田 史奈

今回私たち「結～yui」では、サステナビリティ・ウィーク2010（SW2010）に伴い「フェアトレードフェアVol.5」を10月25日（月）～11月6日（土）の期間、生協会館店で開催しました。更に「フェアトレードフェアVol.5」の開催に伴い、10月27日（水）にフェアトレード People Treeの元社員である中田裕子氏を講師として招き、講演会を開催しました。サステナビリティ・ウィークの企画としての「結～yui」での「フェアトレードフェア」主催は、昨年に続き2度目です。

今回の「フェアトレードフェアVol.5」では、本学近郊にあるフェアトレードショップ「みんたる」より商品を委託させていただき、生協会館店の協力により同店で開催されました。商品は、チョコレートやコーヒーなどの食品やキーホルダー・置物などの雑貨を主に販売しました。

また、講演会はフェアトレードについての知

識を深めるとともに、フェアトレードの認識を広めていくという目的で開催しました。ただ講演を聞くのではなく、参加者も発言できるような講演会となりました。「フェアトレードフェアVol.5」の総売上は79,458円、講演会への外部からの参加は8名という結果になりました。

今後の展開としては、現時点では次の「フェアトレードフェア」開催の細かな目途はたっていません。

しかし、私たちはこのような活動を継続することに意味があると考えています。活動を継続することによって、少しでも多くの方にフェアトレードについて知ってもらい、世界の現状について考えてほしいと思っています。

明言はできませんが、「フェアトレードフェアVol.6」を開催したいという思いを持っています。その場合は、今回あまり達成できなかった購買意欲をあげる広報・企画などについてさらに考えていきたいです。



フェアトレード商品の陳列



商品を見る買い物客

第2回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト

期 日：10月26日（火），11月2日（火）

場 所：学術交流会館

代表者：サステナビリティ・ウィーク2010事務局

第2回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテストが，10月26日（火）と11月2日（火）の2回に分けて，学術交流会館ホールにて開催されました。本コンテストは，学生が今取り組んでいる研究を「持続可能な社会づくり」という観点から捉え直し，研究分野の異なる人に分かりやすく伝えるよう推奨するものです。「持続可能な社会づくり」という壮大なテーマと，自らの研究がどのようにリンクをしているのか，今一度考えてみようとして，多くの学生がコンテストに参加しました。

第2回目となった今年は，全学から学部生2名，修士課程42名，博士課程49名の，76チーム93名が参加し，2週に分かれて審査が行われました。

審査にあたっては，全学から61名の教員と，ポスター発表者ら80名の学生が参加しました。1枚のポスター発表につき，教員3名，学生2名の5名が審査をし，総得点375点でスコアを争いました。今年の特徴は，発表者とは異分野の研究者が審査を担当することになりました。

発表を終えた学生からは，「異分野の人に自分の研究を説明する難しさを学ぶことが出来た」「多分野の人に研究を見てもらうことで，新しいアイデアを得ることが出来，また大変刺激になった」などと，今回の参加が大変役に立ったとのコメントが寄せられました。また，審査員を務めた教員からも，「分野外の学生の発表は知的な刺激になった」「大変面白い経験だった。学ぶことが多かった」という声を聞くことが出来き，発表者にとっても，審査員にとっても，共に充実したディスカッションが行われたことがうかがえました。

11月5日（金）には，学術交流会館第1会議室にて授賞式が執り行われ，「第2回北海道大学サステナビリティ研究ポスター賞」を受賞した37チーム42名に賞状と副賞が手渡されました。

来年も，この「北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト」は引き続き開催する予定です。理系・文系を問わず，全学からの学生の参加をお待ちしています。



口頭発表の様子

【所属部局別参加者数】

環境科学院 40人／農学院 17人／保健科学院 11人／工学院 10人／水産科学院 4人／
 経済学研究科 3人／国際広報メディア・観光学院 2人／歯学研究科 2人／
 文学研究科 1人／公共政策大学院 1人
 歯学部 1人／農学部 1人

【北海道大学総長賞（最優秀賞）受賞者一覧】

農学院	Nareethep Ruangthip・内田 裕夏	・・・健康・公衆衛生分野
保健科学院	高島 理沙	・・・社会的な絆・文化・平和分野
文学研究科	長坂 邦仁	・・・政策・社会制度分野
環境科学院	三原 義広	・・・経済・産業・エネルギー分野
環境科学院	石丸 夏海・関口 郁恵	・・・食料・水分野
農学院	Arshana Nor Noorul Amin	・・・食料・水分野
環境科学院	遠藤 寿	・・・地球環境・生態系分野



本堂理事・副学長より賞状・副賞を授与



受賞者の集合写真

インフルエンザなどの人獣共通感染症を克服する～統合科学実験展示～

期 日：10月26日（火）～11月3日（水） ※11月1日（月）を除く

場 所：総合博物館

代表者：総合博物館 教授 松枝 大治

10月26日（火）～11月3日（水・祝）の8日間、総合博物館において「インフルエンザなどの人獣共通感染症を克服する～統合科学実験展示～」と題して企画ブースを出展し、市民に人獣共通感染症に関する最新の研究現場に関わる内容を展示するとともに、統合科学としての意味合いを強く持つ研究分野の紹介を行いました。人獣共通感染症を克服するには、獣医学、医学、生物学、情報科学、理学など様々な学問分野が力を合わせなければ不可能であることを展示および今回作成したビデオの中で示しつつ、人獣共通感染症への理解を促しました。

期間中は、子供から大人まで幅広い年齢層一般市民800名以上が当ブースを訪れ、人獣共通感染症を解説したパネル、実験設備や模型の展示、顕微鏡観察、実験器具や防護スーツの体験、感染症を題材にしたゲームを通して、人獣共通感染症とその研究について学びました。

開催期間中は、教員14名、博士研究員10名、学生18名が、交代で総合博物館に常駐し、800名以上の来場者に、展示物の説明や体験型展示の応対を行いました。この期間の総合博物館入館者数は3,000人にのぼりました。展示期間中、計775枚のアンケートを回収し、展示内容・説明のわかりやすさ、研究施設・研究内容

に関する意見を聴取できました。

また、10月31日（日）には、人獣共通感染症リサーチセンター 喜田教授が「鳥、ブタ、そしてパンデミックインフルエンザ騒動を斬る」と題した講演会を開催し、約60名の一般市民がこれを聴講しました。聴講者からは、今回、稚内市大沼のカモ糞分離された高病原性鳥インフルエンザウイルスをはじめ、ワクチン、新型インフルエンザウイルス等、インフルエンザ感染症研究にかかわる多岐にわたる質問がありました。シンプルな目的ですが、複雑に学問がからみあう同分野の研究に対する市民の質問に対して、喜田教授は懇切丁寧に回答し、来場した市民の同分野に対する理解も深まったと想像できます。

人獣共通感染症リサーチセンターでは、様々な分野が協力して人獣共通感染症の克服に努力しています。昨年度は、有珠・洞爺の研究を通して統合の糸口を検討したのと対照的に、今年度は、統合科学の1つの完成形を示してくれました。今後も統合科学に関する実験を進め、北大の研究者のサステナビリティも含めて北大の、北海道の、日本の、人類のサステナビリティに学問を通してどのように関わっていくべきかを考えていく必要があります。



展示の様子



市民講座で熱心に耳を傾ける参加者

留学希望者向けセミナー

期 日：10月27日(水)

場 所：学術交流会館

代表者：国際本部長 本堂 武夫

国際本部及び国際支援課は、10月27日(水)に協定大学のプロモーション・イベントを開催しました。

本行事は昨年に引き続き実施したもので、参加大学は、ポーランド・AGH科学技術大学、カナダ・ダルハウジー大学、中国・四川大學、ドイツ・ミュンヘン工科大学、アメリカ・オクラホマ大学、マレーシア・マレーシア科学大学、韓国・延世大学校の7大学でした。

当日は、各大学がサステナブル・ディベロプメント(SD)についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを参加大学より発表してもらい、それぞれの特徴的な取り組みが紹介されまし

た。

イベント終了後に参加学生に実施したアンケートでは、「今後の留学を考えるのに役立った」との回答が多くみられ、また参加大学教員達も自身の大学を直接学生達にアピールし、学生の反応を肌で感じられたことに非常に満足感を覚えたようです。

国際本部及び国際支援課は、学生の皆さんに留学をより身近なものと感じてもらうため、今後も様々な形で情報提供に努める所存です。メール(ryugaku@academic.hokudai.ac.jp)での留学相談も受け付けておりますので、留学希望の学生にご紹介いただければ幸いです。



学生からの質問に答える協定大学担当者



北大からのプレゼンテーション



日 時：平成22年10月27日(水) 13:00~15:30

場 所：学術交流会館第一会議室

・司 会

国際本部プロジェクト・コーディネーター

・開 会

国際本部 准教授 澤田 崇典

(協賛大学紹介)

・ポーランド・AGH科学技術大学 Dariusz Kato 氏

・カナダ・ダルハウジー大学 Keith F. Taylor 氏

・中国・四川大学 Ye Tang 氏

・ドイツ・ミュンヘン工科大学 Bing Chen 氏

・アメリカ・オクラホマ大学 Markus Schaller 氏

・マレーシア・マレーシア科学大学 Robert William Nieren 氏

・韓国・延世大学 Eunil Ahn 氏

・協賛・国際大学 John H. Frank 氏

・Q&A Session

※各大学の質問コーナーでは、日本語での質問も受け付けます。

・協賛大学への留学について

国際本部 国際 公共

・閉 会

プログラム

全学ニュース

北海道大学
サステナビリティ・ウィーク
2010 Sustainability Weeks 2010

サステナブル・キャンパスツアー

期 日：10月27日（水）

場 所：北方生物圏フィールド科学センター，同生物生産研究農場，地球環境科学研究院

代表者：サステナビリティ学教育研究センター 特任准教授 辻 宣行

学内にある環境に優しい施設，農場のバイオガスプラント，堆肥施設，農業残渣ペレット燃焼による温室加温，バイオトイレ，環境科学院の太陽光発電装置を，参加者とともに訪れ，引率者（北方生物圏フィールド科学センター 荒木肇教授，地球環境科学研究院 藤井賢彦特任准教授，サステナビリティ学教育研究センター 辻宣行特任准教授）や荒木，藤井研究室の学生が現場で説明，質疑応答を行いました。英語しかわからない参加者もいたため，英語，日本語両方を使いながら説明を行いました，一般の日本人参加者も英語を理解されているようで，説明する言葉の問題（説明の荒木，藤井先生が英語，日本語をうまく使われたこともあるが）はなかったように感じられました。

北方生物圏フィールド科学センターに集合し，牛舎，農場，地球環境科学研究院と徒歩で

回ったこともあり，三時間は必要であり，時間配分は問題ありませんでした。前日の雪，当日の雨のための道のぬかるみ（特に農場）を心配しましたが，農場より長靴が貸し出されたことなどにより，回避されました。

当日の天候不良のせいか，午前は予約者数18名に対して参加者10名，午後は19名に対して，14名でした（共に2～3名の飛び入り参加者あり）。特に海外大学の参加予定者は全て不参加でしたが，人数的には丁度良いのではないかと感じました。

学内には今回案内した施設以外にも，工学部のローエネルギーハウスがありますが，施設管理教員の都合が合わず今回は見送りとなりました。一般は言うに及ばず，北大生も入るチャンスがない場所を見学でき，説明もわかりやすかったため，参加者には好評であったと思います。



キャンパスを歩くツアー参加者



参加者で記念撮影

第1回 サステナブル・キャンパス・コンテスト

期 日：10月27日（水）

場 所：学術交流会館

代表者：公共政策大学院 修士課程2年 岡部 宇洋

学生団体SCSD（The Students Council for Sustainable Development in Hokkaido University）は、10月27日（水）に「第1回 サステナブル・キャンパス・コンテスト」を開催しました。これは、“学生の想像力が北大を変える”と信じ“世界に誇れる持続可能な北大キャンパスの構築”を目指して、その実現のためのアイデアを北大生から募集、発表するものです。コンテスト当日は、北大教員3名とSCSDメンバー2名が審査員審査を、聴衆の方々が会場審査を行い、最優秀賞・審査員特別賞・会場賞を決定、その後、最優秀賞受賞プロジェクトの実施を学生団体SCSDと企画者によって目指すものです。

今回は、エコカップリング税・ペーパーレス化・環境部・ウォームビス促進・自転車発電・断食キャンプ・サステナビリティ学SNS構築、という学生らしく多様なアイデアが発表されました。学生の真剣な発表、審査員と学生との間の質問の応酬が見られ、普段は見られない北大生の考えやアイデアを一般の方に見て頂く良い機会となったと思います。実際に見に来られた市民の方からも、学生らしいアイデアが聞けて楽しかったと言って頂けました。

残念ながら今回は最優秀賞が出ず、審査員特別賞が「環境部」「自転車発電」の2点、会場

賞が「自転車発電」という結果となりました。

しかし、サステナブル・キャンパスに興味を持つ人々が集まり意見を交わし、ネットワークを築く場とすることができ、今後の活動につながるものとする事が出来ました。

第1回ということで準備や宣伝が十分に出来ず、参加者・聴衆共に少ない状態での開催となってしまいました。しかし、見に来て下さった方々に「良い企画だ」「楽しかった」と言って頂けましたし、私達も本企画は学生が自分達のキャンパスをどうしていくべきなのか、を考えていくために必要であり、また様々な専門から考えたアイデアが聞ける有意義なものだと感じています。そのため、来年度以降は、より多くの参加者、聴衆の方々にご参加いただけるよう努力し、第2回、第3回と続けてこのコンテストを開催していきたいと思います。そして、“世界に誇れる持続可能な北大キャンパスの構築”を目指していきます。

最後になりましたが、共催者、サステナビリティ・ウィーク関係者、審査員の皆様など多くの方のご助力のお陰でコンテストを無事に開催出来たことを心より感謝いたします。また、発表者・観客として参加して下さいました皆様も本当にありがとうございました。



コンテストで発表する参加者



発表の様子を見つめる審査員

再生可能エネルギー国際シンポジウム

期 日：10月28日（木）

場 所：学術交流会館

代表者：公共政策大学院 特任教授 深見 正仁

現在、風力発電などの再生可能エネルギーは、利用過程で排出される二酸化炭素量が石油等より少ないため、地球温暖化を抑制するエネルギーとして注目されています。また、日本のように石油や石炭といった資源を十分に持っていない国にとっては、エネルギー自給率をあげることができるエネルギーでもあります。

第1部の基調講演では、最初に、経済学研究科の吉田文和教授より「日本の再生可能エネルギーの展望」として、新しい環境エネルギーインフラの方向性と戦略、また東アジアとの連携の重要性についてお話しがありました。続いて、ベルリン自由大学のマーティン・イエニケ教授からは「Renewable energies: The Race Against Traditional Supply」と題して、再生可能エネルギーの化石燃料および原子力エネルギーに対する代替可能性について講演いただき、ドイツの取り組み等をご紹介いただきました。そして、マサチューセッツ大学のジェームス・ハインツ教授からは「Creating a Clean Energy Economy in the U.S.: Energy Efficiency and Renewable Energy」として、米国におけるクリーン・エネルギー経済の創出とその課題を提示いただきました。さらに、中国人民大学環境学院の馬中院長より、「Energy Saving, Emission Reduction and Low Carbon Development in the Context of China's Rapid Economic Growth」として、急速に発展する中国経済での省エネルギーと低炭素化についてご報告いただきました。休憩をはさんで、午後は北海道経済産業局資源エネルギー環境部の鈴木洋一郎部長より、「再生可能エネルギーの現状と課題」と題して、北海道の取り組みについてご紹介いただきました。続いて、北方生物圏フィールド科学センターの荒木肇教授からは「再生可能エネルギーとしての地域バイオマス」として、作物残渣や家畜糞尿、食物残渣の燃料等への活用可能性についてお話しいただきました。第1部の最後には、基調講演者による

パネルディスカッションが行われました。

第2部では、最初にNPO法人北海道グリーンファンドの鈴木亨氏より、「市民風車の現状と今後の課題」と題して市民風車の活用とその課題等についてご紹介いただきました。次に、セントラルリーシングシステム株式会社の川口直人氏からは、「新千歳空港における大規模雪冷房」として、新千歳空港での雪冷熱エネルギーの活用事業についてご紹介いただきました。続いて、下川町地域振興課長の春日隆司氏より、「地域資源を生かす～環境モデル都市下川～」として、持続可能な循環型森林経営への取り組みをお話しいただきました。続いては、地球環境科学研究院博士研究員の矢部暢子氏より「北海道におけるバイオガスプラント導入に関するLCA」として、バイオガスプラント（BGP）活用における温暖化ガス排出削減効果とエネルギー産出、またその費用の分析結果が報告され、さらにBGPが導入可能となる電力買取価格水準を支庁別に計算した結果が提示されました。

最後に、公共政策大学院博士研究員の諏訪竜夫氏より、「北海道におけるバイオガスプラント普及に関する経済学的検討」と題して、固定価格買取制度による酪農家へのBGPの導入可能性の分析と、今後の課題について提示がありました。また、第2部の各報告の後には来場者と講演者による活発な質疑応答が行われました。

本シンポジウムには、小雨にも関わらず本学学生のみならず多くの一般市民にご来場いただき、約260人の来場者で満席になる盛況となりました。現在私たちが直面しているエネルギー問題に対する一般の方々の高い関心を示すものと思われまふ。ご参加いただいた皆様には、長時間によるご聴講に御礼を申し上げますとともに、本シンポジウムの概要については追って報告書にまとめる予定です。

全学ニュース

北海道大学
サステナビリティ・ウィーク
2010 Sustainability Week 2010



基調講演者によるパネルディスカッション



満席の会場



ポスター

Candlize2010

期 日：10月28日（木）

場 所：中央ローン

代表者：公共政策大学院 修士課程1年 芳岡 完祥

10月28日（木）に実施したキャンドルナイトでは学内外問わず多くの方々に来て頂きました。キャンドルが創り出す幻想的な灯りに感動した方も多かったのではないのでしょうか。

キャンドルナイトの趣旨としては2つあります。1つ目は来ていただいた多くの方々に環境問題を身近に感じてもらうこと。2つ目は環境問題に対して自分に出来ることは何かということを考えてもらうことです。

Candlize2010のテーマは「四季」です。「四季は春夏秋冬と移り変わり、それが毎年必ず繰り返されるもの」というイメージが多くの皆さんが感じているところではないのでしょうか。我々は「持続性」という観点から、我々が今後構築すべき「持続可能な社会」と「四季」には共通点があることに気付きました。「四季」というテーマの中には「四季のように持続可能な社会を構築したい」という強いメッセージが込められています。

当日は、季節ごとにブースを設け、季節ごとのイメージをキャンドルと制作物で表現しました。「春」は「白桜」、夏は「海」、秋は「木のオブジェ、段ボール絵画」、「冬」は「雪」をイメージしたものでした。

今回のキャンドルナイトで使用したキャンドル、制作物の材料は全てリサイクルが可能となるように、制作工程・処理方法の工夫をしました。キャンドルに関しては使用されたキャンドル

5,000個は全て一回使われたキャンドルを再利用するか、廃油をリサイクルして作りました。キャンドルだけではなく、制作物で使われた大量の「ペットボトル」「段ボール」は大学から出されたゴミを積極的に使用しました。

また、当日使われたキャンドルのうち約1,000個は札幌の小学生が協力して作ってくれました。協力してくれた小学生は清田小学校、北野小学校、福住小学校、常盤小学校の小学生約240名です。キャンドルを作った後、環境に関する授業を行いました。このように、今回は「水環境」「フードリサイクル」を取り扱いました。小学校のような教育機関で環境に関する啓蒙活動を行えるという良い機会にも恵まれました。

この活動の成果としては3つあります。1つ目は全学のゴミのリサイクルに貢献したこと。2つ目は二酸化炭素の削減に貢献できたこと。キャンドルナイトの日は中央ローンの一部の街灯を消灯したので、その分の二酸化炭素の削減に寄与できました。3つ目はより多くの人々に環境問題に関心を持ってもらえたのではないかと感じております。

今後もこのような活動を積極的に行い、多くの人々に環境に対して興味・関心を持ってもらうだけでなく、自分たちが出来ることは一体何かということも考え、参加者が共有できるような活動にしていきたいと思っています。



キャンドル作りに協力する小学生



暖かい光のキャンドル

シンポジウム「北の山で何が起こっているのか：変容の持続的観測」

期 日：10月29日（金）

場 所：学术交流会館

代表者：地球環境科学研究院 教授 甲山 隆司

人間の生活の場から隔たった山岳域も、人間活動の影響にさらされて変化しつつあります。長い期間に亘る研究者の観測から、さまざまな変化が明らかになり、また社会で喧伝される事象にも、現実の誇張された説明があったりします。このシンポジウムは、北海道の山岳域を中心に、青森県の八甲田山やネパールヒマラヤの例も交えながら、研究者の長期観測で明らかになってきた現象や変化を市民のみなさんに伝える場とすることができました。

話題は、盗掘や人・シカの入り込み、身勝手な特定種の植え込みなどによる植物種の減少や植物相の汚染、地球変化・温暖化に伴うと考え

られる乾燥化による高山帯のお花畑の消失、高地湿原と亜高山帯針葉樹種の衰退、大雪山の永久凍土特性、ヒマラヤ氷河の変化の実像と多岐に及びました。

平日の開催にもかかわらず、一般市民のみなさんを中心に90人近い参加者があり、熱心な質疑と討議が行なわれて、山岳環境への社会の関心の高さを窺うことができました。

講演いただいた方々の数十年に及ぶ地道な研究努力に敬意を表すとともに、世代を超えてデータや観測体制を引き継いでいくことの必要性を研究者と社会が共通認識することができました。



多くの参加者で埋まった会場

国際シンポジウム「サステナビリティ学教育のグローバルキャンパス化をめざして」

期 日：10月29日（金）

場 所：学術交流会館

代表者：サステナビリティ学教育研究センター 教授 田中 教幸

本シンポジウムは、文部科学省科学技術振興調整費「戦略的環境リーダー育成拠点形成」に採択された、北海道大学「持続社会構築環境リーダー・マイスター育成（StraSS）」の一環として行われました。本学の本堂武夫理事・副学長による開会挨拶に続き、インターネットや大学間ネットワークを駆使して、アジア及びアフリカでESD教育プログラムを展開している慶應義塾大学、ブルキナファソ国際水環境学院、及び国連大学の代表者による基調講演を行いました。続いて、サステナビリティ学教育研究センターの田中教幸教授が、今年度から開始したStraSSプログラムのこれまでの経過と、今後の事業展開について解説しました。さらに、シンポジウムのまとめとして、持続性教育のグローバルキャンパスをテーマとして、総勢12名にのぼるパネリストによる議論を行いました。

パネルディスカッションでは、各パネリストがグローバルキャンパスに関するキーワードを一つあげ、その重要性について解説を行いました。その後、キーワードの関連性や提示された

問題点について議論が行われました。インターネットの発達によりグローバルキャンパスの展開は容易になり多国間交流の頻度は増え、その結果、他国の知識だけに留まらず、自国と自身の再考にもつながるといった利点が提示されました。一方で、グローバルキャンパス化に伴う問題として、プログラムの品質保証の困難さや、英語の使用による地域性の脱落や情報の偏りなどの問題点も指摘されました。これに対して、直接対面の重要性和有効性が挙げられました。

これらを踏まえて、今回の参加者間のネットワークを密に保ち互いに活用することを約束し、持続性教育のグローバルキャンパスをより質の高い次元へと発展させるために協力することで合意しました。最後に、次回シンポジウムをStraSS協力校であるインドネシア中央カリマンタンのパラカラヤ大学で行うことを提案し、参加要請と次々回以降の開催の協力を求め、本シンポジウムの幕を下ろしました。



講演の様子



質問する参加者

CLARK THEATER 2010

期 日：10月29日（金）～11月3日（水）

場 所：クラーク会館

代表者：教育学部4年 北大映画館プロジェクト実行委員会2010実行委員長 桑原 真希

CLARK THEATER 2010は皆様のご声援の下、今年で5周年を迎えることができました。ご来場してくださったお客様、ご協力いただきました関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。

シネマコンプレックスで公開しない短編作品から、札幌出身の映画監督の作品、また北大で撮影された「零下15度の手紙」という作品公開を行いました。オープニングには、「映像教育」をテーマに筑波大学図書館情報メディア研究科教授の西岡貞一氏とシアターキノ代表の中島洋氏、北大OBの早川渉監督によるトークセッションを行いました。

また、今年は、「地球交響曲」シリーズを北大で自主上映している北大ガイアプロジェクトの方々との共催企画が実現し、最新作「地球交響曲第7番」を上映いたしました。本企画では、「地球交響曲」の監督である龍村仁監督をゲストに迎え、映画の制作秘話や貴重なお話を伺うことができました。現在地球で起こってい

る環境問題は、はるかに個人のレベルを超え、全地球的・全生命的なものであると龍村監督は述べます。その中で私たちはどのように生きればよいのか、そのような問いを考える作品でした。

そして、札幌で活動する映像作家・北川陽稔監督の作品「森と水の庭・ウトナイ」という映画も同時上映いたしました。札幌近郊にいと手付かずの自然に出会うことはありません。

「森と水の庭・ウトナイ」は苫小牧のウトナイ・勇弘の豊富な自然環境を美しく描き、その自然と人間との関係を映し出します。上記の2本の映画を上映したことで、グローバルとローカル、両方の視点から自然環境を考えるきっかけになりました。

今後も私たち映画館プロジェクトは、北海道大学の映像文化を今以上に発展させるべく、北大に常設の映画館の創設に向けて活動が続けていきます。その中で現代社会が内包する問題を様々な切り口で訴えていきたいと思っています。



開場を待つ来場者



龍村監督のサイン会

北海道地域医療シンポジウム

期 日：10月30日（土） 場 所：学術交流会館

代表者：医学研究科 名誉教授 前沢 政次 主催：北海道地域医療研究会

《行事概要》

○ブラッシュアップセミナー

I) タイトル：地域と病院を元気にする健康づくり活動『How』and 『Do』

講師：医療法人三意会我妻病院 理学療法士 島田崇光 氏

我妻病院（足寄町）で取り組んでいる健康教室や医療講演会、院内行事などについての活動報告や医療活動を行うことの目的やメリット、医療活動の運営方法の紹介。

II) タイトル：「地域リハビリとは何でしょう」

講師：町立厚岸病院 理学療法室技士長 久米 正志 氏

“伝える”ことと“伝わる”ことの違いや、地域リハビリテーションの定義やシステムづくり。厚岸町での取り組みについて。

○基調講演 タイトル：「北海道の地域医療に望むこと」

講師：NPO法人ささえあい医療人権センターCOML 理事長 辻本 好子氏

納得とはどういうことか。協働とはどういうことか。患者体験などを通して、患者が望むインフォームド・コンセントとは？医療従事者と患者・地域住民との関係などについてご講演をいただきました。

○ワークショップ 「これからの地域医療研究会を考える」

北海道地域医療研究会は創立15年を迎え、これを機に今までの活動を振り返り、研究会の今後のあり方について下記3つの問いを参加者に投げかけ、各グループで議論を行った。

1. 15年間あなたの地域はどのように変わって来ましたか？
2. あなたが地域医療をやめずに続けている理由、原動力とは？
3. あなたにとっての北海道地域医療研究会とは？

《成果など》

参加者は学内外より医師をはじめ、看護師、保健師、理学療法士などの医療従事者や一般・学生を含めて140名近くの方にご参加いただきました。

講演で得たことを踏まえ、ワークショップで議論を行い、日頃は道内各地方で活躍されている皆さんと、北海道の地域医療に関わる多職種間の課題や情報など意見交換を行うことができ

ました。シンポジウム終了後各地へ戻る皆さんに、また次の1年地域で頑張るエネルギーを持ち帰っていただくことができたのではないかと考えます。

今後は、皆様からいただいた沢山の提言を踏まえ、「北海道地域医療研究会」としてどのような展開をしていくかを検討します。



講演の様子



ワークショップの様子

「崩壊する地球生態系を救えるのか？」生態炭素と生物多様性の鍵ー熱帯泥炭・森林ー

期 日：10月30日（土）

場 所：学術交流会館

代表者：農学研究院 教授 大崎 満

本シンポジウムは、JST地球規模課題対応（SATREPS）国際科学技術協力（分野・領域「環境・エネルギー分野 研究領域1【領域特定型】」）事業として採択された「インドネシアの泥炭・森林における火災と炭素管理」プロジェクトの一環として行われました。

午前のセッションでは、プロジェクト関係者及び留学生を対象にした専門的な話題が取りあげられ、国際協力事業団代表者とプロジェクト関係者からSATREPS事業及びプロジェクト概要が発表されました。その後、招聘者を含む6名から専門的な内容について発表が行われました。

午後のセッションでは市民を対象にした分かりやすい内容が紹介され、具体的な研究活動の紹介、熱帯泥炭地と生物多様性の関係、そしてインドネシア政府による熱帯泥炭地保全に向け

た取り組みについて解説がありました。

特に、世界的に見ると熱帯泥炭地は、生物多様性が豊かな地域に分布することが示され、熱帯泥炭地の保全は即ち生物多様性の保護につながるということが紹介されました。

また、昼食時を利用し、招聘者と国内参加者による意見交換が行われ、熱帯泥炭地のモニタリング方法や保全には何が必要なのかが議論されました。

その結果、1）継続的な研究活動、2）キャパシティビルディング、3）ネットワーク構築が最も重要な事項であることが確認され、熱帯泥炭地管理に向けた包括的な行動計画“札幌イニシアティブ”構想が提案されました。

なお、会場入り口には、当プロジェクトを紹介するポスター12枚を掲示し、写真や図表を示しながら参加者への解説も行いました。



シンポジウム後の記念撮影



ポスター展示の様子

シンポジウム「グリーンな福祉国家は可能かー社会保障・環境・経済の新しい連携ー」

期 日：11月1日（月）

場 所：学術交流会館

代表者：法学研究科 教授 宮本 太郎

社会保障・環境・経済はこれまで対立的なものであり独立したものとして考えられてきました。しかし、近年では社会保障・環境・経済の連携や相互関係が注目を集めています。

このシンポジウムでは、社会保障・環境・経済の連携からもたらされるグリーンな福祉国家について、この領域において常に研究を牽引している千葉大学の広井良典教授に基調講演をいただきました。

基調講演では、社会保障・環境・経済の連携にはナショナル、グローバル、ローカルのそれぞれのレベルでの連携が必要であり、ナショナル・レベルでは、社会保障を高齢者関係給付から家族や子ども関連給付へと転換する「人生前半の社会保障」の必要性や失業や自殺に対する心理社会的ケアへの社会保障の必要性、「フロー」（所得）から「ストック」（貯蓄、土地、資産など）への分配の転換、社会保障財源としての環境税を導入することによる環境政策と社会保障政策の統合が重要な課題として提示されました。

グローバル・レベルでは、高齢化の地球的進行のなかで、人口や資源消費も均衡化するようなある定常点に向かいつつあり、こうした定常

型社会をいかにして可能にしていくかが重要であることが指摘されました。

ローカル・レベルでは、地域コミュニティを活かしたGDPだけでは測れない豊かさの実現が重要であり、そのためには社会保障政策とまちづくり・都市政策とを総合的に考える必要があるとされました。

基調講演の結論としては、これらのそれぞれのレベルでの社会保障・環境・経済の連携によって相乗効果を生み出し、「生産性」を労働生産性に限定せずに再定義していくことによってGDP増加に限らない成果を汲み取っていくことが重要であり、こうした動きから「創造的福祉社会／創造的定常経済システム」が生まれる可能性が指摘されました。

シンポジウムの後半では、現在の政治状況や社会状況のなかで、いかにして連携や相乗効果を産み出していくのかという問題を中心に、法学研究科の山口二郎教授、宮本太郎教授を交えてパネルディスカッションが行なわれました。シンポジウムに参加された多くの方から今後の展望や方策について質問が出され、活発な議論が行われました。



講演を熱心に聞く参加者



パネルディスカッションの様子

公開シンポジウム「都市・農村の地域連携を基礎とした低炭素社会のエコデザイン」

期 日：11月1日（月）

場 所：学術交流会館

本学代表者：農学研究院 教授 大崎 満

本シンポジウムは、北海道の食料やエネルギーの自立を主旨として開催されました。環境省の研究プロジェクト（環境省地球環境研究総合推進費E-0804）である「都市・農村の地域連携を基礎とした低炭素社会のエコデザイン」の一環として行われ、今回は北海道を対象に食料やエネルギー（バイオマス）の問題と今後の自立への展開を考えました。

基調講演として、低炭素社会に向けた北海道の森林の活用を都市・農村連携の視点から講演いただきました。（日本大学大学院法務研究科 小林紀之教授）。また、地域の持続的な社会への取り組みとして、下川町と富良野市の事例を報告いただきました。

そして、北海道の自立に向けた提案を講演いただき（農学研究院 大崎満教授）、最後には、パネルディスカッションを行い、北海道の

自立に向けた意見交換を行いました。

成果：一般市民をはじめ、行政機関や企業の方など幅広い分野の参加者があり、北海道の自立に向けた有意義なシンポジウムとなりました。シンポジウムの主催であった本研究プロジェクトは、今年度（平成22年度）で終了しますが、今回のシンポジウムにて議論された地域の持続社会・低炭素社会への取り組みや講演者からの知見、パネラー・フロアからの意見は、研究の最終的なまとめに向けて大いに参考となるものでした。また、シンポジウムの成果は本研究プロジェクトへ反映されるのみならず、北海道大学サステナビリティ学教育研究センターと各市町村および大阪大学・立命館大学（共同研究大学）との協力関係をさらに強化し、新たなプロジェクト提案として協力していく展開につながりました。



会場の様子



パネルディスカッションの様子

「子どもの未来可能性を大切にする社会の実現をめざして」

期 日：11月2日（火）

場 所：学術交流会館

代表者：保健科学研究院 教授 佐伯 和子

「子どもの未来可能性を大切にする社会の実現をめざして」と題して、佐伯和子教授（保健科学研究院創成看護学分野）を座長とし、4人のシンポジストによる講演を行いました。

「肥満化・体力低下時代を生きる子どもたちへの未来処方箋－アジアと日本の子どもの体格とフィットネス」 山内太郎准教授（保健科学研究院創成看護学分野）は、インドネシアでのフィールドワーク結果と日本の子どもの肥満を比較し、自然と遊ぶことの意義を処方箋の一つとして提案されました。

「子どものうつ病と発達障害」 傳田健三教授（保健科学研究院生活機能学分野）には、疫学的調査による子どものうつ病の発症率の変化、発達障害児の実態と最新の治療方法について事例を示してお話いただきました。

「文化的営みの中で行う子育てと地域の絆」

本田 光助教（保健科学研究院創成看護学分野）には、沖縄宮古島での子育てを通して、コミュニティにある目に見えない資本である文化と子どもの豊かな成長についてお話いただきました。

「子どもの立場で考える男女共同参画社会」 有賀早苗教授（農学研究院／生命科学院，女性研究者支援室室長）は、子どもの立場，子どもの視点から女性研究者の子育てと研究生活の共存のさせ方についてお話しされ，男女共同参画社会を推進するための一方向性を示唆されました。

閉塞感が漂う現代の日本社会では，生活習慣病予備軍といえる子ども，精神的な問題をもつ子どもなど，新たな子どもを取り巻く健康障害が出現しています。一方，子育ては文化と社会システムの中で行われています。本シンポジウムでは，子育てを支援できる社会システムのあり方を多様な視点で捉え，子どもの未来と子育てについて，考えることができました。

終了後のアンケートでも，「子どもの未来について考える機会となりましたか？」の問いに，9割以上の方が「ややそう思う・とてもそう思う」と回答しており，本シンポジウムはテーマに沿った内容を伝えることができ，また参加者からも高い満足感が得られたと感じています。



挨拶する小林保健科学研究院長



傳田教授による講演

2011年アムール・オホーツクコンソーシアム第二回会合に向けた国際ワークショップ

期 日：11月1日（月）～11月2日（火）

場 所：スラブ研究センター

代表者：低温科学研究所 教授 江淵 直人

アムール川流域とオホーツク海をひとつの領域として、その環境保全と持続可能な発展を多国間で協議するための学術ネットワーク「アムール・オホーツクコンソーシアム」の2011年第二回会合に向けた準備会合を実施しました。初日は、一般市民・学生向け講演会とし、コンソーシアムの三カ国（日本、中国、ロシア）の代表幹事に加え、新たに参加を表明したモンゴルから二名、および日本国外務省、国際連合環境計画（UNEP）、財団法人環日本海経済研究所からの講師陣がアムール川流域とオホーツク海を取り巻く諸問題について講義しました（日本語通訳あり）。

二日目は、上記機関からの参加者に加え、日本国内でコンソーシアムを支える本学低温科学研究所、同スラブ研究センター、北見工業大学未利用エネルギー研究センター、総合地球環境学研究所、北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成 スラブ・ユーラシ

アと世界」、国土交通省北海道開発局の各担当者が、アムール・オホーツクコンソーシアムの運営と2011年の第二回会合の内容を議論しました。

その結果、次回の会合は、2011年11月4（金）～6日（日）に札幌で開催されることが決定しました。会議のテーマについては、引き続き、各国間で調整すると共に、各国幹事は国内の取りまとめを進めることになりました。

尖閣問題に端を発する日中間の不和、11月1日に突如決行されたロシア大統領による国後島訪問などの衝撃の中、会議に参加した日・中・露・モの四カ国の研究者らは、学問を基礎に置き、定期的に会合を開いて越境環境問題を協議する本コンソーシアムの必要性を確認し、今後もウェブサイトなどを充実させて活動を活発化させることで一致しました。なお、会議の様子は、11月3日（水）の北海道新聞朝刊で紹介されました。



意見を交わす参加者



質疑応答の様子

第3回センチネルアース国際シンポジウムー衛星画像・データとGISの新展開とその先進的利用ー

期 日：11月3日（水・祝）～5日（金）

場 所：学術交流会館

代表者：情報科学研究科 教授 本間 利久

11月3日（水）の市民向け講座では、「地球温暖化説ウラの裏」と「『はやぶさ』を救ったイオンエンジン」の講演を行いました。動画を交えた最新データを基に一般参加者に分かりやすい講演でした。

11月4日（木）午前の専門の講演は、リモートセンシングに関するものであり、情報科学研究科の宇宙航空研究開発機構（JAXA）連携講座の先生方が中心となって行われました。午後は無人飛行機およびワイヤレスセンサーネットワークに関するものであり、アラスカ大学、ソウル大学、ブダペスト工科経済大学、トリノ工科大学と日本の企業からの研究の現状と最新の応用システムの講演がなされました。

その後、百年記念会館で35名の参加者による懇親会を開催し、交流を深めました。

11月5日（金）の午前は地理情報システムに

関する講演がロンドン大学からの研究者を中心に行われました。その他、ブダペスト工科経済大学、立命館大学、慶應義塾大学からの発表がありました。

午後の火災危険指数システムに関するセッションは、これまでのセンチネルアジアの研究活動の一環であり、JAXAを中心として海外から米国、インドネシア、マレーシアの研究者を招聘し、火災の早期予報システム構築について講演が行われました。

地球環境の変化の観測において、人工衛星によるリモートセンシング技術、無人飛行機による観測技術とワイヤレスセンサーネットワーク技術の融合をはかったGIS統合型プラットフォームが重要となることで意見が一致し、さらに、今後も衛星の新しい利用と一般市民への普及活動の重要性の共通認識も深まりました。



参加者での記念撮影



工学部前で

国際講演・実習：顎関節症診断法の国際基準

期 日：11月3日（水・祝）

場 所：学術交流会館

代表者：歯学研究科 教授 大畑 昇

11月3日（水）の祝日、午前10時から、本企画「国際講演・実習：顎関節症診断法の国際基準」を実施しました。当日は朝からの雨模様にもかかわらず、約80名の方々の参加がありました。

まず始めに本企画責任者の歯学研究科 大畑昇教授より、国際疾病分類と本企画対象疾病である顎関節症の位置づけについて、問題提起がなされました。

次いで同研究科 有馬 太郎助教より、本企画は「国立大学フェスタ2010」の一環であり、国立大学の教育・研究の成果がこのような形で社会貢献していることが強調されました。

また、顎関節症の治療オプションの一つであるスプリント（マウスピース）の効果についての解説がなされました。

その後に本企画のメイン講演者の一人である Peter Svensson 教授（オーフス大学、デンマーク）より、顎関節症の国際基準が制定されるまでの経緯とその診断方法の正確性・感受性について、わかりやすく解説されました。

お昼を挟んで午後の部では、本診断法国際組合の前プレジデントの Thomas List 教授（マルメ大学、スウェーデン）より、実演による検査方法のご紹介がありました。世界で認められた診断基準を、現・前プレジデントより、しかも実演入りで教わることができるという、世界初の機会に聴衆のみなさまより賞賛のお言葉を多数いただきました。

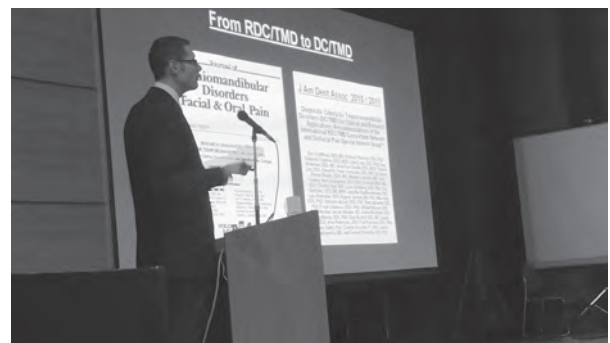
そして、本企画終了前のディスカッションでは、とどまることのないご質問とディスカッションで終了予定時刻である午後3時30分を過ぎる盛況ぶりでした。参加者のみなさまの温かいご支援のおかげです。

今後は、本企画の顎関節症国際基準については、北海道大学歯学研究科が主導で日本語バージョンの浸透に寄与することになりました。

そしてサステナビリティ・ウィークについては、社会のみなさまの興味のある企画でなおかつ歯学研究科の専門性を持った企画を提供して参ります。



会場の様子



当分野を世界的にリードする先生の講演

公開講座「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」

期 日：11月3日（水・祝）

場 所：保健科学研究院

代表者：保健科学研究院 公開講座委員会委員長 教授 伊達 広行

11月3日（水）「文化の日」午後1時より約3時間にわたり、保健科学研究院公開講座が開催されました。当日は、雨曇りの不順な天候にもかかわらず、定員80名程度の会議室が満員となり、補助席も設けて総計102名（過去最高）の参加人数となりました。

この公開講座は毎年恒例のもので、「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマの下、3名の講師陣が専門分野の紹介をするスタイルをとっております。今年は、1時限目：「フードファディズムと健康食品について－あなたはメディアに惑わされていませんか？－」（森山隆則教授）において、いわゆるダイエット食品の宣伝等の問題点、2時限目：「発達障害のニューロサイエンス－相手の感情を理解する脳－」（福島順子教授）では、アスペルガー障害などの具体的な事例や最新の研究成果、3時限目：「車いすから見える座りの世界－車い

すのシーティングの進歩とオフィスチェアへの応用－」（八田達夫教授）においては、障害者の車いすから健常者に対するオフィスチェアの開発とその設計方針、についての講演がなされました。

講演者は、サステナビリティ・ウィーク2010の展開キーワード「健康・衛生・社会福祉・高齢化社会」にマッチしたこのようなタイムリーかつ興味深い内容を分かりやすく解説し、参加者からのアンケート回答でも、非常によい評価を受けました。

また、それぞれの講演内容に対し、活発な質疑応答がなされ、テーマに対する関心の高さとともに、専門的内容に対する深い理解が伺えました。多くの人たちのより良い生活を支援し得るよう、今後とも本公開講座を続けて行きたいと思います。



車いすを使って座りの解説をする八田教授



会場を埋め尽くす多くの参加者

環境政策セミナー ～生物多様性保全と気候変動～

期 日：11月3日(水・祝)

場 所：学術交流会館

代表者：公共政策大学院 特任教授 深見 正仁

本学持続可能な低炭素社会づくりプロジェクトチームと環境省北海道地方環境事務所は、昨年に引き続き「環境政策セミナー」を開催しました。生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が愛知県名古屋市で開催されたばかりであり、また、気候変動枠組条約第16回締約国会議(COP16)の開催を控える時期であることから、本年のセミナーのテーマは「生物多様性保全と気候変動」としました。

セミナーでは、環境省大臣官房審議官の梶原成元氏から、「COP16の展望と地球温暖化国内対策」と題して、COP16に向けた国際的な気候変動に関する議論の動向や、国内での地球温暖化対策の動向などについて講演がありました。続いて環境省自然環境局生物多様性地球戦略企画室長の鳥居敏男氏から、「生物多様性条約COP10で何が話し合われたのか」と題して、名古屋議定書、愛知目標などを始めとする

COP10の成果と、今後の政策の展望について講演がありました。

また、本学農学研究院 近藤哲也教授からは「北海道における生物多様性保全と気候変動」と題した講演があり、道内の身近な都市公園などにも貴重な植物があること、それらが地球温暖化によって影響を受ける恐れがあることなどの紹介がありました。

3者の講演ののち、「生物多様性保全と気候変動」と題して対談を行いました。対談では、COP10やCOP16など、生物多様性保全と気候変動に関する国際的な議論の動向を受け、北海道で私たちはどのように行動すればよいのかについて来場者と共に考え、さらに会場との質疑応答を行いました。会場には学生、市民などから180名の来場があり、セミナーは盛況のうちに終了しました。



聴衆で埋まる会場



対談する講演者

産学官セミナー「地理空間情報が拓く未来IIー自治体GISー」

期 日：11月4日（木）

場 所：学術交流会館

代表者：文学研究科 准教授 橋本 雄一

地理空間情報とは、持続可能な社会の構築するための道具として期待が高まっている社会的な情報基盤です。『地理情報システム（GIS）』や『衛星測位』の技術とともに活用することで、北海道の代表的産業である農業・水産業の振興や、高齢社会における効果的な社会福祉サービスの創出を行うことが可能です。本年度は、地方自治体における地理空間情報の活用注目し、行政事務の効率化や住民サービスの向上に関する取り組みについて、自治体GIS担当者の方を中心に、いろいろな事例を紹介いただきました。

まず、企画代表者（北海道大学文学研究科 橋本雄一）が、趣旨説明を行いました。続く基調講演では、本学会の自治体分科会会長である大場 亨氏（市川市市民経済部）により「自治体における地理空間情報の利活用と将来展望」という題目でお話しいただき、さらに石黒元昭

氏（北海道建設部土木局）に「北海道における治水GISについて」、平塚泰章氏（札幌市情報化推進部）に「札幌市における地理情報データの利活用について」、澤田和幸氏（岩見沢市経済部企業立地情報化推進室）に「岩見沢市におけるICT施策と自治体GISの利活用について」という題目で講演していただきました。企画後半では、藤原達也氏（北海道GIS・GPS研究会）と赤渕明寛氏（株式会社ヒューネス）に「北海道における自治体GISの現状分析と将来展望」について発表していただき、まとめとしてプロジェクト・マネジメントの視点を交えながら「自治体GISの発展過程分析と今後の展開」に関するお話を深田秀実先生（小樽商科大学社会情報学科）にさせていただきました。当日は多くの自治体関係者を含む200名以上の参加者があり、自治体GISに対する関心の高さがうかがわれました。



趣旨説明の様子



会場の様子

北海道海洋生物科学シンポジウム

期 日：11月5日（金）

場 所：地球環境科学研究院

代表者：地球環境科学研究院 准教授 沖野 龍文

北海道海洋生物科学シンポジウムが11月5日（金）に地球環境科学研究院の今年新営となったD棟で開催されました。主催の北海道海洋生物科学研究会は、既存の学会の枠にとらわれないフレキシブルな交流の場を提供しています。今回サステナビリティ・ウィーク2010期間中に開催することで、学内外の多数の組織から約70名の方に参加して頂きました。

また、グローバルCOEの自由企画として、本シンポジウムは環境科学院の大学院生がプログラムを企画しました。学外の5名の演者の方は、学生が希望したということを楽しんで頂いたようです。その結果、若手の最新の研究から、経験豊かな先生からの提言まで、多彩なプログラムとなりました。

講演では、地球温暖化による海洋酸性化の問題に加えて、亜表層域における酸素濃度減少の

深刻な問題が紹介されました。これは多くの参加者にインパクトがあったと思われます。酸素濃度により実際に起きた魚類の大量斃死とともに、今後起きうる現象が予測されました。

また、海洋生物にハロゲンを含む化合物が多いことがよく知られていますが、海藻がハロゲンを取り込む酵素の詳細な解析が紹介されました。2名の若手研究者からは沿岸の生態系と環境の変化について議論がありました。

最後に、漁業が原始的狩猟と比せられますが、水産業は粗放的である方が文明的あるいは持続的であることが提起され、サステナビリティ・ウィークのシンポジウムにふさわしい議論で終了しました。会場でも十分な時間をとって議論が行われましたが、シンポジウム終了後の演者や学生を含む意見交流の場も盛会でした。



講演の様子



質問する学生

国際シンポジウム「子どもの貧困と対抗戦略－研究・市民活動・政策形成」

期 日：11月6日（土）

場 所：学術交流会館

代表者：教育学研究院 教授 松本 伊智朗

冒頭に青木紀氏（名寄市立大学学長・北海道大学名誉教授）による基調報告「貧困・家族・子ども」がなされました。続いて「イギリスにおける子どもの貧困とCPAGの活動」フラン・ベネット氏（オックスフォード大学上級研究員、元CPAG代表）、「日本における子どもの貧困と市民活動」湯澤直美氏（立教大学教授、「なくそう！子どもの貧困ネットワーク」共同代表）のふたつの報告がなされました。これをめぐって、指定討論者である阿部彩氏（国立社会保障・人口問題研究所社会保障応用分析研究部 部長）、横井敏郎 准教授（北海道大学教育学研究院）からコメントがあり、フロアを含めた討論がもたれました。司会は松本伊智朗 教授（北海道大学）が務めました。

青木氏の報告では、貧困、あるいは子どもの貧困を理解するためには市場と家族の関係の把握が不可欠であること、社会的公正の問題とし

て取り上げる際のロールズの正義論の再検討が必要であることが強調されました。

ベネット氏の報告では、子どもの貧困に関わるイギリスの代表的な市民団体であるChild Poverty Action Group の歴史的経過と現在の課題が、イギリスの戦後政治史と関わらせて提示されました。

湯澤氏の報告では、日本の子どもの貧困の現状と、最近の反貧困活動の概要と課題について提示されました。

その後の討論では、子どもの貧困という概念自体の再吟味の必要、社会的な合意形成の戦略的課題等について、意見交換がなされました。

本企画は、子どもの貧困に焦点を合わせた国際シンポジウムとしては、わが国では初めてのものであります。今後の研究と実践活動にかかわる論点の整理がなされ、国際交流の継続を可能にする意義のあるものでした。



講演者と参加者の意見交換



シンポジウムの様子

国際シンポジウム「持続可能な女性の健康のために：歴史の中の避妊と中絶を問う」

期 日：11月6日（土）

場 所：学術交流会館

代表者：文学研究科 准教授 瀬名波 栄潤

11月6日（土）に学術交流会館の第一会議室に於いて、国際シンポジウム「持続可能な女性の健康のために—歴史の中の避妊と中絶を問う」が開催されました。同志社大学グローバル研究科教授の荻野美穂、ニューヨーク市在住のアメリカ史研究家リッキー・ソーリンジャーという日米の第一線で活躍されている2人の歴史家が、それぞれ日本とアメリカの生殖の政治史について講演を行いました。

近年いわゆる先進国では少子化が進み、女性がどのように結婚、妊娠や出産の決断をするか、という問題への関心が高まり、しばしば社会問題としてさえ議論されています。しかし、その一方で、歴史的に女性の生殖に関する決定がどのような要因によって左右されてきたのかに関する理解は必ずしも深まっていません。

荻野氏の講演では、第二次世界大戦後の日本の中絶・避妊政策の変遷が分析され、特に障害

者団体とフェミニストの関心の合致がもたらした政治の展開が強調されました。また、この歴史的な展開が今日の生殖医療や代理母の問題に与えている影響も分析されました。一方、ソーリンジャー氏は、17世紀から21世紀のアメリカ史に見られる、特に人種差別的な福祉政策や移民政策に焦点を当てた議論を展開しながら、生殖権という概念の限界を示し、新たに「生殖の正義（Reproductive Justice）」を提示しました。生殖権という概念自体が未だに定着していない日本で、ソーリンジャー氏の講演は聴衆に最先端の議論に触れる機会を与えたといえます。

発表後の質疑では、本州から来学された生殖に関する専門家や地元の方々から活発な発言があり、本シンポジウムへの関心と質の高さが端的に示されました。今後お二人の講演を報告書にまとめる予定です。



講演の様子



会場の様子

第14回アイヌ語弁論大会 イタカン ロー ～アイヌ語で話しましょう!～

期 日：11月6日(土)

場 所：クラーク会館

代表者：財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 理事長 中村 睦男

現在、アイヌ語教室は道内14か所と関東地区等において開設されていますが、その学習成果を発表する機会は限られています。こうしたことから、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構では、アイヌ語学習者に対して発表の場を提供することにより学習意欲の向上を図ることと、広く一般市民の方々に日頃耳にすることの少ないアイヌ語に親しむ場として「アイヌ語弁論大会イタカン ロー ～アイヌ語で話しましょう!～」を毎年開催しています。

本大会は今年で14回目を迎え、今年度は本学アイヌ・先住民研究センターが共催として加わるとともに、サステナビリティ・ウィーク2010の一環として実施されました。

本大会は、中学生以下が発表する子供の部、伝統的な口承文芸を披露する大人の部 口承文

芸部門、主義主張をアイヌ語で発表する弁論部門、過年度最優秀賞受賞者などが培ったアイヌ語を披露する口演の部から構成されます。今年度の出場者は、子供の部7組、口承文芸部門12組、弁論部門4組、口演の部6組の合計29組45名でした。

大会当日は、道内を始め道外各地からの幅広い年齢層の方々が、日々のアイヌ語学習の成果を発表しました。

今後も、大会に参加することがアイヌ語学習者にとって有意義なものとなり、来場者や開催地域にもアイヌ語の普及・振興が行なえるような大会づくりを行っていきたいと考えています。

なお、今年度大会の受賞者は以下のとおりです。

- | | | | |
|---------|------|--------|------------|
| ○ 最優秀賞： | 子供の部 | 自由 | 田澤 天翔 |
| | 大人の部 | 口承文芸部門 | 堀 多栄子 |
| | 大人の部 | 弁論部門 | 市川 伸太朗 |
| ○ 優秀賞： | 子供の部 | 自由 | 葛野ひな、今井とわ |
| | 大人の部 | 口承文芸部門 | 川奈野一信、豊田礼子 |
| | 大人の部 | 弁論部門 | 川村このみ、山田美郷 |



弁論大会の様子



表彰を受ける受賞者

特別講演「高齢化社会における世代間正義と健康」

期 日：11月7日(日)

場 所：人文・社会科学総合教育研究棟

代表者：文学研究科 教授 新田 孝彦

本行事はハーバード大学公衆衛生大学院教授のノーマン・ダニエルズ(Norman Daniels)教授による特別講演として開催されました。ダニエルズ教授は「公衆衛生の哲学・倫理」の分野では第一人者として知られています。ダニエルズ教授はロールズの「反省的均衡」という概念についての研究で知られており、医療資源の適切な配分というテーマはダニエルズ教授の研究テーマの一つであり、ダニエルズ教授には日本語に翻訳された論文もあります。

ダニエルズ教授には医療資源の適切な配分と公衆衛生における正義という問題について多くの研究業績があります。

今回の講演のタイトルは‘Intergenerational Justice, Health and Global Aging’というものでした。この講演でダニエルズ教授は、高齢化社会における健康の促進とそのために必要な医療資源等の配分について、世代間正義、特に配分の公正という観点から論じました。

高齢化は先進各国で大きな問題となっていますが、社会の高齢化は生命倫理の分野でも大きな問題としてとりあげられています。特に急速に出生率が低下したイタリア、低出生率と低死亡率と一人っ子政策が相まって急速に高齢化が

進む中国では、世代間での公正な医療資源の配分は大きな問題となっています。

しかし、「高齢化社会において医療資源をどのように配分するか」という問題を原理的に解決することは容易なことではありません。なぜなら高齢化社会における資源の配分の問題は、単なる「同じ年齢に属する集団間の公平な配分(若者と老人との配分の平等)」という観点では解決できないからです。

高齢化が進む社会では、ある年代に生まれた人々が他の年代に生まれた人々よりも不利益を被ることがあります。そのような不利益をどのようにして是正していくのかを考えることが私たちの今後の課題となるのです。ダニエルズ教授の講演はそのような問題点を指摘するものでした。

質疑応答も活発であり、会場にいたヴァージニア・ヘルド教授(ニューヨーク市立大学)、ゼーレン・ホルム教授(マンチェスター大学)、さらに本学の留学生などから多くの質問がありました。

なお、本講演は文学研究科・応用倫理研究教育センター主催の「第5回応用倫理国際会議」のプログラムの一部として実施されました。



講演するダニエルズ教授



会場の様子

市民フォーラム「サステナビリティ水産科学の理論と実践 ～あなたがいるから、私も生きていける～」

期 日：11月9日（火）

場 所：函館地域交流まちづくりセンター

代表者：水産科学研究院 教授 帰山 雅秀 及び 同教授 斎藤 誠一

明日の人類が健康で安心して生活していける「持続可能な社会」の構築に向け、「あなた（海洋生態系）がいるから私（人類）も生きていける」をキーワードとし、世界の人口65億人強のうち29億人が食の糧として利用している海洋生物と海洋生態系をどう守っていくかを論議した。

講演内容と総合討論の要約は次のとおりです。海洋生態系は食糧としての供給サービス、物質循環としての支持サービス、生物多様性としての調整サービス、そして安らぎ等の文化的サービスとして人類に貢献しているが、現在、海洋生態系とその構成生物は温暖化や乱獲などのヒューマン・インパクトの攪乱を受けています。例えば、海洋における自然漁獲物のうち、食糧として直接利用されているのは50%、残り

は肥料や魚粉として25%、そして残りの25%は廃棄されています。マグロなどの海洋生態系の高次生物は乱獲により減り続けて、絶滅危惧種になったり、海底の生態系は底引きトロール漁業により単純化しています。

このように、海洋生態系は人類の活動により攪乱され、その生物多様性が低下し、海の砂漠化がおきています。

次世代へ持続可能な社会をつくるために、いかにして「食」と「海」を守るか、地球規模で考え、その場その場で対応していかなければなりません。“Think globally, act locally”（Rense Dubos）から最近“Glocal”と言う言葉が流布するようになってきました。正しく、私たちは、地球規模で考え、足もとから持続可能な社会を実現していくことが大切です。

プログラム内容は以下のとおりです。

はじめに「サステナって何？！」（帰山雅秀：北海道大学水産科学研究院）

基調講演1「サステナな社会づくり－海とシーフードを守るために」

（ラシード・スメイラ：ブリテッシュ・コロンビア大学水産学センター所長、カナダ）

基調講演2「地球市民とサステイナブルな漁業－サバがトロより高くなる日」（井田徹治：共同通信社科学部）
講演（実践）

「サケのサステナのためのエコラベル MSC」（永田光博：北海道立総合研究機構さけます内水面水産試験場）

「サステナな栽培漁業をめざして－遺伝子で診る」（北田修一：東京海洋大学）

「サステナな養殖を宇宙から診る」（イ・ニヨマン・ラディアータ：北海道大学水産科学研究院）

「環境変化に負けない養殖技術の最前線－熱伝導パイプ&オゾンの活用」（滝川裕弘：アクセプターテクノ株式会社）

「サステナな漁業への挑戦－株市場からみる持続的漁業への道」（石村学志：北海道大学サステナビリティ学教育研究センター）

「サステナな沿岸漁業と海洋生態系の保全－知床を例として」（桜井泰憲：北海道大学水産科学研究院）

総合討論「グローバルなサステナ？！」（司会 斎藤誠一：北海道大学水産科学研究院）



参加者と会場風景



講演者とスタッフで記念撮影

日本学術会議北海道地区学術講演会「北海道から発信するグリーンイノベーション」

期 日：11月15日（月）

場 所：学術交流会館講堂

代表者：日本学術会議北海道地区会議，北海道大学

北海道の特徴である広い大地と豊かな自然，そして北海道で生み出される新たな科学・技術の双方を活かした，新たな生活・産業・経済の形について提言を行いました。

自然環境への負荷を緩和して自然を保全・再生し，さらに自然災害などの環境変化に適応するといった「自然と人類との共生」を図りつつ，同時に「人類の発展」を進める「グリーンイノベーション」とはどのようなものか，その展望を語り新たな科学・技術のあり方を考えることを目的に日本学術会議北海道地区会議及び北海道大学とが協力し，学術講演会を開催しました。

第1部の講演では，日本学術会議の大垣眞一郎副会長の「日本の展望」と新しい科学・技術」と題した基調講演の後，本学の4名の研究者から「見えない光，赤外線を利用する太陽電

池」（三澤弘明 電子科学研究所長，教授），「北海道における地中熱ヒートポンプシステムの環境貢献と経済効果」（長野克則 工学研究院教授），「日常生活をもっと便利にする北大発のナノテクノロジー」（古月文志 地球環境科学研究院教授），「太陽光エネルギー利用と環境浄化のための新しい光触媒技術」（阿部竜触媒化学研究センター准教授）と題した北海道発の最新の学術成果が一般市民にも分かりやすく発表されました。

第2部のパネルディスカッションでは，創成研究機構 客員教授の佐藤のりゆき氏がモデレーターとなり，6名のパネリスト（第1部の講師4名に近久武美 工学研究院教授及び加藤昌子 理学研究院教授）を迎え，「今後の生活エネルギーの主体は何か？」などをテーマに活発な意見交換が行われました。



パネルディスカッション風景



大垣副会長の基調講演

平成22年度北海道地区国立学校等 安全管理協議会に北大より担当職員が参加

11月11日（木）から12日（金）にかけて室蘭工業大学において、平成22年度北海道地区国立学校等安全管理協議会が開催されました。本協議会は、毎年、道内の大学等の安全衛生管理担当者が集まり、研究室の作業環境管理から、健康診断、メンタルヘルスまで多岐にわたる労働安全衛生管理業務について、講習や情報交換を行い、発意研鑽の場として活用されています。

本年度は本学から14名が参加し、吉田勇人総務課長（環境安全衛生室長）から国立七大学安全衛生管理担当者連絡協議会中間報告書の内容について報告するとともに、工学部からは米田

久和安全衛生管理担当係長が、工学部で週1回実施している衛生管理者巡視について事例発表を行いました。

このほか、北海道教育大学や室蘭工業大学で実施している構内全面禁煙の取り組みと、それに対する学内外の反応、室蘭工業大学の実験室の作業環境測定省力化の取り組みなど、現在、北海道大学で抱える問題の参考となる事例も数多く発表され、まさに労働安全衛生の業務を行う上での発意研鑽の場として有意義な協議会となりました。



吉田総務課長による報告



米田係長による発表

（総務部総務課環境安全衛生室）

新化学物質管理システム部局管理者説明会を開催

11月30日(火)に化学物質管理システムの部局管理者を対象とした、管理者IDの申請に係る説明会を開催しました。本学では薬品を使用、保管する場合や、環境保全センターに依頼して有害廃液を排出する場合、化学物質管理システムへの登録が義務づけられています。本システムは平成23年4月に新システムへの移行を予定しており、システムの仮稼動に当たって施

設情報の整備及び部局、研究室管理者ユーザーの設定が必要なことから、今回、説明会を開催いたしました。

新システムにおいて部局管理者は、部局内研究室のID管理、部局内の薬品の保有・管理状況の把握等を行うことから、その役割はますます重要となり、出席者は今後の業務を想定しながら真剣な面持ちで聞き入っていました。



澤村環境保全センター長による説明の様子



システムメーカー担当者による説明の様子

(総務部総務課環境安全衛生室)

漕艇部「小艇庫」落成式の開催

11月18日（木）に、北大漕艇部及び茨水会（北大漕艇部OB会）の主催による小艇庫落成式が、石狩市生振の茨戸ボート艇庫において開催されました。

茨戸ボート艇庫は、平成2年に、本学と小樽商科大学の両大学において建設し、両校の漕艇部が共同で使用しているボート専用の体育施設です。

漕艇部は、艇庫完成後徐々に部員が増え、平成18年度の全国大学選手権大会優勝の後（「えるむ第121号」<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/gakumu/erumu/erumu-no121/boat.htm>）、この傾向に拍車がかかり、ボートの保有数（特に小艇）が増加しました。

この結果、従来の艇庫では収納できなく、小艇を屋外で保管している状況が続いていることから、茨水会（北大漕艇部OB会）の皆様から「北大フロンティア基金」へ多大なるご寄附を

いただき、この寄附金に本学の資金を合せて、本学専用の小艇庫2棟を新たに建設し、併せて周辺を舗装にするなどの整備を行ったものです。

当日は、快晴に恵まれた天候のなか、来賓、OB、現役漕艇部員の約30名が参列し、石川健三 顧問（理学研究院・教授）の挨拶に続いて、佐伯 浩 総長から祝辞及び「北大フロンティア基金」への寄附に対する感謝状の授与が行われ、山本 宏 茨水会会長の挨拶、ボートの納庫と田中嵩大 前主将（理学部4年）からお礼の言葉が述べられた後、参列者全員で円陣を組み部歌「春3月の」等の合唱が行われ、大盛況のうちに終了しました。

漕艇部は、充実した練習環境が整ったことにより、今後、再び全国制覇を成し遂げてくれるものと大いに期待しています。



祝辞を述べる佐伯 総長



挨拶する石川 漕艇部顧問



挨拶する山本 茨水会会長



お礼を述べる田中 前主将



陣を組み部歌「春3月の」等を合唱

（学務部学生支援課）

イルミネーション点灯式

12月6日(月)高等教育推進機構正面玄関前において、イルミネーションの点灯式が今年も行われました。このイルミネーションは、冬本番を間近に控えたこの時期に毎年行われています。

点灯式では、カウントダウンの合図に合わせて、小泉信隆 学務部長により点灯スイッチが

入れられました。

イルミネーションの幻想的な無数の光に集まった人々からは拍手と歓声が上がりました。

また、昨年に引き続き北大合唱団による合唱が行われ、点灯式はよりいっそう盛り上がり、心の中がほのぼのと暖くなりました。



イルミネーションの灯ったハルニレの木



北大合唱団による合唱

(高等教育推進機構)

第50回全国七大学総合体育大会 「公式マスコット」の決定！

平成23年度に北海道大学が主管校として開催する「第50回全国七大学総合体育大会」の公式マスコットが「ポップ等（ぽぷら）」に決定しました。このマスコットは、北海道大学の学生に募集を行い、同大会実行委員会による厳正なる審査を経て決定されたものです。

全国七大学総合体育大会は、学生が主体となり、北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学が輪番制により開催している体育大会です。

昭和37年度に第1回大会が本学で開催され、言わば本学が同大会の発祥の地です。昭和36年に北海道大学体育会委員長となった阿竹宗彦氏は、セミプロ化しつつある学生スポーツ界へのアピールとして、「学生自身の運営する総合体育大会」が必要と考え、競技ごとに個別に行われていた七帝戦を総合化した「国立七大学総合体育大会」の開催を提唱したことが、同大会

誕生の発端となっています。通信網や交通網が現代より未発達時代に、全国を駆け巡り開催までたどり着いた、北大の開拓者精神そのものの先人達の苦労が伺い知れます。

第50回大会は、平成22年12月11日（土）から開催した「アイスホッケー」を皮切りに、来年9月中旬までの間に全31競技が行われ、全国から約8,000名の学生が北海道に集います。

現在、来年7月2日（土）の「総合開会式（クラーク会館）」に向けて、本学の体育会が中心となって準備を進めており、また、同大会を盛り上げるための広報活動として、「ポップ等」のキャラクター商品の企画・開発を、体育会と北海道大学生生活協同組合のタイアップで行われています。

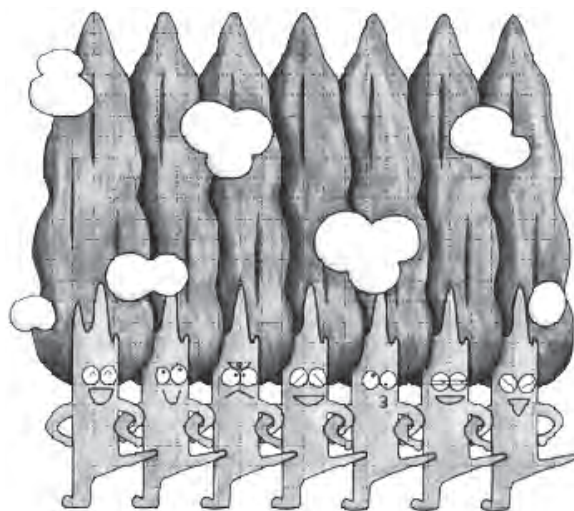
この記念すべき第50回大会が、学生皆さんの心に刻まれる、熱くそして素晴らしい大会となることを願っています。

公式マスコット

「ポップ等（ぽぷら）」の説明

北大名物のポプラ並木です。平成16年の台風で多くが倒れてしまいましたが、今でも北大の大事なシンボルであることには変わりありません。日常生活で実際にその姿を見ることはなくても、ポプラの飛ばす種は北大生にとって馴染みのあるものだと思います。それに倒れてしまった木はチェンバロに生まれ変わり、新たなシンボルとして北大を彩ります。

7本のポプラは、七大学が仲良く手を取り合って七帝戦を盛り上げていくことを表しています。まっすぐ上へ上へと伸びる枝は、その先に続く青い空へと学生を導いてくれます。競技力の向上、スポーツマンシップ、七大学総合体育大会の発展への願いも象徴しています。



(学務部学生支援課)

放射線障害防止のための教育訓練及び エックス線障害防止のための教育訓練を実施

11月15日(月)から17日(水)にかけて、放射性同位元素等の取扱者を対象にした「放射線障害防止のための教育訓練」及びエックス線取扱者を対象にした「エックス線障害防止のための教育訓練」を学术交流会館、アイソトープ総合センターにて開催しました。

この教育訓練は、放射性同位元素等及びエックス線を取扱う際の障害を防止するため、取扱者に必要な安全な取扱い及び関係法令等についての基礎的な知識等を身につけることを目的として、法令等で受講が義務づけられているものです。

放射線障害防止のための教育訓練のうち、更新登録者を対象とした回では、特別講演を行

い、今回は工学研究院 藤吉亮子准教授よりアイソトープ及び放射線利用に関する最近の話題について、お話をしていただき、大変好評を得ました。

また、11月16日(火)には、本学で初めて外国人留学生等を対象とした英語による放射線障害防止のための教育訓練を実施し、17名の参加がありました。実習を含めた長時間の訓練でしたが、受講者は、真剣な面持ちで熱心に取り組む様子が見受けられ、無事に終了することができました。

次年度は、春に実施を予定しておりますので、対象となる方は、忘れずに受講してください。



佐藤正知委員長による挨拶



関興一特任教授による講義



実習の様子



藤吉亮子准教授による特別講演会

(学術部研究協力課)

「北海道ブロック大学等安全保障貿易管理説明会」 の開催

11月26日（金）に、北海道の大学、高等専門学校及び公的研究機関を対象にした「北海道ブロック大学等安全保障貿易管理説明会」が人文・社会科学総合教育研究棟1階1番教室で開催されました。

この説明会では、経済産業省貿易経済協力局貿易管理部安全保障貿易検査官室・安全保障貿易検査官 竹尾学氏及び特定非営利活動法人産

学連携学会理事で山形大学大学院理工学研究科足立和成教授より、安全保障貿易管理に係る法令上の枠組みや大学等における自主管理体制の構築・運用上の留意点についてそれぞれ説明が行なわれました。

質疑応答では、北海道内全域から集まった参加者から、安全保障貿易に関する様々な質問が寄せられました。



竹尾学氏による説明



足立和成教授による説明

（学術部研究協力課）

ビジネスEXPO「第24回 北海道 技術・ビジネス交流会」に参加

北海道の経済活性化や産業振興のため、新たなビジネスチャンスの創出を目指した北海道最大の展示会“ビジネスEXPO「第24回 北海道技術・ビジネス交流会」”が11月11日(木)・12日(金)の2日間、札幌市白石区のアクセスサッポロで開催されました。

今回は、「北海道力、みなぎる。」をテーマに、道内外の301企業・団体・大学・研究機関の出展による318ブースでの展示があり、ビジネスセミナーの他、出展者によるプライベートセミナーや商談会も開催されました。

本学からは、「産学連携本部の紹介」、「工学研究院 長野克則教授のシーズを活用した複数の企業との産学連携事例」、「地球環境科学 山田幸司准教授とベンチャー企業の製品開発に関する産学連携事例」の3つのブース

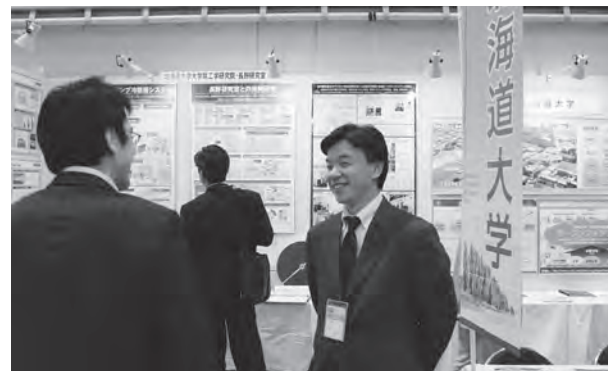
出展をしました。

今年の本学のテーマは、「海外とのビジネス展開に大学を活用する」として、ノーベル化学賞受賞が決定した鈴木章名誉教授のパネルの他、海外からの研究者受け入れや派遣の実情を数字で示したパネルや国際学会開催による地域への経済効果を具体的な数字で表し、大学の地域貢献を分かりやすく展示しました。

2日間のイベント来場者は、主催者の発表では、悪天候の影響で、過去最高だった昨年を900人ほど下回る18,121人にとどまったとの事でしたが、北大ブースには人が途切れることなく、企業や市民の皆さんが多数来場され、当初用意した資料が初日に払底するなど、本学と地域との関わりを大いにPRすることができました。



来訪された丹保元総長
(現、地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 理事長)



来場者との意見交換の様子

(産学連携本部)

平成22年度北海道大学国際産学官連携セミナーを開催

産学連携本部では、11月19日（金）学術交流会館において、平成22年度北海道大学国際産学官連携セミナーを開催しました。

本セミナーは、文部科学省大学等産学官連携自立化促進プログラムの一環として、「中国の環境・省エネルギーニーズへのアプローチ－Win Winの関係を築くには－」をメインテーマとし、産学官連携活動の国際展開を目指し行われたもので、本学教職員、学生、学外関係者等、約130名の方が参加しました。

岡田尚武本部長のご挨拶、山崎淳一郎文部科学省技術移転推進室室長補佐からの産学官連携の現状と今後の展望についてのご講演の後、本セミナーの講師として中国から招聘した、中国

建築科学研究院 鄒瑜 副院長（省エネルギー分野）、南京師範大学 朴桂林 教授（バイマス分野）のお二人に、中国の省エネ・環境ニーズを紹介していただきました。さらに、セミナーでは、北海道の技術について取り上げ、中国との連携、これを支えるプロジェクトの成功要素となる相互理解の問題について講演がなされました。参加者には中国とのビジネス交流を考えている方も多く、今後の中国との連携について有益な情報が得られたと好評でした。

セミナー後の交流会には、約40名が参加し、中国からの留学生の参加もあり、友好色一杯で閉会となりました。



中国建築科学研究院 鄒瑜副院長の講演



南京師範大学 朴桂林教授の講演



会場の様子



交流会の様子

（産学連携本部）

北海道大学交流デー（長春）を開催

本学は、日本と中国の教育研究分野の連携推進と、グローバルな観点を持ちイノベーション精神に富む優秀な人材育成につなげることを目的として、11月11日（木）に中国長春市・吉林大学を会場とした北海道大学・吉林大学交流デーを、12日（金）に同じく長春市・東北師範大学を会場とした北海道大学・東北師範大学交流デーを開催しました。

このイベントは、中国の学生たちに本学の最先端の学術研究成果や大学の歴史と現状を紹介し、日本の教員や学生との直接的なコミュニケーションによって、両大学間の研究・学生交流を促進するとともに、日中文化の異なった魅力を知ってもらうものです。本堂武夫 理事・副学長をはじめ、学部・研究科等から合わせて約30名の教職員及び学生が出席しました。

両会場には、それぞれ吉林大学 趙継副学長（本学OB）や東北師範大学 史寧中学長、長春理工大学 孫偉志副学長（本学OB）、独立行政法人日本学術振興会 福西浩北京研究連絡センター所長、日中経済協会北京事務所 角田貴美

札幌経済交流室所長をはじめとする中国と日本の大学関係者、学生などが出席し、各参加機関による紹介や、地球環境科学研究所 古月文志教授による講演などに聞き入っていました。

また、両大学と交流の深い学部・研究科等では、それぞれの大学と学生による研究交流セミナーが開催されました。11日（木）には本学法学研究科と吉林大学法学院が、12日（金）には本学理学院数学部門と東北師範大学数学・統計学院がセミナーを行い、両大学の学生の間で積極的な意見交換が行われました。

各会場では、本学に留学経験のある教員による発表も行われ、両大学の学生たちが興味深く耳を傾ける様子が見られました。

留学相談会では、本学に興味を持つ中国人学生が集まり、教員や北京オフィススタッフに熱心に質問をしていました。

今回のイベントでは、両会場あわせておよそ350名の参加がありました。本学は今後も海外でのPRに力を入れ、国際的な研究・学生交流の推進に努めてまいります。



挨拶をする本堂理事・副学長



会場の様子（東北師範大学）



野澤北京オフィス所長による大学紹介



留学相談会

（国際本部国際連携課）

海外大学とのコンソーシアム活動の報告： 「大学同士のESDコンサルテーション」を実施

アジア・太平洋地域で「持続可能な発展のための教育（ESD）」を推進している優れた大学や国連機関から、専門家をコンサルタントとして本学に迎え、「キャンパス・サステナビリティ」の取り組みに関するコンサルテーション会議を11月5日（金）に開催しました。

本学からは、脇田稔 理事・副学長、本堂武夫 理事・副学長をはじめとして、サステナブルキャンパス推進本部、創成研究機構、サステナビリティ学教育研究センター、地球環境科学研究院、施設部及び国際本部から教職員が出席しました。

本学の「キャンパス・サステナビリティ」に関する取り組みを運営・教育・研究・社会貢献という4つの観点で整理した上で、海外の事例と比較しつつ、今後の課題や改善点などの意見

交換を行いました。コンサルタントは、今回の会議の結果を受けて、本学に提言書を提出する予定です。

この会議は、国際本部が取り組んでいる海外コンソーシアム「アジアESD大学院ネットワーク（ProSPER.Net）」の共同事業です。Alternative University Appraisalプロジェクトと名づけられた当事業は、大学ランキングの代替となるラーニング・コミュニティの構築を目指しています。当事業では、今後、メンバー大学で継続的にコンサルテーションを開催し、システムづくりを行っていく予定です。

詳しくは、以下のウェブサイトをご覧ください。

URL: <http://www.sustain.hokudai.ac.jp/aua/jp/>



本堂理事・副学長による
本学の取り組みに関するプレゼンテーション



コンサルタント大学との意見交換

（国際本部国際連携課）

2010年韓国大学生訪日研修団の本学訪問

11月8日(月)、韓国大学生訪日研修団30名が本学を訪問し、本学の学生と交流を深めました。この研修団は、平成元年に政府によって策定された「日韓学術文化青少年交流事業」の一環で訪日したもので、本学には平成20年以来、2年ぶりの訪問となりました。

研修団はまず、学術交流会館にて本学の歴史的な背景や国際的な取り組み及び近年重点的に取り組んでいるサステナビリティについての概要説明を受けました。続いて、情報科学研究科本間利久教授による授業を、実際に履修している学生と一緒に受講しました。グループディスカッション形式で行われた授業を受講した学生からは、「研修団と交流ができて、いい経験になった」、「お互いの文化や環境が異なると、考え方も異なるということを肌で感じた」といった声が聞かれました。

授業終了後は、百年記念会館内のレストランきゅら亭に移動し、昼食会を開催しました。各テーブルでは料理を囲みながら、研修団同行の

通訳者や本学の韓国人留学生を交えて、お互いの大学生活や研究内容についての対話が活発に行われました。本学学生からは、「研修団は日本語を話せる人も多く、国際的な意識の高さに驚いた」といった感想が寄せられ、お互いにより刺激を受けたようでした。

午後は、本学国際交流サークルSACLAのメンバーの解説によるキャンパスツアーが行われました。農学部の建物やクラーク像と共に記念撮影をするなど、研修団一行はとても楽しんでいる様子で、特にイチョウ並木がある北13条通りにさしかかると、研修団から思わず歓声が上がりました。

最後に見学した総合博物館では、本学の歴史や学術資料について詳細な説明を受け、研修団は積極的に質問を寄せていました。半日の短い訪問でしたが、今回の交流会は本学の学生と研修団員のそれぞれにとって、貴重な体験になったと思われます。



本間教授によるグループディスカッションの授業



本学国際交流サークル SACLA による
キャンパスツアー

(国際本部国際連携課)

部 局 ニ ュ ー ス

附属図書館北図書館で「鈴木章名誉教授 ノーベル賞受賞記念図書展示」を開催

11月8日（月）から1月13日（木）まで、附属図書館北図書館2階カウンター前において、鈴木章名誉教授のノーベル化学賞受賞を記念した企画展示を開催しています。

先生のご著作や関連図書のほか、工学部のご好意により、先生がご自分の研究を決めるきっかけとなった「Hydroboration」（Herbert C. Brown著、工学部中央図書室所蔵）や本学を退

官される際に作成された記念誌（工学部材料化学系専攻図書室所蔵）も展示しています。また、HUSCAP（北海道大学学術成果コレクション）所収の先生の論文、ノーベル賞に関連した北図書館所蔵の図書も併せて展示しています。

展示図書の一覧は次の通りです。

1	Heterocycles: an international journal for reviews and communications in heterocyclic chemistry, vol.80,no.1 (2010 Jan.)	鈴木章先生傘寿記念号
2	Hydroboration / Herbert C. Brown (1962)	(工学部所蔵)
3	Organoboranes in organic syntheses / Akira Suzuki (2004)	
4	Suzuki coupling / Akira Suzuki, Herbert C. Brown (2003)	
5	オレフィン類から位置選択的にカルボン酸を製造する方法に関する研究 / 研究代表者 鈴木章 (1983)	科学研究費補助金報告書
6	化学者たちの感動の瞬間：興奮に満ちた51の発見物語 / 有機合成化学協会編 (2006)	
7	ハイドロボレーション反応を利用した高選択的有機合成に関する研究 / 研究代表者 鈴木章 (1986)	科学研究費補助金報告書
8	ホウ素と有機合成：鈴木章教授退官記念誌 / 北海道大学工学部応用化学科応用化学第三講座 [編] (1994)	退官記念誌 (工学部所蔵)
9	有機金属化合物を用いる合成反応 / 鈴木章, 伊藤健児, 若松八郎 (1974-75)	
10	有機ホウ素化合物を用いた高選択的炭素-炭素結合形成反応の開発 / 研究代表者 鈴木章 (1994)	科学研究費補助金報告書

（アルファベット，五十音順。特に記載のないものは附属図書館所蔵）



展示風景

（附属図書館）

水産学部附属練習船おしよろ丸に対し内閣府から感謝状

本年8月18日(水)から26日(木)にかけて行われた北海道の事業「北方領土墓参航海」に水産学部附属練習船おしよろ丸が協力要請を受けたことに対して、内閣府から感謝状が贈呈されました。

感謝状の贈呈式は11月18日(木)に総長室で、翌19日(金)には水産学部長室で行われ、内閣府北方対策本部の小河俊夫 審議官から佐伯 浩 総長、高木省吾 船長に手渡されました。

本航海は昨年に引き続き2航海をおしよろ丸が実施しており、第3班では元島民23名、墓参

同行者12名、本学事務スタッフ4名の計39名が乗船し、歯舞群島の志発島西浦泊墓地での慰霊祭、第4班では元島民28名、墓参同行者11名、本学事務スタッフ4名の計43名が乗船し、国後島ラシコマンベツ墓地、植内墓地、植冲墓地での慰霊祭を行いました。

おしよろ丸は平成20年度から本航海を実施しており、今年で3回目を迎えました。今後も可能な限り協力したいと考えています。



贈呈式の様子(18日総長室)



贈呈式の様子(19日水産学部長室)
高木船長(左)、小河審議官(右)

(水産科学院・水産科学研究所・水産学部)

「法科大学院に関するアドバイザリーグループ会議」を開催

11月9日（火）東京都千代田区の学士会館において、「第9回法科大学院に関するアドバイザリーグループ会議」が開催されました。本会議は、本学法学部卒業生の東京同窓会会員の中から法曹界、産業界、教育界等において現在中核を成してご活躍されている方々で構成されています。その設置目的は、平成16年度に設置された本学法科大学院が独自の理念や構想を持って発展していくため、その教育内容や方法、第三者評価や施設設備の充実、情報公開や奨学金及び授業料免除等の各種支援制度等々、多方面にわたる貴重な助言をいただくことであります。なお、前回から、法科大学院だけでなく、

法学研究科全体及び法学部についても助言をいただくこととなり、今回の開催が9回目にあたります。当日は、11名の同会議メンバーに加え、本研究科から、常本照樹 法学研究科長、長井長信 法科大学院長及び松久三四彦 評議員代理が出席し、これまで取り組んでいる施策等の進捗状況や問題点、今後の課題、新司法試験の合格状況等について報告・説明の後、熱の入った活発でかつ貴重な意見交換や提言がなされました。今後も1年に1回程度の開催を目途とし、テーマ設定の検討等を行い、さらなる会議の充実化を図ることが確認され、盛会のうちに終了しました。



常本法学研究科長から法学研究科
及び法学部の現状報告

（法学研究科・法学部）

北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシア世界」が「国境フォーラム in 対馬」を開催

スラブ研究センターでは、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」と笹川平和財団助成「境界地域研究ネットワーク JAPAN」の主催で、長崎県対馬市交流センターにおいて11月12日（金）、13日（土）の2日間「国境フォーラム in 対馬」を開催しました。

このフォーラムは、境界地域の自治体や境界研究を専門とする国内外の研究者が参加して、各自治体の境界問題を現地目線で捉え共有するとともに、世界的な比較視点から解決に導いていくことを目的としており、今回で4回目の開催となります。

フォーラム初日には、デンマーク、カナダ、フランス、韓国からの研究者が参加し、各国の境界問題の現状について説明がなされました。また、2日目には、対馬市、根室市、小笠原村、与那国町の自治体等の関係者による地元の実情説明や、スラブ研究センター 岩下明裕 教授の司会による財部能成 対馬市長、長谷川俊

輔 根室市長、薮野祐三 九州大学名誉教授、山田吉彦 東海大学教授、松田良孝 八重山毎日新聞記者による座談会「ボーダーに暮らす私たちからの提言」や、山口県立大学の浅羽祐樹ゼミの学生による「対馬の心象地図：高校生は韓国をどう見ているか」の調査報告がなされ、2日間で延べ300人近い参加者を集め、好評のうちに終了しました。この模様は、対馬、長崎の地方紙のみならず、北海道新聞にも取り上げられました。

同時に、移動展「知られざる日本の国境」展を同交流センターのギャラリーで開催し、樺太（サハリン）に設置されていた「日露国境標石」のレプリカや八重山と台湾の境界に関する資料などを展示やDVD上映し、研究成果を対馬市民に紹介しました。

なお、この移動展は、12月21日（火）から沖縄県立博物館・美術館県民ギャラリーでも開催されることになっています。



エマニュエル・ブルネイ・ジェイ氏の報告



山口県立大学部生によるプレゼンテーション



座談会「ボーダーで暮らす私たちからの提言」

（スラブ研究センター）

経済学研究科・経済学部で「経済学部3年生、研究生のための大学院ガイダンス」を開催

経済学研究科・経済学部では、11月11日（木）に、「経済学部3年生、研究生のための大学院ガイダンス」を開催しました。本研究科教員による大学院経済学研究科ならびに会計専門職大学院（会計情報専攻）の概要説明、現役大学院生による大学院の魅力や「早期履修制度」の紹介、質疑応答という順でガイダンスが進められました。経済学部生8名を含む計15名が出席し、質疑応答も活発に行われました。

「経済学部3年生」を主なターゲットの1つにしているのは、次のような背景からです。

経済学部生をはじめとする文系学部生にとって、もっとも一般的な卒業後の進路は、民間企業への就職です。近年、就職活動の開始時期が

早まると同時に、活動期間も長期化する傾向にあり、一部、社会問題視されています。事実、学部3年次の秋頃から就職活動が本格化し、学生の多くが、否が応にも「就活」に巻き込まれていきます。とはいえ、学部卒業後の進路は就職だけではなく、大学院に進学し、より深い学問的知見や高度な知的スキルを身につけるという道もあります。

学部卒業後の進路の1つとして、大学院進学という選択肢も視野に入れることで、学生自身が将来をより多面的に考える機会としてもらうべく、経済学研究科・経済学部では、今後こうしたガイダンスを積極的に開催していきたいと考えています。



活発な質疑応答の様子



教員による研究科紹介



大学院生による「大学院への道」紹介

（経済学研究科・経済学部）

経済学部で札幌国税局長の特別講演会を開催

経済学部では、札幌国税局長の橋本元秀氏による特別講演会を11月15日(月)午前10時30分より学術交流会館・小講堂において開催しました。特別講演会のタイトルは「日本の税制と税務行政」で、税制の歴史的な変遷と税務行政の現状と課題について講演していただきました。

講演者である橋本氏は、大蔵省金融局、金融庁、国税庁で勤務され、特に、国税庁では査察課長を務められた経験があります。まず、日本の税制については、日本の社会経済状況の変化に応じて、国の税収構造がどのように歴史的に変遷してきたかについて語っていただきました。農業を中心とする明治時代は、酒税と地租が最も大きな割合を占めていましたが、昭和時代に入ると所得税を中心とする税制に移行し、さらに現代社会では消費税が導入されています。

興味深い点を2つ挙げると、第一に、課税対象が明治時代は酒と土地という「物」でしたが、これが「所得」という概念的なものに移行していく過程を説明されました。第二に、酒税に対する課税方法の変遷で、免許税から生産量である造石高に応じて課税する方法に推移し、さらに酒蔵からの移出量に応じた課税方法に変

わっていく過程を説明されました。その際、当時の酒税の脱税に対する取り締まりを非常に興味深く語っていただきました。昔の素朴な話を聞き、税の世界に引き込まれていく感じがしました。

次に、税務行政については、査察調査について実際の体験を踏まえて語っていただくとともに、税務行政のIT化と国際化の問題についても説明していただきました。

講演会には多数の出席者があり、経済学部の学生と大学院生ばかりでなく、他学部の学生や一般の方の参加もありました。当日、参加者にアンケートを配布したところ、参加者の多くから橋本氏の講演が非常に有益であった旨の回答がありました。

現在、我が国は深刻な財政危機に直面しています。国の増税に対して国民の十分な理解が得られないため、十分な税収を確保できず、財政が維持できない状況にあります。国民が税に関心を持ち、税の理解を通して社会的に参加し、真剣に社会全体として持続可能な制度を考えていく必要があります。このような講演会が、学生の皆さんにとって現実の経済問題に興味を持ち、真剣に社会の在り方を考えるよい機会になることを期待します。



講演する札幌国税局長 橋本氏



質疑応答の様子

(経済学研究科・経済学部)

歯学研究科で動物供養祭を挙行政

歯学研究科では、11月26日（金）午後4時30分から学部会議室において、歯学教育・研究のため、過去1年間に実験に供されたサル、ウサギ、ラット、マウスの実験動物総数1,788体の供養祭を執り行いました。

供養祭は、最初に川浪雅光 研究科長から挨拶があり、次いで、動物実験委員会委員長の飯塚正 准教授から、「医学・歯学は人類の健康維持、疾病治療の分野で、人類社会の進歩と発展に貢献するものであり、その研究を基礎から支えるものとして、動物実験は欠かすことのできない重要なものである。本研究科においても遺伝子改変動物を含む実験動物の適正な管理のため飼育室の整備を実施し、衛生的な飼育環境の構築に努めている」ことの報告があり、歯学研究の進歩のために尊い命を捧げてくれた多数の実験動物の御霊の安らかなることを願う旨「祭文」が捧げられました。

最後に、動物実験を行っている参列者全員により献花が行われました。



「祭文」を捧げる飯塚動物実験委員会委員長



参列した研究者



献花する参列者

（歯学研究科・歯学部）

北方生物圏フィールド科学センターで畜魂祭举行

北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場では、11月12日（金）午後1時から、ポプラ並木中ほどに位置する畜魂碑前において、教育・研究に供された家畜の供養のために畜魂祭を執り行いました。あいにくの悪天候でしたが、長谷川周一センター長をはじめとする本センターの教職員、本センターを利用する農学部等の教職員・学生など多数の関係者に参列いただきました。

本センター生物生産研究農場では、自給飼料を主体とする物質循環型の持続的な家畜生産を継続して行っており、様々な教育・研究に用いられてきています。また、家畜用飼料作物の生産から、それらを利用した家畜生産を行

い、得られた生産物を加工して製品を製造するという一連の流れを教育の中心としています。これらの教育・研究活動に対して、多大な貢献をした家畜・家禽に感謝し、その御霊を供養するために、毎年畜魂祭を行っています。

はじめに中小家畜生産研究施設、酪農生産研究施設、畜産製造施設より、家畜・家禽の飼養頭数や利用実績等の報告があり、山田敏彦農場長の挨拶の後、参列者全員で拝礼しました。最後に山田農場長から、日本の食料自給率の低さやTPPへの参加検討をはじめとする日本の農業が直面する様々な問題に関する講話があり、参列者一同、教育・研究の推進や技術の向上が不可欠であると思いを新たにしました。



畜魂碑に御神酒を捧げる山田農場長



激しい雨と風の中、拝礼する教職員及び学生

（北方生物圏フィールド科学センター）

薬学研究院・薬学部で「実験動物慰霊祭」を挙行

薬学研究院・薬学部では、11月19日（金）に、本研究院ならびに本学部の教育と研究のために供された実験動物の慰霊祭を、教員、学生など関係者約100名が参列の下、執り行いました。

慰霊祭は、動物実験委員会 鈴木利治委員長より実験動物に供された動物たちに追悼の辞が

述べられ、次いで、参列者全員による黙祷及び献花が行われました。

最後に、鈴木委員長による挨拶があり、生命科学及び薬学の教育や研究の発展のために多大な寄与を遂げた各種実験動物の諸霊の供養を行いました。



追悼の辞を述べる鈴木委員長



多数の参列者



献花をする関係者

（薬学研究院・薬学部）

平成22年度 薬学部成績優秀賞授与式を実施

11月26日(金)、薬学部会議室において、平成22年度北海道大学薬学部成績優秀賞授与式が行われました。

この賞は、「GPA制度の導入に伴い、学業が優秀な学生を顕彰し、学生の向学心を喚起する」ことを目的として、平成17年度以降に入学した学部3年次生を対象として設けられたもので、今回で4回目の授与式となります。

今年度は、学部専門科目の成績が特に優秀な

3名が受賞者に選ばれました。

授与式では、27名の薬学部教員が見守る中、松田彰 学部長から表彰状と記念品が一名ずつに授与されました。

成績優秀賞受賞者は薬学研究院・薬学部のホームページに掲載する予定です。

今後この賞が本学部学生の向学心をよりいっそう喚起するものとなることを期待しています。



学部長から表彰状を授与される成績優秀者



(薬学研究院・薬学部)

水産学部で北大ペンハロー賞授賞式を実施

11月12日（金）学部長室において、北大ペンハロー賞の授賞式を実施しました。

北大ペンハロー賞は、本学学生の課外活動の充実と更なる活性化を図るため、平成17年度から、「北大えるむ賞」に該当しない活動であって、特に優れた活動を行った学生団体等を表彰しているものです。

他学部の受賞者には、10月26日（火）に札幌キャンパスにおいて脇田 稔 理事・副学長から授与が行われましたが、水産学部生には函館キャンパスにおいて嵯峨 直恆 学部長から賞状と記念品が授与されました。

平成22年度第1回（年2回表彰）は、団体1，個人5名が受賞しております。

【団体】

団 体 名	氏 名	所属・学年
馬 術 部	（代表）千田 裕洋	増殖生命科学科3年

【個人】

団 体 名	氏 名	所属・学年
硬 式 野 球 部	福 田 裕	増殖生命科学科3年
水 泳 部	瀬 田 智 文	海洋生物科学科4年
水 泳 部	長谷川 嵩 人	海洋応用生命科学専攻修士課程1年
水 泳 部	藤 原 将 平	海洋資源科学科3年
ボ ー ト 部	光 山 成 美	増殖生命科学科4年



嵯峨学部長と受賞者たち

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）

水産学部で体験学習教室「マクロ生物学への招待～ヤドカリの繁殖行動を科学する～」を開催

水産学部では、11月20日（土）に高校生を対象とした体験学習教室「マクロ生物学への招待～ヤドカリの繁殖行動を科学する～」を開催しました。

これは独立行政法人日本学術振興会（JSPS）が実施する、「ひらめき☆ときめきサイエンス」に水産科学研究院の和田哲 准教授が申請・採択され、実施したものです。

プログラムの午前中には、実習講義「個体群成長と自然淘汰による進化」を行い、パソコンを使った簡単なシミュレーションをしながら、

高校生物では学ぶ機会が少ない個体群成長と自然淘汰による進化について学習しました。

午後からは、実際にヤドカリを用いた配偶行動の観察実験を行いました。受講生自ら提案した実験も行い、大学院生と協力しながら結果について考察しました。

受講生の中には、青森県八戸市から参加する高校生もいました。

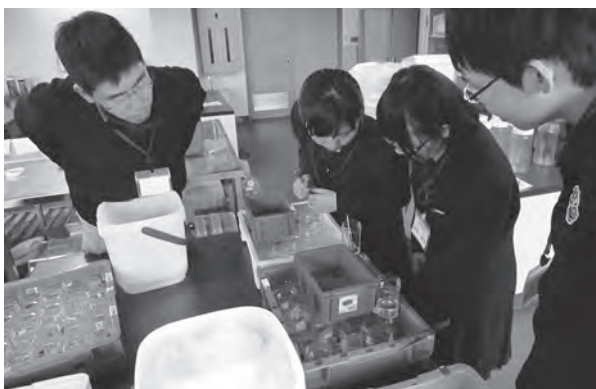
受講生は皆、ヤドカリの行動に興味を深めていました。



体験学習教室の様子



パソコンを用いたシミュレーション



ヤドカリの観察実験



修了証書の授与

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）

第一回AASPPアジア原子核反応データベース 研究開発会議を北大にて開催

理学研究院附属「原子核反応データ研究開発センター」（センター長／加藤幾芳）の主催で、第一回AASPPアジア核反応データベース研究開発会議が、10月25日（月）～29日（金）にかけて遠友学舎にて開催されました。

この会議は、IAEA（国際原子力機構）を中心とした国際核データセンターネットワークに参加するアジアの核反応データセンター（日本、中国、韓国、インド）による初めての会合で、アジア地域における核反応データセンター間の連携を強化し、データ採録技術の伝播と向上を目的としたものです。

また、この会議は、独立行政法人日本学術振興会（JSPS）の「アジア・アフリカ学術基盤形成事業（AASPP）」の一環として開催されたもので、北大－神戸大GCOEプログラムおよび理化学研究所（RIKEN）仁科センターの共催で行われました。

国際的核データ活動は、加速器や原子炉などで取得される原子核反応に関する実験データを学術的・工学的に平和利用するために国際的なデータベースを作成し、そのデータベースへのデータの収録と公開を国際的協力のもとに行うことです。日本の核データ活動は、北大を中心とした日本荷電核反応データグループ（JCPRG）によっておよそ40年前にスタートし、2007年、北海道大学理学研究院附属原子核反応データ研究開発センターとして新たな展開をしてきました。

近年、アジアの諸国の核データに関する状況が大きく進展し、とりわけ中国、韓国、インドでは巨大加速器実験施設の建設が進み、そこから得られる核データが大量に蓄積されつつあります。今年4月末に北大で開催されたIAEA核データセンター会議（北大時報No.675）においても、これらアジアの核データの国際的利用を図るため国際的核データベースへのデータ入力体制の整備強化が議論されました。この度の会議は、それらの議論に基づいたものでした。

会議は、初日の岡田尚武 理事・副学長、山口佳三 理学研究院長、延興秀人 RIKEN仁科セ

ンター長、及び、加藤幾芳センター長の挨拶に始まり、アジア圏の核データの収集と採録に関する現状分析を行うとともに、データ採録における様々な技術的課題が原子核物理学や情報科学の観点から議論されました。日本の長年の核データ採録についての経験に基づいた実践的なセミナーを開き、アジアの核データ採録者の採録技術の交流とその向上に努めました。

アジア核データセンター長同士の会談も会期中に行われ、今後の核データセンターの連携強化や人的交流の推進、さらに次回の核データセンター会議を中国（北京）で開催することなどが合意されました。これらの活動を通して、データ収集活動に関するアジアの研究者と当センターの緊密な協力関係が築かれ、今後とも維持されることが期待されます。

関連サイト：北大原子核反応データ研究開発センター

<http://www.jcprg.org/>

問い合わせ：理学研究院 加藤幾芳

(011-706-2684, kato@nucl.sci.hokudai.ac.jp)



会議参加者による記念撮影

（理学院・理学研究院・理学部）

「サイエンスカフェinえりも」を開催

地震火山研究観測センターでは、11月17日(水)、えりも町と共同で、町民を対象とした「サイエンスカフェinえりも」を、『地震と津波はどのようにして起こるのかー正しくつきあうためにー』と題して開催しました。当センターでは今年4月にも札幌で市民対話型のサイエンスカフェを開催し、一般市民の地震火山に対する関心の高さや予知研究に寄せる期待の大きさを実感したところです。そこで、次は我々自身が地震火山災害の現場に出向き、被災経験のある地元住民と直接対話することが重要と考えました。津波の常襲地帯であるえりも町に提案したところ大いに賛同して下さり、今回の共同開催が実現しました。

漁業を基幹産業とするえりも町は東西を海に囲まれ、総延長50km以上の海岸線に7つの港を抱えており、町民の津波に対する関心は非常に高いものがあります。できるだけ多くの町民に参加して頂けるように、東西2カ所に会場を設け、団体関係者の多い西側の本町地区は午後に、漁業関係者の多い東側の庶野地区では漁作業終了後の夜間にそれぞれ開催しました。2会場で総勢約80名の方々に参加して頂き、NHKや北海道新聞の取材も入りました。

岩本^{ひろのぶ}溥叙 えりも町長による開会挨拶の後、当センター谷岡勇市郎 教授が地震津波の発生メカニズムやえりも町周辺の津波の特徴について、具体的な事例や動画を活用して分かりやすく丁寧に説明しました。質問コーナーでは「高台に避難するか、船を沖出しするかの判断はどうすればよいか」「津波到着時刻はどうやって予想するのか」「津波が起きやすい地震の揺れ方はあるか」「津波被害を最小限に押さえる施設や対策とは」など、地元にとって切実な質問が数多く出されました。

閉会後のアンケートでは、「分かりやすかった」「津波の性質を詳しく知ることができてよかった」などの感想を多数頂戴しました。町長からも今後の継続的開催を要望されるなど、一定の地域貢献ができたのではないかと自己評価しているところです。当センターでは、今後もこうしたイベントの開催を通じて、地域における地震火山災害の軽減を目指した社会活動を継続的に進めていきたいと考えています。

最後に、今回のイベント共同開催の実現・成功に導いて下さった、岩本町長をはじめ、えりも町役場スタッフの皆様に感謝申し上げます。



開会挨拶する岩本溥叙えりも町長



講演する谷岡勇市郎教授



会場の様子(庶野生活館)

(理学研究院附属地震火山研究観測センター)

農学研究院で市民公開・農学特別講演会 「農学の連携」を開催

11月26日（金）午後1時30分より5時まで、農学研究院大講堂において「農学の連携」のテーマで市民公開・農学特別講演会を、農学院・農学研究院・農学部、札幌農林学会、及び札幌農学振興会の主催、北方生物圏フィールド科学センターの共催、札幌国際プラザの後援をいただき、開催しました。

この講演会は、明治31年（1898年）に発足した「札幌農林学会」が毎年開催してきた学術講演会を継承・発展させたもので、100年以上の歴史があります。平成9年からは「市民公開・農学特別講演会」と名称を改め、大学関係者だけでなく広く一般市民の方々に公開されるようになりました。市民公開となって本年度で13回目になります。

上田一郎 農学研究院長の挨拶に続き、インドネシアのボゴール農科大学農業技術学部のハニー・C・ウィジャヤ教授による「My Hokudai's Dream」の講演が行われました。北海道大学を卒業して以来20年間に行った、日本を初めとする各国との共同研究、インドネシアでの教育を振り返りながら同教授が考える北海道大学の夢「愛と真実、情熱のこもった農学による、より良い世界づくり」について話されました。

続いて、本学農学研究院の長澤徹明教授より、「地域農業と水」と題した講演が行われました。農業生産を確保して地域の安定と発展を

はかるための、人類と水との付き合いの苦労を話されました。水に恵まれない乾燥地域はもとより、水が豊富とされる我が国における多くの課題を挙げながら、多様な相貌を有する農業と水の関わりを俯瞰して、貴重な地域資源である水の利用と保全について話されました。

次いで、独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構北海道農業研究センターの折登一隆所長より、「北海道農業研究センターのミッションと連携」と題した講演が行われました。農林水産省所管の研究独立行政法人としての同センターのミッションが紹介され、これを実現するため実施している関連機関との連携・交流について農業・食品産業等を支援する研究所としての特徴について話されました。

農業は食料生産とともに、地域固有の自然と文化を育んでいます。ハニー教授のおっしゃったように「なによりも農業は人間の生活に最も近いから大事」であり、多くの人の連携が欠かせません。このことをよく理解し、よりよい技術を提供するための研究を進めることが、農学の根本です。北大の農学は、そのような農業の特徴を生かしたより良い世界を作るために、今後も多くの連携を取りながら、幅広く研究を進めていくことを改めて感じることができました。学内外から約160名の来聴者があり、有意義な講演会となりました。



講演するハニー・C・ウィジャヤ教授



講演する長澤徹明教授



講演する折登一隆所長

（農学院・農学研究院・農学部）

メディア・コミュニケーション研究院公開講座 「『学問的』読書の方法」が終了

メディア・コミュニケーション研究院では、平成22年度公開講座「『学問的』読書の方法」を、9月27日から12月6日までの毎週月曜日、全10回にわたり実施しました。

社会科学の「勉強」の基礎となる「読書」の方法はさまざまですが、本講座担当の山田吉二郎教授は、「書きながら読む」という方法を提案しました。受講生は内田義彦著「読書と社会科学」（岩波新書）をテキストに、著者が本文の中に隠した「宝」を見つけることを目標とし、繰り返し出てきた言葉に注目しながら、担

当講師とともに「まとめ」の方法を考えていきました。

講義中積極的に発言したり、講義終了後には熱心に講師に質問する受講生の姿が見られ、本講座のテーマに対する関心の高さが伺えました。

講座の最終日には、7回以上出席した38名の受講生が担当講師から修了証書を手渡され、本講座は盛況のうちに無事終了することができました。



講義風景



受講生への修了証書授与

(メディア・コミュニケーション研究院)

観光学高等研究センター公開講座 「旅の楽しさを考える」が終了

観光学高等研究センターでは、平成22年度公開講座「旅の楽しさを考える」を10月28日から12月2日まで、毎週木曜日全6回にわたり実施しました。

本講座では、各講師が豊かな社会での「旅」をキーワードに、その楽しみが人生や地域の暮らしを豊かにしていくという視点で、旅の意味や、そこから生まれる出会い、人生の転機、そして北海道との関わりから「旅の楽しさ」が語られました。

今回本講座へは、定員を大幅に越える申し込みがあり、出席者も毎回50名を越え、会場となった講義室はいつも受講生の熱気で満ち溢れていました。これは近年の「旅ブーム」、そして観光への興味・関心の高さの表れではないかと考えられました。

講義の最終日には、4回以上出席した受講生55名に、担当講師から修了証書が手渡され、本講座は盛況のうちに終了することができました。



講義風景



受講生への修了証書授与

(観光学高等研究センター)

総合博物館土曜市民セミナー「トリニダード トバゴ 共和国の歴史と文化、自然…常夏の島…」を開催

総合博物館では11月13日（土）に医学研究科医学専攻博士課程在籍中のロシャン マハビール氏を講師に迎え、土曜市民セミナー「トリニダード トバゴ共和国の歴史と文化、自然…常夏の島…」を開催しました。

トリニダード・トバゴ共和国は南米北端、カリブ海列島南東端に位置し、2つの主な島から成ります。面積は千葉県ほどで（5,000 km²余り）、人口は約130万人です。1498年のコロンブス到着以後スペイン、ついで英国の植民地となり、アフリカ系およびインド系住民が移住した結果、先住民族カリブとアラワクは激減し、現在残されているのは200名あまりに過ぎません。主な産業は石油・天然ガスの採掘であり、常夏の気候を生かした観光や柑橘類の栽培なども盛んです。宗教的にもキリスト教（各宗派）やヒンズー教、イスラム教が共存し、食習

慣・音楽（ソカ、チャトニ、タッサ、パランなど）・踊りなど文化的にも実に多様で独特のものを作り上げており、豊かな天然資源とマンパワーによって、この地域の発展の推進力となっています。

日本に居住しているトリニダード・トバゴ人は、北海道にはマハビール氏ただ一人、全国でも10名程で、アジア圏ではインドにしか大使館が置かれていないと知り、来場者は驚いていたようです。これまであまり知られていないトリニダード・トバゴの文化や歴史に接し、大変興味深く有意義な講演になりました。

なお、同氏は医師で、脳腫瘍研究のため来日されています。また、当日のセミナーの内容は北大OCW（オープンコースウェア）で見ることができます。



講演するマハビール氏

（総合博物館）

教育GPワークショップ「博物館で個性が活かせる授業を創ろう！」第2回（題材：植物）を開催

総合博物館では、11月20日（土）に1階「知の交流」コーナーにおいて、高等教育推進機構の池田文人 准教授を講師に迎え「博物館で個性が活かせる授業を創ろう！」と題し、フィンランドの教育法を実際に体験し学ぶためのワークショップを開催しました。第2回目は、オオバナノエンレイソウ、ヒメジョオン、クサフジの標本を用い、マインドマップの作成に取り組みました。

まず初めに、参加者は池田准教授に自己紹介をしてもらうために、先生について質問をすることになりました。提出された具体的な質問を先生が抽象化しホワイトボードに書き込んでいくことで、「池田文人」を中心に、「興味」「所属」「研究」「出身」などの枝葉が伸びたマインドマップが作成されました。植物について同じようなマインドマップを作成することが、今回の目標だということでした。

次に、4人1組の3グループに分けられた参加者は、机の上に置かれた植物の標本に対する質問を考え、8等分に折り目を付けたA4の用紙にそれぞれ質問を書いては隣の人に回していくことになりました。自分の質問を書き、隣の人に渡して順に質問を増やしていくこの手法は「文殊法」と呼ばれるもので、一人で考えるのではなく、周囲の人の質問、意見を参考にする

ことで、発想力を高めることのできる手法だということでした。標本を基にした記入が終わると、今度はさらに図鑑などの資料を用い、課題となった植物に対する質問を文殊法で書いていくことになりました。

一通り質問が出たところで、8等分の折り目の付いた紙を切り分けてカードにし、同じような質問をまとめて山にする作業が行われました。関連性のあるカードを重ねて分類するこの手法はKJ法と呼ばれるもので、文殊法がアイデアを次々と出していく発散的手法であるのに対し、KJ法は発散したアイデアをまとめるための収束的手法だということでした。カードをまとめ終わると、カードの山に分類名を付けた白いカードを載せ、その分類名を基にマインドマップ作りが行われました。

このように、学習対象に対する質問事項をマインドマップによって整理することで、学習する際の見取図を作ることができるのと同時に、足りない部分がどこか気づくこともできるということでした。全ての作業が終わると、参加者は他のグループのマインドマップを見て回り、自分達の作ったマインドマップと比べ、意見を交換し合いました。幅広い年代の方が参加され、皆で意見を述べ合う、充実したワークショップになりました。



マインドマップについて説明する池田准教授



質問进行分类する受講者

（総合博物館）

第14回北海道大学教育GPセミナー 「CoSTEP –これまでとこれから–」開催

総合博物館では、11月27日（土）に1階「知の交流」コーナーにおいて、高等教育推進機構・科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP）の杉山滋郎 部門長を講師に迎え「CoSTEP –これまでとこれから–」と題し、CoSTEPが科学技術振興調整費によって運営されていた2005年度から2009年度までと、北海道大学の教育組織として活動を始めた2010年度以降の取組について紹介していただきました。

CoSTEPは、科学技術や科学技術の専門家と市民をつなぐ役割を果たす「科学技術コミュニケーター」の養成を目的としており、社会でも通用する実践的な活動を教育プログラムに取り入れています。今回の講演では、CoSTEPの特色である体系的な講義、実践を通した学び、地域に根差したコミュニケーションについて、具体例を挙げながらお話していただきました。

体系的な講義は、科学技術コミュニケーションの基本的な概念や考え方を教授するための

重要な役割を果たしており、CoSTEPの講義は、3回で1個のモジュールとなる、9個のモジュールから成っているということです。実践的な学習の例としては、新聞の連載記事の執筆や、リテラポプリ（季刊号）の編集など、実社会でも通用する実習・演習について紹介していただきました。また、新聞の連載記事を書く際には地域固有の問題や論点を取り上げ、ラジオ番組の制作ではコミュニティ放送局と協働するなど、地域に根差したコミュニケーションを実践しているということです。

受講生の様々な活動を紹介していただいたことで、CoSTEPが教育のために多様な媒体を活用していることがわかりました。今後は、さらに電子メディアを活用するなど、新しいコミュニケーション手法やツールに挑戦し、科学技術コミュニケーション教育の充実を図るということでした。質疑応答時間には、多くの参加者から質問や感想が寄せられ、活発なセミナーとなりました。



講演する杉山部門長



会場の様子

（総合博物館）

予科昭和23年入学同期会関係資料を大学文書館で受贈

10月29日（金），大学文書館は，松浦清 氏（1955年農学部林産学科卒業）を介し，「北大予科昭和23年入学同期会」から同期会関係資料をご寄贈いただきました。

北海道帝国大学予科は旧制高等学校に該当し，北海道帝国大学本科（学部）に進学するための機関でした。予科（修業年限3年）では，本科進学後の専門分野に必要な語学（英語・ドイツ語）を中心に，教養科目を学びました。予科は何よりも生徒同士，そして教官との人間的な結び付きが非常に強いことを特徴としています。特に終戦前後の北大予科は，教官が非常に若かったため生徒とさほど年齢差がなく，卒業から60年以上を経た現在も，同期会・同窓会などで師弟の親交を暖めています。1948（昭和23）年入学は，最後の予科入学生です。敗戦の1945年から1950年代初めにかけては，敗戦の混乱や紙物資不足のため大学関係資料が十分に作成・保存されていません。ご寄贈いただいた予科クラス別名簿等はたいへん貴重な資料です。

また，併せて，松浦清 氏から学生時代の写真アルバムをお借りし，複製写真を作成しました。戦後の学生や大学の様子を知ることのできる写真資料です。



予科理類1年5組

大学文書館では，このような大学に関する個人資料を収集し，資料の性格に鑑みて保管し，整理・保存・活用を進めております。資料や情報にお心当たりの方は，ぜひご一報下さい。



北大予科昭和23年入学同期会（2009年10月23日）

（大学文書館）

出征壮行会の「日の丸」 寄せ書きを大学文書館で受贈

11月26日(金)、大学文書館は、辺見孝子氏ならびに塗彩子氏から、故 安孫子三郎氏のご遺品をご寄贈いただきました。辺見孝子氏、塗彩子氏は安孫子三郎氏のご息女です。

安孫子三郎氏は1916(大正5)年に生まれ、1938(昭和13)年に北海道帝国大学農学実科に入学、卒業後は農学部に進学し食用作物学教室で学んでいました。1941(昭和16)年10月に臨時召集を受け、入隊しました。同氏は「赤紙」を受け取ったときのことを「遂に来るものが来たと云った感じで、自分の運命に区切りをつける 때가来たのだと、自分に云い聞かせて、覚悟を決めた」と回想しています。同氏は台湾・サイゴン・シンガポールに従軍し、1946(昭和21)年6月に復員しました。

このたび受贈した資料は、出征にあたり大学

で行なわれた「壮行会」で贈られた、「日の丸」寄せ書きや回想原稿などです。寄せ書きには、第4代総長 今裕の「丹心答聖明 祝安孫子三郎君壮途」や、「祈武運長久」(伊藤誠哉農学部長)、「神意建設」(手島寅雄教授)、「祝壮途」(長尾正人教授)、「自彊不息」(島善鄰教授)、「不倒不屈」(菊池武直夫教授)などの勇ましい送辞に混じって、千代子さん、知子さんが「兄さんしっかり」という心溢れる言葉を送っており、時代の雰囲気を感じています。

大学文書館では、ご寄贈いただいた資料を大切に保存し、大学と戦争の関わりを示す貴重な資料として、展示等で広くご紹介していきたいと思っています。



安孫子三郎氏に贈られた「日の丸」寄せ書き

(大学文書館)

資料見学会「平塚直治・直秀の『銹菌研究』来し方－宮部金吾との師弟結びつきを中心に－」を大学文書館で開催

11月12日（金），大学文書館では，資料見学会「平塚直治・直秀の『銹菌研究』来し方－宮部金吾との師弟結びつきを中心に－」を附属図書館4階北方資料室で開催しました。西安信氏（平塚直治のご令孫）の御案内で，平塚保之氏（平塚直秀のご子息）のご家族が見学をされました。23日（火）には，西信博氏・宮田篤子氏のご兄妹（直治ご令孫），高岡治子氏（直治ご息女）をはじめ，ご子孫の皆さまが見学にいらっしゃいました。

平塚直治（1873－1946）は1888（明治21）年札幌農学校予備科に入学し，農学科では宮部金吾教授に師事，1896（明治29）年第14期生として卒業しました。亜麻立枯病研究が評価され，北海道製麻（後に帝国製麻）株式会社技師となり，亜麻産業に尽力しました。直治長男の直秀（1903－2000）は，1923（大正12）年北海道帝国大学予科に入学，農学部農業生物学科で宮部教授に師事し，銹菌研究を直治から受け継ぎました。大学院を経て，鳥取高等農業学校・東京教育大学で教授を務め，1962（昭和37）年には日本学士院賞を受賞しました。



平塚直治・直秀父子と植物病理学教官（1926年）
平塚直治（左端），宮部金吾（中央），平塚直秀（右端）



平塚保之氏（中央）のご家族をお迎えして

今回の見学会では，平塚直治・直秀父子の足跡を，①「直治，恩師との出会い」，②「直治・直秀，恩師を囲んで」の二部構成にし，文書類・写真・書簡等などの関連資料（札幌農学校・帝国大学簿書，高岡治子・高尾君子・畠忠正寄贈資料，宮部金吾旧蔵書簡等）でたどりま



平塚直治ご子孫の皆さまと逸見勝亮館長
（11月23日）

大学文書館では，今後も，ゆかりの方々が来学される折には，受贈した個人資料や沿革文書・資料を活用して見学会を企画し，交流を深めていきます。

（大学文書館）

「消防訓練」の実施

●歯学研究科

歯学研究科（大学病院歯科診療センターを含む）では11月12日（金）午後4時15分から消防設備会社の指導・協力を得て、平成22年度第2回消防訓練（避難訓練及び消火訓練）を実施しました。

訓練は、歯科診療センター2階歯科外来手術センターからの出火を想定し、学生・職員（大学病院職員を含む）約60名が参加して行われました。

火災発生後、直ちに自衛消防隊長（川浪雅光研究科長）の指揮により各担当に分散し、現場の確認、消防署への通報、非常放送、学生・患者さんの避難誘導、けが人の救助、初期消火などを行いました。

訓練終了後、川浪研究科長及び中村太保副院長から講評がありました。

また、消防設備会社職員により消火器（水消火器）を用いた消火訓練が行われ、消火器の取り扱い方法を確認しました。

消防設備会社職員からは消火器を持っていく時には安全ピンを外さないこと、取っ手を握らないことなどの注意がありました。



避難状況を自衛消防隊本部へ報告



川浪研究科長から講評を受ける参加者



消火活動を行う参加者



消火器訓練を行う参加者

（歯学研究科・歯学部）

●情報基盤センター

情報基盤センターでは、11月24日（水）13時30分から消火技術の向上と防災意識の徹底のため、消火器使用訓練を主体とした消防訓練を行いました。

今回の消防訓練は、教職員のみならずセンターを利用する学生等も含め約30名が参加して実施され、消火器使用訓練と併せて防災設備業者による火災報知設備、屋内消火栓、防火シャッター・防火戸のほか大型計算機用ハロン消火装置の操作説明を受け、参加者は防火意識を新たにするとともに訓練の重要性を再認識していました。また、全国共同利用施設・学内共同利用施設として適切な防災体制を改めて確認することができました。

訓練終了後、山本強 情報基盤センター長より日頃からの防災の心構えについて注意喚起があり、訓練を無事終了しました。



消火器による初期消火の訓練

（情報基盤センター）

●北キャンパス

北キャンパスにおいて11月30日（火）に創成科学研究棟、北キャンパス総合研究棟2号館から5号館及び創薬基盤技術研究棟において、創成研究機構、電子科学研究所、触媒化学研究センター、先端生命科学研究院附属次世代ポストゲノム研究センター、人獣共通感染症リサーチセンター、シオノギ創薬イノベーションセンター合同による消防訓練を実施しました。訓練は、500名を超える教職員・学生が参加し、北キャンパス総合研究棟5号館1階から出火したとの想定で、北キャンパスの自衛消防隊を中心に初期消火、通報連絡、非常放送及び避難・誘導等一連の防災行動の能率・統制的推進と防災意識の高揚を図ることを目的に行われました。

訓練終了後に自衛消防隊本部長の岡田尚武

創成研究機構長から訓練参加者及び協力者への慰労の辞と日頃からの防災への心構えや協力体制についての要請があり、一連の訓練を終了しました。



防災の心構えを話す岡田創成研究機構長

（北キャンパス合同事務部）

お知らせ

冬期間の駐車についての注意 ー除雪・通行の障害となる駐車はやめましょうー

今年度も平成22年12月1日(水)から平成23年3月31日(木)までの間、構内(札幌キャンパス)の主要幹線道路、その他支線道路及び北13条共同駐車場等の除雪を行います。例年、路上及び駐車場の終夜の駐車が多く除雪作業の障害となっています。

教職員・学生等の車両所有者は、構内交通ルールを厳守するとともに、除雪作業の安全と能率を確保するため以下の事項について、ご協力願います。

- 除雪の障害となる路上駐車等の不正駐車を絶対しないこと。
- 北13条共同駐車場等における終夜の駐車をしないこと。

(なお、悪質な場合には、大学構内への入構制限その他必要な措置を構ずることがあります。)



除雪の支障となる駐車(例年)

(施設部施設保全課)

レクリエーション

全道フットサル選手権札幌地区予選に出場

11月23日（火）の祝日に全道フットサル選手権札幌地区予選が、札幌市北区体育館で開催されました。

組み合わせ抽選の結果、グループGに入り、上位2位までが決勝トーナメントに出場できるレギュレーションで行われました。

当クラブは、S.L DasPeed、北海学園大学サッカー部Aチーム、Regaleと対戦し試合結果は、

北大教職員サッカークラブ 2 : 3 Regale

北大教職員サッカークラブ 1 : 11 北海学園大学サッカー部Aチーム

北大教職員サッカークラブ 0 : 8 S.L DasPeed

となり、残念ながら3連敗で予選グループ敗退となりました。

今年度の大会は、1月に開催されます「コンサドーレカップ 2011 第11回 全道市町村サッカーフェスティバル」を残すのみとなりましたが、引き続きご声援をよろしくお願いいたします。

（教職員サッカークラブ）

研 修

研 修 名 (主催部局名)	開催期間	開催場所	研 修 目 的
平成22年度北海道地区大学等留学生担当職員研修 (国際本部国際支援課)	平成22年11月17日 ～平成22年11月18日	北海道大学 学術交流会館第3会議室	北海道地区の留学生交流事務を担当する大学等の職員に対し、留学生交流に関する専門的知識を習得させ、職員の資質の向上と事務能率の増進を図ることを目的とする。



留学生の立場から提案します
(学生講師によるプログラム)



危機管理シュミレーション
(各班の発表の様子)

研 修 名 (主催部局名)	開催期間	開催場所	研 修 目 的
平成22年度北海道地区国立大学法人等会計基準研修 (財務部主計課)	平成22年11月29日 ～平成22年12月1日	北海道大学 百年記念会館大会議室	国立大学法人等の会計規程の基礎である国立大学法人(独立行政法人)会計基準、同注釈及び実務指針についての会計知識を習得させることにより、国立大学法人等の会計事務の担い手としての職員の資質向上を図ることを目的とする。



「国立大学法人等会計基準」
(新日本有限責任監査法人 三宅英彦公認会計士)



「国立大学法人等を取り巻く諸情勢」
(文部科学省高等教育局国立大学法人支援課 山崎正人財務分析係長)

表 敬 訪 問

〈海外〉

月 日	来 訪 者	目 的
22.11. 5	ブダペスト工科経済大学（ハンガリー）電気情報学部 副学部長 Janos Levendovszky 教授 一行	両大学の交流に関する懇談
22.11. 8	ブリティッシュコロンビア大学（カナダ） 水産センター長 Ussif Rashid Sumaila 氏	両大学の交流に関する懇談
22.11.10	サハリン州副知事 トルトゥネワ イリーナ・イワノヴナ 氏 一行	両地域の交流についての懇談
22.11.12	カリフォルニア大学デービス校 浅野 孝 名誉教授	環境ナノ・バイオ工学研究 センター外部評価のため
22.11.24	エジンバラ大学獣医校（英国） 学部長 Elaine Watson 氏 一行	両大学の交流に関する懇談



ブダペスト工科経済大学（ハンガリー）電気情報学部
副学部長 Janos Levendovszky 教授（右から2人目）一行



ブリティッシュコロンビア大学（カナダ）水産センター
長 Ussif Rashid Sumaila 氏（右から2人目）



サハリン州副知事 トルトゥネワ イリーナ・
イワノヴナ 氏（左から4人目）一行



カリフォルニア大学デービス校
浅野 孝 名誉教授



エジンバラ大学獣医校（英国）学部長
Elaine Watson 氏（右から3人目）一行

（国際本部国際連携課）

諸会議の開催状況

役員会（平成22年11月8日）

議 案・平成22年度評価の実施体制等について

協議事項・平成23年度年度計画の作成方針等について

- ・北海道臨床開発センター（仮称）の設置構想に係る確認事項について
- ・就業規則関連規程の一部改正について

報告事項・人獣共通感染症リサーチセンターの部門設置について

- ・環境科学院のコースの再編について
- ・創成研究機構評価委員会及び構成組織の重点研究テーマについて
- ・平成22年度補正予算（第1号）案について
- ・平成21年度に係る業務の実績に関する評価結果の確定について

教育研究評議会（平成22年11月17日）

議 題・教員の懲戒について

報告事項・全学運用教員の措置について

- ・人獣共通感染症リサーチセンターの部門設置について
- ・環境科学院のコースの再編について
- ・北海道大学進学相談会の開催結果について
- ・創成研究機構評価委員会及び構成組織の重点研究テーマについて
- ・「第二期中期目標期間における各年度に係る評価の実施に関する基本方針」の策定及び平成22年度評価の実施体制等について
- ・平成21年度に係る業務の実績に関する評価結果の確定について
- ・平成22年度補正予算（第1号）案について
- ・「元気な日本復活特別枠」要望に関するパブリックコメントの結果について
- ・寄附分野の設置について
- ・学生の懲戒について

役員会（平成22年11月22日）

議 案・傾斜配分について

協議事項・安全衛生本部の設置について

報告事項・平成22年度中間決算について

役員会（平成22年11月29日）

議 案・就業規則関連規程の一部改正について

報告事項・会計検査院による会計実地検査の結果について

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

学 内 規 程

国立大学法人北海道大学創成研究機構共用機器管理センター分析受託規程の一部を改正する規程 (平成22年12月1日海大達第300号)

国立大学法人北海道大学創成研究機構共用機器管理センターにおいて、本学のオープンファシリティを使用して行う分析及び加工の委託を受けることとすることに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

北海道大学入学者選抜委員会規程の一部を改正する規程 (平成22年12月1日海大達第301号)

入学者選抜委員会の委員の構成を見直すことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学契約職員就業規則の一部を改正する規則 (平成22年12月1日海大達第302号)

国立大学法人北海道大学短時間勤務職員就業規則の一部を改正する規則 (平成22年12月1日海大達第303号)

国立大学法人北海道大学子どもの園保育園臨時職員就業規則の一部を改正する規則 (平成22年12月1日海大達第304号)

国立大学法人北海道大学特任教員就業規則の一部を改正する規則 (平成22年12月1日海大達第305号)

国立大学法人北海道大学嘱託職員就業規則の一部を改正する規則 (平成22年12月1日海大達第306号)

国立大学法人北海道大学役員給与規程の一部を改正する規程 (平成22年12月1日海大達第308号)

国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部を改正する規程 (平成22年12月1日海大達第309号)

国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員給与規程の一部を改正する規程 (平成22年12月1日海大達第310号)

国立大学法人法第35条の規定により準用される独立行政法人通則法第63条第3項の規定及び公務員の給与改定に関する取扱いに係る閣議決定における要請を踏まえ、職員の給与について、社会一般の情勢に適合したものとし、かつ、国家公務員の給与水準を十分考慮して国民の理解が得られる適正なものとするため、①中高齢層（40歳台以上）の職員が受ける基本給月額を引き下げること、②55歳を超える一定級以上の職員の基本給、管理職手当等の支給額を引き下げること、③43歳未満の職員で平成22年1月1日に昇給した職員の号俸を調整すること、④期末手当及び勤勉手当の年間支給月数を引き下げること、並びに⑤月60時間の超過勤務時間の積算の基礎に日曜日等の勤務時間を含めることとすることに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。（③及び⑤に係る改正は、平成23年4月1日施行）

国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程 (平成22年12月1日海大達第307号)

国際本部の本部長付に採用する教授、准教授、講師及び助教について、大学の教員等の任期に関する法律第4条第1項第1号の規定に基づき任期を定めることに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学病原体等安全管理規程の一部を改正する規程 (平成22年12月1日海大達第311号)

病原体等の取扱い、管理又はこれに付随する業務に従事する者に対する教育及び訓練について、当該教育及び訓練を行う対象者の見直しを行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学予算決算及び経理規程の一部を改正する規程 (平成22年12月1日海大達第312号)

独立行政法人通則法第47条第3号が改正されたことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程

(平成22年12月 1 日海大達第313号)

本学のオープンファシリティについて、技術相談料を徴収すること並びに設備の取消及び使用料の変更を行うことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

人 事

平成22年11月29日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【技術職員】 北海道大学病院薬剤部薬剤師	水口 貴史	採用

平成22年11月30日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【助教】 （辞職）	秋本 幸子	北海道大学病院助教

平成22年12月 1 日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【教授】 大学院水産科学研究院教授 大学院地球環境科学研究院教授 大学院地球環境科学研究院教授	平 石 智 徳 露 崎 史 朗 渡 邊 悌 二	大学院水産科学研究院准教授 大学院地球環境科学研究院准教授 大学院地球環境科学研究院准教授
【准教授】 大学院薬学研究院准教授 大学院工学研究院准教授	秋 田 英 万 伊 藤 真由美	大学院薬学研究院助教 大学院工学研究院助教
【講師】 北海道大学病院講師 国際本部講師	田 中 享 武 村 理 雪	大学院歯学研究科助教 採用
【助教】 電子科学研究所助教 （転出） 旭川医科大学物理学助教	酒 井 恭 輔 稲 垣 克 彦	採用 大学院工学研究院助教
【係長】 医学系事務部会計課係長 歯学研究科・歯学部係長 農学事務部係長 北海道大学病院管理課係長	砂 塚 孝 子 菅 野 高 利 高 橋 尚 志 成 田 芳 道	農学事務部係長 北海道教育大学事務局財務部施設課専門職 歯学研究科・歯学部係長 医学系事務部会計課係長
【係員】 施設部施設企画課 施設部施設保全課 医学系事務部会計課	松 村 泰 成 窪 田 陽 菜 昔 農 清 岳	農学事務部 医学系事務部会計課 施設部施設整備課
【技術職員】 水産学部附属練習船おしよろ丸操舵手	萩 原 翔 太	水産学部附属練習船おしよろ丸甲板員

新任教授紹介

平成22年12月1日付

水産科学研究院教授に ^{ひらいし} 平石 ^{とものり} 智徳 氏
(海洋生物資源科学部門海洋資源計測学分野)



生年月日

昭和27年3月21日

最終学歴

北海道大学大学院水産
科学研究科博士後期課
程単位取得退学

(昭和61年3月)

水産学博士(北海道大学)

専門分野

魚群行動, 行動計測,
漁具工学, 施設工学,
流体力学

地球環境科学研究院教授に ^{わたなべ} 渡邊 ^{ていじ} 悌二 氏
(地球圏科学部門陸域環境ダイナミクス分野)



生年月日

昭和34年6月15日

最終学歴

カリフォルニア大学大
学院地理学研究科博士
課程修了

(平成4年12月)

Ph.D.(カリフォルニア大学)

専門分野

地理学, 地生態学

地球環境科学研究院教授に ^{つゆざき} 露崎 ^{しろう} 史朗 氏
(統合環境科学部門地球温暖化評価分野)



生年月日

昭和36年7月16日

最終学歴

北海道大学大学院理学
研究科博士後期課程修
了(平成2年3月)

理学博士(北海道大学)

専門分野

植物生態学

資料

平成22年度外国人留学生数

【部局別】

学部等

平成22年11月 1 日現在

部	局	名	国 費		外国政府派遣		私 費		合 計
			学士課程	研究生等	学士課程	研究生等	学士課程	研究生等	
文	学	部	1 (1)	1 (1)		9 (9)	4 (1)	81 (60)	96 (72)
教	育	学 部				1	7 (7)	18 (12)	26 (19)
法	学	部					4 (3)	8 (6)	12 (9)
経	済	学 部	2 (2)	2 (2)			4 (2)	33 (22)	41 (28)
理	学	部				1	4	6 (4)	11 (4)
医	学	部					3 (2)		3 (2)
歯	学	部					3 (2)		3 (2)
薬	学	部					1 (1)		1 (1)
工	学	部	9		23 (3)		23 (4)	14 (2)	69 (9)
農	学	部					4 (1)	7 (5)	11 (6)
獣	医	学 部					1	2 (1)	3 (1)
水	産	学 部		1			2 (1)	10 (5)	13 (6)
合		計	12 (3)	4 (3)	23 (3)	11 (9)	60 (24)	179 (117)	289 (159)

大学院等

部	局	名	国 費				外国政府派遣				私 費				合計
			修士課程	専門職 学位課程	博士課程	研究生等	修士課程	専門職 学位課程	博士課程	研究生等	修士課程	専門職 学位課程	博士課程	研究生等	
文	学	研 究 科	10 (7)		8 (6)	1 (1)				5 (4)	32 (24)		23 (18)	5 (3)	84 (63)
法	学	研 究 科			6 (2)	1 (1)			4 (2)	3 (2)	31 (12)		13 (4)	26 (17)	84 (40)
経	済	学 研 究 科	3		1				1 (1)	2	32 (20)		6 (3)	2 (1)	47 (25)
医	学	研 究 科			12 (4)	1			2 (2)		2 (2)		6 (2)	3 (2)	26 (12)
歯	学	研 究 科			3 (1)								5 (2)	3 (2)	11 (5)
獣	医	学 研 究 科			25 (9)	1 (1)			1				4 (2)	1	32 (12)
情	報	科 学 研 究 科	5		15 (2)	2			5 (1)	8 (1)	37 (9)		25 (12)	11 (1)	108 (26)
水	産	科 学 研 究 院	2		12 (5)				2 (1)		7 (4)		15 (8)	6 (6)	44 (24)
水	産	科 学 研 究 院				1				3 (1)					4 (1)
環	境	科 学 研 究 院	3		16 (5)		1 (1)		6 (1)		15 (5)		21 (9)	10 (5)	72 (26)
地	球	環 境 科 学 研 究 院				1 (1)				2 (1)				3 (1)	6 (3)
理	学	研 究 院	5 (1)		20 (8)		1		7 (3)	1 (1)	12 (3)		22 (8)	1	69 (24)
理	学	研 究 院				1									1 (0)
農	学	研 究 院	16 (8)		30 (14)		2 (1)		14 (6)		12 (5)		20 (9)		94 (43)
農	学	研 究 院								2				15 (6)	17 (6)
生	命	科 学 研 究 院	2 (1)		14 (8)		2 (1)		3 (1)		8 (6)		18 (11)		47 (28)
先	端	生 命 科 学 研 究 院												1	1 (0)
教	育	学 研 究 院			1 (1)				1 (1)		23 (15)		6 (4)		31 (21)
教	育	学 研 究 科											3 (2)		3 (2)
国	際	広 報 メディア・観 光 学 院			3 (2)		2 (1)		2		36 (27)		4 (3)		47 (33)
メ	ディア・コミュニケーション研究	院				2 (1)				2 (1)				26 (19)	30 (21)
国	際	広 報 メディア研究科											1 (1)		1 (1)
保	健	科 学 研 究 院								1					1 (0)
工	学	研 究 院	14 (5)		14 (5)		5 (1)		9 (1)	5 (1)	14 (3)		9 (2)	7 (2)	77 (20)
工	学	研 究 科				2 (1)				9 (1)				12 (4)	23 (6)
工	学	研 究 科	23 (5)		25 (2)				7		7 (1)		22 (5)		84 (13)
総	合	化 学 院			2 (2)				1 (1)		1 (1)		14 (3)	1 (1)	19 (8)
公	共	政 策 学 教 育 部										2 (1)		1 (1)	3 (2)
遺	伝	子 病 制 御 研 究 所												2 (1)	2 (1)
触	媒	化 学 研 究 センター								1					1 (0)
ス	ラ	ブ 研 究 センター				3 (1)									3 (1)
情	報	基 盤 センター												8 (1)	8 (1)
国	際	本 部 留 学 生 センター								1 (1)					1 (1)
高	等	教 育 推 進 機 構								1				1	2 (0)
北	方	圏 フィールド科学センター								1				1	2 (0)
合		計	83 (27)		207 (76)	16 (7)	13 (5)		65 (21)	47 (14)	269 (137)	2 (1)	237 (108)	146 (73)	1,085 (469)

日本語研修生等

留学生センター	日本語・日本文化研修生		日本語研修生		合 計
	国 費	私 費	国 費	私 費	
	10 (4)		19 (9)	9 (4)	38 (17)

外国人留学生総数

学部留学生	大 学 院 留 学 生			日本語研修生 日本語・日本文化研修生	留学生総数
	修士課程	専門職学位課程	博士課程		
95 (30)	365 (169)	2 (1)	509 (205)	38 (17)	1,412 (645)

- * () 内は女子を内数で示す。
* 修士課程には博士前期課程を，博士課程には博士後期課程を含む。
* 研究生等には特別聴講学生，特別研究学生を含む。

(国際本部国際支援課)

平成22年11月1日現在

(国際本部国際支援課)

北大時報掲載記事事項別一覧（平成22年掲載分）

表 紙

- 1月号 ・ 大学入試センター試験（2010.1.16～17）
- 2月号 ・ 森のたんけん隊2010冬（2010.1.14～15）
- 3月号 ・ 第2次入学試験前期日程の合格発表（2010.3.6）
- 4月号 ・ 入学式（2010.4.8）
- 5月号 ・ エルムの森に咲くエゾエンゴサク（2010.5.23）
- 6月号 ・ 北大交流プラザ「エルムの森」正門横に移転（2010.6.24）
- 7月号 ・ 硬式野球部の快挙
- 8月号 ・ 第12代学長有江幹男氏在学証
- 9月号 ・ 2010北海道マラソン（2010.8.29）
- 10月号 ・ 鈴木名誉教授（2010.10.6）
- 11月号 ・ 鈴木 章名誉教授が文化勲章受章，文化功労者顕彰（2010.11）
- 12月号 ・ 総長室にてノーベル賞受賞報告

裏 表 紙

- 1月号 ・ 北の息吹（33）ミネズオウ（*Loiseleuria procumbens*）
- 2月号 ・ 北の息吹（34）エゾルリトラノオ（*Pseudolusimachion kiusianum* ssp. *Miyabei*）
- 3月号 ・ 北の息吹（35）エゾコゴメグサ（*Euphrasia maximowiczii* var. *yezoensis*）
- 4月号 ・ 北の息吹（36）ソラチコザクラ（*Primula sorachiana*）
- 5月号 ・ 北の息吹（37）サルメンエビネ（*Calanthe tricarinata*）
- 6月号 ・ 北の息吹（38）イワブクロ（*Penstemon frutescens*）
- 7月号 ・ 北の息吹（39）イワギキョウ（*Campanula lasiocarpa*）
- 8月号 ・ 北の息吹（40）コマクサ（*Dicentra peregrina*）
- 9月号 ・ 北の息吹（41）ハクサンシャジン（*Adenophora triphylla* var. *hakusanensis*）
- 10月号 ・ 北の息吹（42）ミヤマアキノキリンソウ（*Solidago virgaurea* ssp. *leiocarpa* f. *japonalpestris*）
- 11月号 ・ 北の息吹（43）ハナイカリ（*Halenia corniculata*）
- 12月号 ・ 北の息吹（44）チシマキンレイカ（*Patrinia sibirica*）

総 長 告 辞 等

- 1月号 ・ 年頭の挨拶
- 4月号 ・ 告辞（学位記授与式，入学式）

全 学 ニ ュ ー ス

- 1月号 ・ 道内4高専と連携協定を締結
- ・ 大学入試センター試験の実施
- ・ 平成22年度予算政府案（本学関係分）の主要事項
- ・ 上野の森で「大学サイエンスフェスタ」を開催「北海道大学が拓く最先端科学～北海道から世界へ，世界から北海道へ～」
- ・ 第5回九大・北大合同活動報告会を開催
- ・ 北大フロンティア基金
- ・ 「北海道大学プロフェッサー・ビジット2009」が終了
- ・ 人材育成本部上級人材育成ステーションで「赤い糸会&緑の会」を開催

- ・「国際化加速に向けたFD～目指せ！バイリンガル大学～」を実施
- ・学生チームがCOP15学生会議「GREEN CAMPUS」に参加
- 2月号**
 - ・本学職員表彰を実施
 - ・北海道大学一般入試の志願状況
 - ・北海道大学企業研究セミナーの開催
 - ・北大フロンティア基金
 - ・日中大学フェア&フォーラムに参加
 - ・「若手人材育成シンポジウム“SynFOSTER 2010”」の開催
 - ・北海道大学-JICA共同シンポジウム「安全な水を世界の人々に届けるための国際協力のあり方～日本の水技術を活用する方策～」を開催
 - ・サステナビリティ・ウィーク2009のカーボンオフセットをめざして
 - ・平成22年度北海道大学学生支援担当職員SD研修を開催
- 3月号**
 - ・電子科学研究所 竹内教授が第6回日本学術振興会賞を受賞
 - ・工学研究科 加賀屋教授と遺伝子病制御研究所 高田教授が平成21年度北海道科学技術賞を受賞
 - ・農学部本館がBELCA賞ロングライフ部門を受賞
 - ・医学研究科 白土教授に最先端研究開発支援プログラム配分額決定
 - ・平成21年度知的財産セミナーを開催
 - ・北海道大学一般入試第2次入学試験（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表
 - ・ドイツ・ブレーメン大学と大学間交流協定を締結
 - ・JICA本部に提言書を提出：「水・衛生分野における国際協力に関する提言」
 - ・第5回「北大・九大合同フロンティア・セミナー」開催
 - ・北大フロンティア基金
 - ・（財）北海道大学クラーク記念財団への寄附
 - ・ICT活用教育セミナーを開催
 - ・平成21年度外国人留学生歓迎・送別懇談会を開催
 - ・留学生センター日本語研修コース修了（2009年10月入学者）
- 4月号**
 - ・平成21年度学位記授与式の挙行
 - ・平成22年度入学式の挙行
 - ・平成22年度北海道大学の予算
 - ・「大学院工学研究院」及び「大学院工学院」を設置
 - ・「大学院総合化学院」を設置
 - ・大学院工学研究院に「エネルギー・マテリアル融合領域研究センター」を設置
 - ・「環境健康科学研究教育センター」を設置
 - ・大学院保健科学院に博士後期課程設置
 - ・通年型屋内運動施設・体育館ならびに保健管理センター・福利厚生会館竣工式・施設披露・竣工祝賀会の開催
 - ・宮浦憲夫特任教授が平成22年度科学技術分野の文部科学大臣表彰－科学技術賞を受賞
 - ・ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム（HFSP）に電子科学研究所から2件が採択
 - ・ロシア イルクーツク国立大学と大学間交流協定を締結
 - ・本学永年勤続者表彰に129氏
 - ・名誉教授に56氏
 - ・平成21年度実施大学機関別認証評価結果について
 - ・北大フロンティア基金

- ・昭和シェル石油株式会社に感謝状贈呈
- ・北海道大学交流デー（上海・杭州）を開催
- ・文学研究科向け英語による授業に関するFDプログラムを実施
- ・北大－道立試 連携融合シンポジウム2010「産学官連携によるイノベーションシステムの構築～新規事業開拓における研究機関の役割～」を開催
- ・UCバークレーの講師によるワークショップ「将来の大学教員・研究職を目指す大学院生のための能力向上（PFF）講座：ティーチングとライティングの基礎」を開催
- ・平成21年度北海道大学大塚賞授与式を举行
- ・平成21年度クラーク賞表彰式を举行

5月号

- ・春の叙勲に本学から3氏
- ・中国 蘭州大学と大学間交流協定を締結
- ・北海道大学事業所内保育所「ともに」の開所
- ・平成21年度北海道大学外国人留学生後援会の決算
- ・北大フロンティア基金
- ・「日本語研修コース」入学式を举行
- ・北海道大学総長奨励金ならびに北海道大学私費外国人留学生特待制度奨学金給付証書授与式を举行
- ・「新入生対象留学オリエンテーション」を開催
- ・21世紀東アジア青少年大交流計画訪問団が来訪
- ・放射線障害防止のための教育訓練及びエックス線障害防止のための教育訓練を実施
- ・平成22年度「全学教育科目に係るTA研修会」を開催

6月号

- ・北大交流プラザ「エルムの森」が正門横に移転－開所式举行
- ・情報科学研究科 野島教授が平成22年度「電波の日」総務大臣表彰を受賞
- ・－科学・技術フェスタ in 京都－平成22年度産学官連携推進会議に参加
- ・第8回産学官連携功労者表彰に本学から2名が受賞
- ・平成23年度AO入試学生募集要項の発表
- ・平成23年度帰国子女入試学生募集要項の発表
- ・名誉教授称号授与式の举行
- ・学士会館の七大学展示コーナー開設セレモニー
- ・北大フロンティア基金
- ・高等教育機能開発総合センター「S研究棟」見学会の実施
- ・「海外留学説明会」を開催
- ・「短期語学研修プログラム説明会」を開催
- ・「出入国管理制度説明会」開催
- ・遺伝子組換え実験の申請等に係る講習会を実施

7月号

- ・国際本部が発足
- ・本学がProSPER.Netの議長大学に就任
- ・韓国海洋大学校と大学間交流協定を締結
- ・マレーシア科学大学と大学間交流協定を締結，合同FDワークショップを開催
- ・高エネルギー加速器研究機構と連携協力協定を締結
- ・平成23年度入学者選抜要項の決定
- ・スパコングリーン化技術の大規模実証研究で共同記者会見
- ・北大フロンティア基金
- ・第6回「九大・北大合同フロンティア・セミナー」開催
- ・第16回北海道大学教育ワークショップ（FD）を開催
- ・平成22年度衛生管理者会議開催

- ・動物実験実施者等教育訓練を実施
- ・硬式野球部「第59回全日本大学野球選手権大会」ベスト8の快挙！
- ・応援団「小樽商科大学応援団との対面式」の復活
- ・平成22年度北海道大学レーン記念賞授与式の挙行
- ・平成22年度北海道大学新渡戸賞授与式の挙行
- 8月号**
 - ・ポーランド AGH科学技術大学と大学間交流協定及びダブル・ディグリー・プログラム覚書を締結
 - ・サウジアラビア キング・アブドゥルアジーズ大学と大学間交流協定を締結
 - ・インドネシア ガジャマダ大学と大学間交流協定を締結
 - ・タイ カセサート大学人文学部一行が来訪
 - ・教育学研究院 大塚教授が平成22年度温泉関連功労者として環境大臣表彰を受賞
 - ・北海道大学入試説明会を実施
 - ・平成22年度(財)北海道大学クラーク記念財団助成事業の決定
 - ・(財)北海道大学クラーク記念財団への寄附
 - ・北大フロンティア基金
 - ・北海道大学 緑のビアガーデン2010を開催
 - ・第26回大学等環境安全協議会技術分科会を開催
 - ・平成22年度北海道大学公開講座「『変化』を見つめる－私たちや地域の未来のために－」
 - ・「のりさんと科学を語ろう！！ 第1回『宇宙』」を開催
 - ・放射線障害防止のための教育訓練の実施
 - ・2010年北海道大学サマーセッション・プログラム終了
 - ・「交換留学説明会」を開催
 - ・留学生と地域との交流「ホリデー・イン・日高」
 - ・平成22年度交換留学生に対する出発前オリエンテーションを実施
 - ・日本語教授法ワークショップ開催
- 9月号**
 - ・大学院薬学研究院に「臨床薬学教育研究センター」を設置
 - ・平成22年度科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)の交付決定－新規研究領域の採択－
 - ・平成22年度に採択された大学改革に係る教育支援プログラムの紹介
 - ・平成22年度総長室事業推進経費「公募型プロジェクト研究等支援経費」採択結果
 - ・平成22年度北海道大学オープンキャンパスを開催
 - ・北大フロンティア基金
 - ・札幌キャンパスを駆け抜ける－2010北海道マラソン－
 - ・北海道大学病院近藤哲仁氏がスポーツチャンバラ世界選手権大会で優勝！
 - ・留学生センター日本語研修コース修了式及び同コース、日本語・日本文化研修コース(日研コース)、北海道大学短期留学プログラム(HUSTEP)修了合同祝賀会を開催
 - ・平成22年度教員免許状更新講習を開催
- 10月号**
 - ・名誉教授 鈴木 章 氏 2010年ノーベル化学賞受賞決定
 - ・元総長 丹保憲仁名誉教授が「国際水協会グローバル・ビジョン賞」と「平成22年度北海道功労賞」を受賞
 - ・「高等教育推進機構」を設置
 - ・大学院保健科学院博士後期課程設置記念行事を開催
 - ・北海道大学環境健康科学研究教育センター設立記念式 環境省「子どもの健康と環境に関する全国調査」北海道ユニットセンター立ち上げ式等を開催
 - ・創成科学研究棟増築棟竣工式典・祝賀会を挙行
 - ・「アメリカンフットボール・ラクロス場」の完成

- ・「イノベーション・ジャパン2010－大学見本市」へ出展
- ・北大フロンティア基金
- ・平成23年度私費外国人留学生（学部）入試学生募集要項の発表
- ・「北海道大学プロフェッサー・ビジット2010」の実施
- ・産業医及び安全衛生委員会巡視を実施（札幌キャンパス）
- ・「平成23年度科学研究費補助金公募要領等説明会」の開催
- ・「科学研究費申請セミナー」を開催
- ・教育著作権セミナーを開催

11月号

- ・鈴木 章名誉教授が文化勲章受章，文化功労者顕彰
- ・秋の叙勲に本学から6氏
- ・「北海道地区FD・SD推進協議会」総会を開催
- ・第2回北海道大学次世代教育ワークショップを開催
- ・平成22年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催
- ・廣田剣道場20周年記念式典の開催
- ・平成23年度学生募集要項（一般入試）の発表
- ・北大フロンティア基金
- ・秋の一日，イチョウ並木の黄葉を満喫
- ・第7回「北大・九大合同フロンティア・セミナー」開催
- ・遺伝子組換え実験等に係る講習会を実施
- ・病原体等取扱者教育訓練を実施
- ・動物実験実施者等教育訓練を実施
- ・人材育成本部上級人材育成ステーションで「赤い糸会&緑の会」を開催
- ・「北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）」，「日本語・日本文化研修コース（日研コース）」および「日本語研修コース」入学式を挙げる
- ・北海道大学総長奨励金並びに北海道大学私費外国人留学生特待制度奨学金給付証書授与式を挙げる
- ・本学より2名の学生が参加：第3回世界学生環境会議

12月号

- ・次期総長候補者として佐伯 浩 現総長を選出
- ・名誉教授 鈴木 章 氏，2010年ノーベル賞授賞式へ
- ・北海道大学「サステイナブルキャンパス推進本部」を設置
- ・中国 上海海洋大学と大学間交流協定を締結
- ・榎原幹典 名誉教授が平成22年度原子力・放射線安全管理功労表彰受賞
- ・平成22年度科学研究費補助金審査委員表彰に本学から2氏－理学院 片倉晴雄教授と工学研究院 森田隆二教授－
- ・法学研究科 道幸哲也教授が厚生労働大臣表彰（「厚生労働行政功労者に対する表彰」及び「労政行政関係功労者に対する表彰」）を受賞
- ・平成22年度医学教育等関係業務功労者表彰，本学から2氏が受賞
- ・電子科学研究所 竹内繁樹教授らが大和エイドリアン賞を受賞
- ・平成22年度一般会計経済危機対応・地域活性化予備費（本学関係分）の主要事項，平成22年度補正予算（第1号）案（本学関係分）の主要事項
- ・AO入試合格者の発表
- ・帰国子女入試合格者の発表
- ・大学入試センター試験・本学一般入試個別学力検査等 実施体制等の決定
- ・大学入試センター試験志願者数の発表－本学会場は札幌地区試験場5,240人，函館地区水産学部試験場391人が受験－
- ・「北海道大学進学相談会 in 東京・大阪・名古屋」の開催

- ・北大フロンティア基金
- ・(財)北海道大学クラーク記念財団への寄附
- ・サステナビリティ・ウィーク2010の開催
 - ・サステナビリティ・ウィーク2010を振り返って
 - ・サステナビリティ・ウィーク2010オープニングシンポジウム
北海道大学「持続可能な発展」国際シンポジウム 「ひとり一人がすこやかに人間らしく生きる社会を目指して ～わたしたちが直面する危機の原因を包括的に探る～」
 - ・「少子化と持続可能な未来」
 - ・サイエンスカフェ「地球の調べ方・カフェ」(第一夜～第三夜)
 - ・経済学部主催 第7回プレゼン・ディベート大会
 - ・市民向け講座：北海道大学サステナビリティ・フォーラム
 - ・みんなで考えようー身近な環境と子どもの健康ー
 - ・グリーン回路とシステムに関する国際ワークショップ
 - ・自転車タクシーDEおしゃべり&ECO
 - ・第5回フェアトレードフェア
 - ・第2回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト
 - ・インフルエンザなどの人獣共通感染症を克服する～統合科学実験展示～
 - ・留学希望者向けセミナー
 - ・サステナブル・キャンパスツアー
 - ・第1回 サステナブル・キャンパス・コンテスト
 - ・再生可能エネルギー国際シンポジウム
 - ・Candlize2010
 - ・シンポジウム「北の山で何が起きているのか：変容の持続的観測」
 - ・国際シンポジウム「サステナビリティ学教育のグローバルキャンパス化をめざして」
 - ・CLARK THEATER 2010
 - ・北海道地域医療シンポジウム
 - ・「崩壊する地球生態系を救えるのか？」生態炭素と生物多様性の鍵ー熱帯泥炭・森林ー
 - ・シンポジウム「グリーンな福祉国家は可能かー社会保障・環境・経済の新しい連携ー」
 - ・公開シンポジウム「都市・農村の地域連携を基礎とした低炭素社会のエコデザイン」
 - ・「子どもの未来可能性を大切にする社会の実現をめざして」
 - ・2011年アムール・オホーツクコンソーシアム第二回会合に向けた国際ワークショップ
 - ・第3回センチネルアース国際シンポジウムー衛星画像・データとGISの新展開とその先進的利用ー
 - ・国際講演・実習：顎関節症診断法の国際基準
 - ・公開講座「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」
 - ・環境政策セミナー ～生物多様性保全と気候変動～
 - ・産学官セミナー「地理空間情報が拓く未来Ⅱー自治体GISー」
 - ・北海道海洋生物科学シンポジウム
 - ・国際シンポジウム「子どもの貧困と対抗戦略ー研究・市民活動・政策形成」
 - ・国際シンポジウム「持続可能な女性の健康のために：歴史の中の避妊と中絶を問う」
 - ・第14回アイヌ語弁論大会 イタカン ロー ～アイヌ語で話しましょう！～
 - ・特別講演「高齢化社会における世代間正義と健康」
 - ・市民フォーラム「サステナビリティ水産科学の理論と実践 ～あなたがいるから、私も生きていける～」
 - ・日本学術会議北海道地区学術講演会「北海道から発信するグリーンイノベーション」
- ・平成22年度北海道地区国立学校等安全管理協議会に北大より担当職員が参加

- ・新化学物質管理システム部局管理者説明会を開催
- ・漕艇部「小艇漕」落成式の開催
- ・イルミネーション点灯式
- ・第50回全国七大学総合体育大会「公式マスコット」の決定！
- ・放射線障害防止のための教育訓練及びエックス線障害防止のための教育訓練を実施
- ・「北海道ブロック大学等安全保障貿易管理説明会」の開催
- ・ビジネスEXPO「第24回 北海道 技術・ビジネス交流会」に参加
- ・平成22年度北海道大学国際産学官連携セミナーを開催
- ・北海道大学交流デー（長春）を開催
- ・海外大学とのコンソーシアム活動の報告：「大学同士のESDコンサルテーション」を実施
- ・2010年韓国大学生訪日研修団の本学訪問

部局 ニュース

- 1 月号**
- ・日韓拠点大学交流事業セミナー及び部局間交流協定調印式を韓国江陵市で開催
 - ・水産科学研究院が函館市との連携協定を締結
 - ・総合博物館土曜市民セミナー「市民の学びの場としての博物館」が開催される
 - ・触媒化学研究センターが「第24回CRC国際シンポジウム」「第20回研究討論会」を開催
 - ・触媒化学研究センター創立20周年記念行事を開催
 - ・経済学研究科会計専門職大学院特別セミナーを開催
 - ・農学研究院に（財）発酵研究所による寄附分野設置－微生物新機能開発学分野－
 - ・低温科学研究所技術部で「第2回技術部セミナー」及び「第15回技術発表会」を開催
 - ・第7回脳科学研究教育センター・シンポジウム「脳の個性を科学する：遺伝子と環境がつくる脳の力」
 - ・水産学部キャンパス・北農寮間を結ぶ連絡バスの試験運行始まる！
 - ・体験学習教室「サケは海からの贈り物」を開催
 - ・横浜港大棧橋碇泊中の学部附属練習船おしよろ丸で「水産学部進学説明会 in 横浜」を開催
 - ・水産学部附属練習船おしよろ丸に“さかなクン”現る！
 - ・工学部で「心のケアに関する講習会」を開催
 - ・「平成21年度第1回獣医学研究科FD講演会」を開催
 - ・第28回遊戯会仮装「明治桃太郎害虫駆除」写真を大学文書館で受贈
 - ・総合博物館がカイザースラウテルンで開催された標本展示に協力
 - ・平成21年度北海道大学教育GPシンポジウム「大学博物館から拓く学生教育の未来2」開催
 - ・総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催
 - ・第7回北海道大学教育GPセミナー「2000年後の美術館・博物館プロジェクト～現代アートとのコラボレーションによるミュージアムの活性化～」開催
 - ・北大教育GP主催公開研究会「フィンランドの『教えない教育』」開催
 - ・北海道大学病院で「北大ボプラチェンバロとバロック音楽の調べ」を開催
 - ・北海道大学病院でクリスマスコンサートを開催
 - ・北大幼児園最後のクリスマスお楽しみ会
- 2 月号**
- ・HUSCAPの収録文献数が3万編を突破
 - ・国立大学図書館協会北海道地区協会セミナー（第1回）を開催
 - ・第6回デジタルリポジトリ連合ワークショップを開催

- ・(財)北水協会創設125周年を記念した「北海道の水産の源流を拓いた関係資料展示」開催
- ・「新水産・海洋都市はこだてを支える人材養成」説明会を函館で開催
- ・東アジアメディア研究センターが、東京&札幌で国際シンポジウム「ネットが変える中国、ネットで変わる日中関係」を開催
- ・グローバルCOEプログラム「知の創出を支える次世代IT基盤拠点」、第3回国際シンポジウム「GCOE-NGIT2010(知の創出を支える次世代IT)」を開催
- ・「エコプロダクツ2009」に出展
- ・工学系教育研究センター「海外インターンシップ体験報告会」を開催
- ・大韓民国・ソウル大学校薬学大学長が薬学部を訪問
- ・農学院・農学研究院・農学部において「留学生新年会」を開催
- ・真冬の森の宝を見つけたよ！-雨龍研究林で「森のたんけん隊2010冬」を開催
- ・角帽など新制大学の初期資料を大学文書館で受贈
- ・総合博物館土曜市民セミナー「素晴らしき国ルーマニア」が開催される
- ・総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催
- ・北大教育GP主催公開研究会「フィンランドの『教えない教育』」開催
- ・第8回北海道大学教育GPセミナー「文化コーディネーターと町づくり」開催
- ・平成21年度大学教育改革プログラム合同フォーラムに参加

3月号

- ・工学研究科がブルキナファソ国際水環境技術学院と部局間交流協定を締結
- ・農学研究院が弘前大学北日本新エネルギー研究センターとの連携協定を締結
- ・触媒化学研究センターが英国カーディフ大学カーディフ触媒研究所と友好学術交流協定を締結
- ・北海道大学病院 がん診療連携拠点病院主催事業「高度ながん早期診断法に関する研修会・合同カンファレンス」を開催
- ・駐日米国大使ジョン・ルース氏とディスカッション
- ・国際会計基準審議会(IASB)理事の講演会を開催
- ・公認会計士・監査審査会会長の特別セミナーを開催
- ・「おしよる丸就航100周年記念事業」写真パネル展の第6回巡回展を開催
- ・附属図書館で「北大生の学生群像(第Ⅱ期)」展を開催
- ・第4代総長 今裕の墨蹟を受贈
- ・総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催
- ・総合博物館土曜市民セミナー「アンモナイトに取り憑かれて」が開催される
- ・北大教育GP主催公開研究会「フィンランドの『教えない教育』」開催

4月号

- ・北大幼児園卒園式と「幼児園ありがとりの会」開催
- ・電子科学研究所がリヨン高等師範学校(フランス)との部局間学術交流協定を締結
- ・水産学部附属練習船おしよる丸に対し内閣府から感謝状
- ・函館キャンパスにて北晨寮及びゲストハウス「おしよる」竣工記念内覧会・祝賀会開催
- ・水産科学研究院で平成21年度部局FD研修会(第14回)を開催
- ・「理学部・理学院合同FD研修会」を実施
- ・生命科学院FD活動報告
- ・工学研究科「北大フロンティアプログラム」修了式を挙行
- ・脳科学研究教育センター発達脳科学専攻第6期修了生に修了証書授与
- ・総合博物館で北大教育GP主催「卒論ポスター発表会」開催
- ・大学院生による博物館展示リニューアルの取り組み(2)
- ・総合博物館で「博物館まつり」を開催
- ・総合博物館土曜市民セミナー「マキシモヴィッチと19世紀のペテルブルグ」が開催される

5 月号

- ・ 第 9 回北海道大学教育GPセミナー「北大の教育改革の15年」開催
- ・ 日韓の若者（青少年）支援シンポジウム－留学生の活躍－
- ・ 大学文書館で『北海道大学大学文書館年報』第 5 号を刊行
- ・ ポーランドの 3 大学・研究所と触媒化学研究センターの友好学術交流協定－国際的触媒化学研究ネットワークによるサステナブル社会の実現にむけて－
- ・ 情報科学研究科、フィリピン共和国・フィリピン大学ディルマン校工学部と部局間交流協定を締結
- ・ 電子科学研究所が理化学研究所基幹研究所と連携研究推進協定を締結
- ・ 総合化学院で入学式を挙行
- ・ 獣医学研究科・獣医学部講義棟竣工披露式・祝賀会を挙行
- ・ 工学院「北大フロンティアプログラム」平成22年度開講式を開催
- ・ 北海道大学病院で研修医歓迎会を開催
- ・ 平成22年度薬学部薬学科実務実習開始式を挙行
- ・ 脳科学研究教育センター発達脳科学専攻で開講式
- ・ 「郵便資料でかえりみる札幌農学校」が日本郵趣協会第11回オープン切手展で金銀賞を受賞
- ・ サイエンスカフェ「地震・火山噴火、その仕組みに迫る」を開催
- ・ 総合博物館土曜市民セミナー「新任館長挨拶」を開催
- ・ 「アンモナイト銅版画展」を開催
- ・ 総合博物館でバラタクソノミスト養成講座を開催
- ・ 工学部で『危険作業講習会「安全な実験のために」』を開催
- ・ 経済学部でメンタルヘルス講演会を開催
- ・ 平成22年度獣医学研究科TA研修会を開催
- ・ 水産科学院・水産学部で「教員とTAの合同研修会」を開催
- ・ 赤木顕次・川上瀧彌関係資料を大学文書館で受贈
- ・ 北大幼児園関係資料を大学文書館に移管
- ・ 資料見学会「森本厚吉点描－札幌農学校受験から北海道帝国大学離任まで－」を大学文書館で開催

6 月号

- ・ 環境科学院講義棟新営及びA棟耐震改修竣工披露式・祝賀会を挙行
- ・ IAEA主催国際核反応データセンターネットワーク技術会議を北大にて開催
- ・ 北海道大学－ISTC主催の「北太平洋地域地震火山噴火防災のための研究推進に関する国際ワークショップ」を開催
- ・ TEMM（日中韓 3 カ国環境大臣会合）学生会議への参加
- ・ スラブ研究センター公開講座「地域大国比較の試み：ロシアを中国やインドと比べたら何が分かるか？」が終了
- ・ 第17回ファーマサイエンスフォーラム－北海道大学領域融合研究ユニット心身相関学研究室キックオフシンポジウム－を開催
- ・ 薬学部でメンタルケア講習会を実施
- ・ 環境科学院で北大祭・研究施設公開「もっと身近に環境科学」を開催
- ・ 第 2 回人文学カフェ「村上春樹『1Q84』を読む－物語をかきかえる－」を開催
- ・ 経済学部で「北海道経済が発展するための原動力は何か」をテーマに講演会を開催
- ・ 会計専門職大学院で公認会計士制度説明会を開催
- ・ 工学部で講習会「ワークショップをはじめよう！！」を開催
- ・ 日本ハムファイターズ、北海道大学病院院内学級を訪問
- ・ 看護週間－「看護の日の夕べ」ほか様々な催しを実施
- ・ 「地質の日」・「国際博物館の日」記念企画展示「わが街の文化遺産－札幌軟石 歩い

た！探した！見つけた！」を開催

- ・ 附属図書館で企画展示「北方古地図展」第一期「北海道図の変遷」を開催
- ・ 定山溪中学校修学旅行事前学習を大学文書館で実施
- ・ 農学部応用菌学講座・「半澤式納豆」関係資料を大学文書館で新たに受贈
- ・ 田邊至油彩画（1913年）を大学文書館で受贈
- ・ 工学部所蔵沿革資料を大学文書館に移管

7月号

- ・ スラブ研究センターと黒龍江省社会科学院が学術交流協定を締結
- ・ 水産科学研究院がチェコ共和国南ボヘミア大学水産及び水系保護研究院と部局間交流協定を締結
- ・ JSPS若手研究者交流支援事業にかかる国際セミナー・シンポジウムを函館で開催
- ・ 工学部にメンタルヘルスケアのための「なんでも相談室」を開設
- ・ 第1回日中韓若手研究者ワークショップに工学研究院から2名が参加
- ・ 第57回国立大学図書館協会総会開催
- ・ 「2009年ノーベル化学賞受賞者講演会」開催
- ・ 電子科学研究所を一般公開
- ・ 第9回観光創造コロキウムを開催
- ・ メディア・コミュニケーション研究院が国際シンポジウムを開催
- ・ 薬学部第13回生涯教育特別講座を開催
- ・ 北海道大学教育GP第2回外部評価委員会開催
- ・ 総合博物館土曜市民セミナー「都市公園の美的問題圏」を開催
- ・ 第10回北海道大学教育GPセミナー「次世代FD・TAが支える大学教育の新たな展開」開催
- ・ 総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催
- ・ 新渡戸稲造墨蹟を大学文書館で新たに受贈
- ・ 第1回ワークショップ「消防体制をデザインする」を開催
- ・ 歯学研究科で平成22年度第1回消防訓練を実施

8月号

- ・ 農学研究院が利尻町・利尻富士町・礼文町との連携協定を締結
- ・ 北方生物圏フィールド科学センターが函館市との包括連携協定を締結
- ・ 教育学部で一日体験入学を開催
- ・ 薬学部附属薬用植物園で「薬用植物園の見学会」を開催
- ・ 平成22年度文学研究科・文学部公開講座「ごかい・誤解？」が終了
- ・ 平成22年度北海道大学病院緩和ケア研修会を実施
- ・ 第10回観光創造コロキウムを開催
- ・ メディア・コミュニケーション研究院公開講座「日常性の中のことばの不思議」が終了
- ・ 経済学部がプレゼン・ディベート大会に向けてセミナーを開催
- ・ 第2回ワークショップ「消防体制をデザインする」を開催
- ・ 体験学習教室「海岸動物の観察と実験」を開催
- ・ 体験学習教室「小中学生のためのシュノーケリング教室」を開催
- ・ 水産学部が函館港まつり「ワッショイはこだて」に参加
- ・ 北海道大学総合博物館企画展示「アラスカの恐竜－アジアをめざした生命－」のオープニングセレモニー
- ・ 土曜市民セミナー「ベーリング海峡を渡った恐竜」
- ・ 第11回北海道大学教育GPセミナー「地域教育の行方－地域活動と大学教育の連携－」開催
- ・ 総合博物館 カルチャーナイト2010に参加「チェンバロと星空の夕べ」を開催
- ・ 北大教育GP 学生がデザインした総合博物館オリジナルTシャツ2010の販売開始

- ・ 総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催
- ・ 第12代学長有江幹男旧蔵資料を大学文書館で受贈
- ・ 医学部第10期生渡邊左武郎旧蔵資料を大学文書館で受贈
- ・ 資料見学会「森本厚吉点描」を大学文書館で開催
- ・ 第7回北海道大学史研究会を大学文書館で開催
- 9月号
 - ・ 医学部学友会館「フラテ」竣工披露等を挙
 - ・ グローバルCOEプログラム「統合フィールド環境科学の教育研究拠点形成」主催国際サマースクール2010を開催
 - ・ グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシア世界」夏季国際教育プログラムが終了
 - ・ JSPS若手研究者交流支援事業ラップアップワークショップをタイで開催
 - ・ 公共政策大学院が地方議員向けサマースクール開催－地域主権・議会改革をテーマに「白熱教室」－
 - ・ 法学研究科・附属高等法政教育研究センター公開講座「政治の混迷 歴史の回顧」の終了
 - ・ 北海道大学総合博物館企画展示「アラスカの恐竜－アジアをめざした生命－」来館者数3万人達成
 - ・ 「北海道の博物館の未来～将来構想を考える～」合同セミナーを開催
 - ・ 大学院生が企画・開発したダンボールクラフト「紙の標本－デスモスチルス」ミュージアムショップで販売開始
 - ・ 「レンズを通して見る博物館－ケータイカメラの撮り方講座」を開催
 - ・ 附属図書館で企画展示「北方古地図展」第二期「北方図の変遷」を開催
 - ・ 農学部林学科・林産学科講義資料を大学文書館で受贈
 - ・ 藤女子大学「資料特論」講義で大学文書館見学学習会を開催
 - ・ 病院検査・輸血部主催の市民フォーラムを開催
 - ・ ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～「北大農場でベリーの品種改良に挑戦しよう！」を開催
 - ・ 雄大な自然の中で「フィールド研究」の楽しさを満喫！北方生物圏フィールド科学センターで「野外シンポジウム2010」を開催
- 10月号
 - ・ 未来創薬・医療イノベーション拠点形成事業第8回国際シンポジウム “Molecular Imaging for Treatment Monitoring” が開催されました
 - ・ 電子科学研究所がオットー・フォン・ゲーリケ大学マクデブルク（ドイツ）との部局間学術交流協定を締結
 - ・ 観光学高等研究センターがニセコ町と連携協定を締結
 - ・ 獣医学研究科 第10回アジア獣医科大学協議会を開催
 - ・ 国際生物学賞受賞者、サージ・ダアン博士（Dr. Serge Daan）（オランダ）総長表敬訪問
 - ・ 医学研究科・歯学研究科合同慰霊式を挙
 - ・ 動物慰霊式を挙（遺伝子病制御研究所附属動物実験施設、獣医学研究科）
 - ・ 保健科学研究所が「平成22年度FDワークショップ」を開催
 - ・ 北海道大学病院で災害医療訓練、NBCテロ対策訓練を実施
 - ・ 富良野自然塾で集中講義を開催－「五感」で「考えた」富良野の3日間－
 - ・ 水産科学院・水産学部で「キャリア支援のための教員向け就職ガイダンス」を開催
 - ・ 水産学部2年生キャンパス移行式を実施
 - ・ 平成22年度（第24回）水産学部公開講座「海に学ぶミラクルバイオワールド」が終了
 - ・ 体験学習教室「小中学生のためのウニの実験教室」を開催
 - ・ 公明党山口代表らが水産学部へ来学
 - ・ 工学部で安全衛生管理講演会『デュークズウォークエクササイズ～日常生活で簡単にで

きる健康法〜』を開催

- ・歯学研究科で市民公開特別講座「健康のコツ教えます！－骨元気で健康長生き－お口から骨粗鬆症を考える」を開催
- ・大学院経済学研究科・経済学部公開講座「会計学からみた経営と社会」が終了
- ・会計専門職大学院で公認会計士業界説明会を開催
- ・第12回北海道大学教育GPセミナー「大学院における高度博物館学教育の実践」開催
- ・総合博物館で「HOKUDAIミュージアムマイスター」認定式を実施
- ・総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催
- ・総合博物館セミナー「法医学と博物館」開催
- ・宮部金吾旧蔵郵便資料を大学文書館で受贈

11月号

- ・低温科学研究所がスウェーデン王国・ストックホルム大学理学部と部局間交流協定を締結
- ・歯学研究科で全北大学校歯医学専門大学院との姉妹校提携20周年記念交流行事を開催
- ・全国農学系学部長会議を開催
- ・医学研究科附属動物実験施設で動物慰霊式を挙行
- ・法学研究科・法学部で外国人留学生歓迎会を開催
- ・経済学研究科・経済学部で外国人留学生懇親会を開催
- ・水産学部で体験学習教室「小中学生のための生命科学教室」を開催
- ・地球環境科学研究院公開講座「北海道の自然環境考察：その危機的現象をとらえる」が終了
- ・アジア人財資金構想 北大フロンティアプログラム「産業・技術フォーラム2010」を開催
- ・国立大学図書館協会北海道地区協会セミナー「次世代ライブラリアンシップのための基礎知識 第2回」を開催
- ・HUSCAP 5周年記念講演会を開催
- ・北海道大学病院院内学級で秋の遠足を実施
- ・「脳科学研究教育センター合宿研修」の開催
- ・総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催
- ・総合博物館で第13回北海道大学教育GPセミナー「看護学教育におけるOSCEの実際－市民の模擬患者と共に－」を開催
- ・総合博物館で教育GPワークショップ「博物館で個性が活かせる授業を創ろう！」第1回（題材：きのこ）を開催
- ・総合博物館土曜市民セミナー「私達と自然エネルギーの未来」を開催
- ・初代総長 佐藤昌介の墨蹟を大学文書館で新たに受贈
- ・「消防訓練」の実施（工学研究院・工学部，農学研究院・農学部，附属図書館，理学研究院，獣医学研究科，保健科学院・保健科学研究院・医学部保健学科，医学研究科・医学部，遺伝子病制御研究所，アイトソープ総合センター）

12月号

- ・附属図書館北図書館で「鈴木章名誉教授ノーベル賞受賞記念図書展示」を開催
- ・水産学部附属練習船おしよろ丸に対し内閣府から感謝状
- ・「法科大学院に関するアドバイザリーグループ会議」を開催
- ・北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシア世界」が「国境フォーラム in 対馬」を開催
- ・経済学研究科・経済学部で「経済学部3年生，研究生のための大学院ガイダンス」を開催
- ・経済学部で札幌国税局長の特別講演会を開催
- ・歯学研究科で動物供養祭を挙行

資 料

- ・ 北方生物圏フィールド科学センターで畜魂祭举行
- ・ 薬学研究院・薬学部で「実験動物慰霊祭」を举行
- ・ 平成22年度 薬学部成績優秀賞授与式を実施
- ・ 水産学部で北大ペンハロー賞授賞式を実施
- ・ 水産学部で体験学習教室「マクロ生物学への招待～ヤドカリの繁殖行動を科学する～」を開催
- ・ 第一回AASPPアジア原子核反応データベース研究開発会議を北大にて開催
- ・ 「サイエンスカフェ in えりも」を開催
- ・ 農学研究院で市民公開・農学特別講演会「農学の連携」を開催
- ・ メディア・コミュニケーション研究院公開講座「『学問的』読書の方法」が終了
- ・ 観光学高等研究センター公開講座「旅の楽しさを考える」が終了
- ・ 総合博物館土曜市民セミナー「トリニダード トバゴ共和国の歴史と文化、自然…常夏の島…」を開催
- ・ 教育GPワークショップ「博物館で個性が活かせる授業を創ろう！」第2回（題材：植物）を開催
- ・ 第14回北海道大学教育GPセミナー「CoSTEP－これまでとこれから－」開催
- ・ 予科昭和23年入学同期会関係資料を大学文書館で受贈
- ・ 出征壮行会の「日の丸」寄せ書きを大学文書館で受贈
- ・ 資料見学会「平塚直治・直秀の『銹菌研究』来し方－宮部金吾との師弟結びつきを中心に－」を大学文書館で開催
- ・ 「消防訓練」の実施（歯学研究科、情報基盤センター、北キャンパス）

お 知 ら せ

- 2月号**
 - ・ 札幌キャンパス過半数代表候補者の決定
 - ・ 函館キャンパス過半数代表候補者の決定
 - ・ 全学停電（平成22年度）の予定
 - ・ 〈共済組合員の皆様へ〉被扶養者の認定または取消等の届出は速やかに
- 3月号**
 - ・ 平成22年度総合博物館の開館時間・休館日ならびに臨時休館日のお知らせ
- 4月号**
 - ・ 北海道大学病院の過半数代表候補者の決定
 - ・ 平成22年度北海道大学公開講座等開設一覧
 - ・ 平成23年度採用分日本学術振興会特別研究員の募集
 - ・ 省エネルギー月間（平成22年2月）の実施状況
- 5月号**
 - ・ 平成22年度北海道大学公開講座（全学企画）「変化」を見つめる－私たちや地域の未来のために－
 - ・ 平成22年度人間ドックの実施について
 - ・ 北海道地区福祉共同事業契約宿泊施設の開設
- 6月号**
 - ・ 施設整備の概要
- 7月号**
 - ・ 平成23年度大学入試センター試験の実施期日
 - ・ 「北海道大学の役職員の給与等の水準（平成21年度）」の概要について
 - ・ 平成22年度の全学停電
 - ・ 夏季期間における工学系建物の閉鎖の実施について
- 8月号**
 - ・ 共済組合員証等の検認
 - ・ 文部科学省主催「平成23年度科学研究費補助金公募要領等説明会（北海道地区）」のご案内
 - ・ サステナブル封筒をご利用ください！

- 10月号** ・ 次期総長候補者の選考日程が決定
 ・ 医療費通知事業の実施
 ・ 平成23年度（来年度）全学停電の予定について
 ・ 省エネルギー月間（平成22年8月）の実施状況
 ・ 北海道大学 第55回パイプオルガン演奏会「バッハへのオマージュ」の開催について
- 12月号** ・ 冬期間の駐車についての注意－除雪・通行の障害となる駐車はやめましょう－

寄 稿 等

- 3月号** ・ 北大を去るにあたって
 ・ 北大での研修を通じて感じたこと
- 5月号** ・ 監事退任にあたって
 ・ 監事の任期を終えて
- 9月号** ・ 民間企業派遣研修報告

博士学位記授与

- 1月号** ・ 課程博士23人，論文博士12人
- 4月号** ・ 課程博士329人，論文博士26人
- 7月号** ・ 課程博士25人，論文博士6人
- 10月号** ・ 課程博士75人，論文博士8人

告 示

- 3月号** ・ 北海道大学告示第1号（平成22年3月1日）
- 5月号** ・ 北海道大学告示第2号（平成22年4月20日）

レクリエーション

- 2月号** ・ 方円会が北大囲碁部との交流会を実施－全日本学生囲碁選手権大会に向けて「檄を飛ばす会」
- 8月号** ・ 教職員テニス大会の開催
 ・ 平成22年度学内職員バドミントン大会（個人戦）
- 9月号** ・ 教職員テニス大会の開催
 ・ 平成22年度学内バレーボール大会の開催
- 10月号** ・ 北海道実業団対抗テニス大会で本学女子Aチーム優勝
 ・ 教職員テニス大会の開催
 ・ 学内教職員ソフトボール大会の開催
 ・ 教職員卓球大会の開催－団体戦・個人戦－
 ・ 学内教職員フットサル大会の開催
- 12月号** ・ 全道フットサル選手権札幌地区予選に出場

研 修

- 1月号** ・ 平成21年度国立大学法人北海道大学事務職員英語研修
- 2月号** ・ 平成21年度北海道地区国立大学法人等事務情報化講習会（ACCESS中級）
- 5月号** ・ 平成22年度北海道地区国立大学法人等初任職員研修（一般職）
- 7月号** ・ 平成22年度北海道地区国立大学法人等中堅職員研修
- 10月号** ・ 平成22年度北海道地区国立大学法人等技術職員研修

資 料

- 11月号 ・平成22年度北海道大学簿記研修
 ・平成22年度北海道地区国立大学法人等事務情報化講習会（ACCESS初級）
 12月号 ・平成22年度北海道地区大学等留学生担当職員研修
 ・平成22年度北海道地区国立大学法人等会計基準研修

表 敬 訪 問

（国内）

- 3月号 ・北洋銀行 頭取 横内 龍三 氏
 ・文部科学省 科学技術・学術政策局 戦略官 岡谷 重雄 氏
 4月号 ・在ザンビア日本大使館 三田村 秀人 大使
 ・東京医科歯科大学 竹本 佳弘 国際交流ディレクター
 ・日東電工株式会社 柳楽 幸雄 代表取締役社長
 5月号 ・地方独立行政法人北海道立総合研究機構 理事長 丹保 憲仁 氏ほか
 ・前北海道副知事 山本 邦彦 氏
 ・千歳科学技術大学長 川瀬 正明 氏
 ・北海道大学国際婦人交流会
 8月号 ・文部科学省 科学技術・学術政策局基盤政策課長 川端 和明 氏
 ・キリンビール株式会社 代表取締役社長 松沢 幸一 氏
 ・国土交通省北海道局長 関 克己 氏, 国土交通省北海道開発局長 高松 泰 氏
 9月号 ・社団法人土木学会会長 阪田 憲次 氏
 10月号 ・北海道電力株式会社 取締役会長 近藤 龍夫 氏
 ・文部科学省生涯学習政策局官房審議官 伊藤 洋一 氏, 文部科学省生涯学習政策局情報教育推進係長 牧 雅英 氏
 ・日本金属学会

（海外）

- 1月号 ・サッポロ・デンタル・カレッジ（バングラデシュ） Zunaid Ahmed 准教授
 ・ダッカ大学歯学部（ダッカ デンタル カレッジ, バングラデシュ） Haider Ali Khan 准教授
 ・ブリティッシュ・カウンシル アリソン・ビール 駐日副代表
 ・ザンビア大学サモラ・マシエル獣医学部 Aaron S. Mweene 学部長
 2月号 ・IAU国際活動評価委員一行
 ・駐日フィンランド大使館 ヤリ・グスタフソン 大使
 ・韓国海洋大学校工科大学 Joong-Woo Lee 学長
 ・駐日スロバキア共和国大使館 ドゥラホミール・シュトス 大使
 ・ブルキナファソ 国際水環境学院 Paul Ginies 学長
 3月号 ・ジョセフフーリエ大学（フランス） Eric Beaunon 副学長
 ・駐日セルビア共和国大使館 イワン・ムルキッチ 大使
 ・駐日南アフリカ共和国大使館 ガート・グロブラー 大使
 ・駐日キューバ大使館 タニア・ドミンゲス・ロサス 文化・科学技術参事官
 ・スイス連邦工科大学材料研究センター R. Spolenak センター長
 ・インドネシア政府奨学生モニタリングチーム 一行
 ・韓国全国国公立大学教授会連合会 一行
 ・駐日イスラエル大使館 ニシム・ベンシトリット 大使
 ・ライス大学（アメリカ） 電気・コンピューター学科 河野 淳一郎 教授 ほか

- 4月号** ・ 西安交通大学（中国） 王 建華 校務委员会主任
- 5月号** ・ 南開大学（中国） 饒 子和 学長
・ フィリピン大学Diliman校 Sergio S. Cao 校長
- 6月号** ・ 嶺南大学校（韓国） 朱 祥佑 国際交流担当副学長
・ アラスカ大学（米国） エツコ キムラ ピーターソン 氏 , ポール クレイチ 氏
・ 米国教育省 Anthony W. Miller 副長官
・ 国立中興大学（台湾） 邱貴芬 人文社会センター長
・ 中国・日本韓国訪問団 索麗生 呉作人国際美術基金会理事長 一行
- 7月号** ・ キング・アブドゥルアジーズ大学（サウジアラビア） Adnan hamza M. Zahed 副学長, Abdullah Omar A. Bafail 副学長
・ アルバータ大学（カナダ） 人類学部 Andrzej Weber 教授
・ 重慶大学（中国） 張 四平 常務副学長
・ 大連理工大学（中国） 張 徳祥 書記
・ 湖南大学（中国） 張 強 副学長
・ オウル大学（フィンランド） トゥーレ研究所 Päivi Iskanious プロジェクトディレクター
・ スウェーデン王立工科大学コンピューター及びコミュニケーション学部 Johan Karlander 准教授
・ 仁川大学校（韓国） 安 慶洙 総長
・ 中日友好協会 宋 健 会長
・ 在日カナダ大使館 ロバート・デロウイン 公使兼 副館長
- 8月号** ・ 公州大学校（韓国） 学部長 一行
・ ミュンヘン工科大学（ドイツ） 食糧・生命科学センター Dr. Markus Schaller 氏
・ 上海交通大学（中国） 一行
- 9月号** ・ 在札幌米国総領事館総領事 ジョン・リース 氏
- 10月号** ・ 中国広東省外事弁公室副主任 李 堅 氏
・ オットー・フォン・ゲーリケ大学マクデブルク（ドイツ） 国際本部長 Uwe Genetzke 氏
・ アジア獣医科大学学部長 一行
・ 晋州産業大学（韓国） 総長 Jowon Kim 氏, 名誉総長 Sangchuel Kim 氏
- 11月号** ・ 南京農業大学（中国） 鄭 小波 学長
・ モンゴル国 道路交通建設都市開発省 次官 バットエルデネ 氏 一行
・ 中国教育部留学サービスセンター 鞏 万 副主任
・ 中正大学（台湾） 法学部 施慧玲 教授
・ 全北大学校（韓国） 歯医学専門大学院 Kim Jong Ghee 院長 一行
・ 武漢大学（中国） 李 斐 副学長
・ 蘭州大学（中国） An Lizhe 副学長
・ ウダヤナ大学（インドネシア） I Made Bakta 総長
・ 財団法人大田コンベンションビューロー（韓国） チェ・フンシク 事務総長
・ ダルハウジー大学（カナダ） キース・テイラー 教授
・ 延世大学校（韓国） 国際本部副本部長 John M. Frankl 教授
・ エボニ州立大学（ナイジェリア） Happiness Ogba Oselebe 博士
・ NSFC 国際合作局アジアアフリカ・国際組織処 Zhang Yongtao 副処長
・ 四川大学（中国） 国際合作与交流処 陳 兵 副処長
・ AGH科学技術大学（ポーランド） セラミック-物質科学研究科 Dariusz Kata 教授
・ 国立成功大学（台湾） 国際事務所国際組織長 福島康裕 准教授 他4名
- 12月号** ・ ブダペスト工科経済大学（ハンガリー） 電気情報学部 副学部長 Janos Levendovszky 教授 一行

資 料

- ・ブリティッシュコロンビア大学（カナダ）水産センター長 Ussif Rashid Sumaila 氏
- ・サハリン州副知事 トルトゥネワ イリーナ・イワノヴナ 氏 一行
- ・カリフォルニア大学デービス校 浅野 孝 名誉教授
- ・エジンバラ大学獣医校（英国）学部長 Elaine Watson 氏 一行

同窓会との交流

- 2月号 ・恵迪寮同窓会「新年寮歌始めの会」
- 4月号 ・「北海道大学卒業パーティ2010～北大という繋がり～」
・函館同窓会「総会および懇談会」
- 6月号 ・工学部同窓会総会
・北水同窓会定期総会
・平成22年度北海道大学連合同窓会総会（評議員会・幹事会合同会議）の開催
- 7月号 ・関西同窓会 北大会館祭（7周年）
- 10月号 ・恵迪寮同窓会大寮歌祭 in 北海道大会
・北海道大学連合同窓会主催特別講演会・懇談会の開催
・法学部・経済学部同窓会合同懇親会
- 11月号 ・関西同窓会総会の開催

諸会議の開催状況（平成22年1月～12月分掲載）

学 内 規 程

- 1月号 ・北海道大学学生寮規程の一部を改正する規程
・国立大学法人北海道大学インターナショナルハウス規程の一部を改正する規程
・国立大学法人北海道大学インターナショナルハウス使用料等規程の一部を改正する規程
・北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程
・国立大学法人北海道大学水産学部等の施設に係る自家用電気工作物保安規程の一部を改正する規程
- 2月号 ・北海道大学低温科学研究所規程の一部を改正する規程
- 3月号 ・国立大学法人北海道大学人事委員会規程の一部を改正する規程
- 4月号 ・国立大学法人北海道大学組織規則の一部を改正する規則
・国立大学法人北海道大学産学連携本部規程の一部を改正する規程
・国立大学法人北海道大学産学連携本部運営委員会規程の一部を改正する規程
・北海道大学水産学部附属練習船規程の一部を改正する規程
・北海道大学情報基盤センター大型計算機システム利用規程の一部を改正する規程
・国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程
・国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程
・北海道大学短期留学プログラム規程の一部を改正する規程
・国立大学法人北海道大学職員労働時間、休憩、休日及び休暇規程の一部を改正する規程
・国立大学法人北海道大学インターナショナルハウス規程の一部を改正する規程
・国立大学法人北海道大学借上宿舍等規程の一部を改正する規程
・北海道大学留学生センター規程の一部を改正する規程
・国立大学法人北海道大学インターナショナルハウス使用料等規程の一部を改正する規程
・国立大学法人北海道大学職員就業規則の一部を改正する規則
・国立大学法人北海道大学船員就業規則の一部を改正する規則
・国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員就業規則の一部を改正する規則

- ・ 国立大学法人北海道大学契約職員就業規則の一部を改正する規則
- ・ 国立大学法人北海道大学短時間勤務職員就業規則の一部を改正する規則
- ・ 国立大学法人北海道大学子どもの園保育園臨時職員就業規則の一部を改正する規則
- ・ 国立大学法人北海道大学特任教員就業規則の一部を改正する規則
- ・ 国立大学法人北海道大学嘱託職員就業規則の一部を改正する規則
- ・ 国立大学法人北海道大学職員休職規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学職員兼業規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学職員労働時間、休憩、休日及び休暇規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学船員労働時間、休日及び休暇規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学職員育児休業・介護休業等規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学役員退職手当規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員給与規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学職員退職手当規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学特任教員及び契約職員退職手当規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学組織規則の一部を改正する規則
- ・ 北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学経営協議会規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学教育研究評議会規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学人事委員会規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学アドミッションセンター規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学入学者選抜委員会規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学人材育成本部規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学安全保障輸出管理委員会規程
- ・ 国立大学法人北海道大学安全保障輸出管理規程
- ・ 北海道大学通則の一部を改正する規則
- ・ 北海道大学大学院通則の一部を改正する規則
- ・ 北海道大学学位規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学大学院理工系専門基礎科目規程
- ・ 北海道大学大学院共通授業科目規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学共同研究取扱規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学受託研究取扱規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学病的材料検査に関する規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学における聴講生等の検定料等の額に関する規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学病院規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学水産学部規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学大学院文学研究科規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学大学院法学研究科規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学大学院経済学研究科規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学大学院医学研究科規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学大学院歯学研究科規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学大学院獣医学研究科規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学大学院情報科学研究科規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学大学院水産科学院規程の一部を改正する規程

- ・北海道大学大学院環境科学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院理学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院農学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院生命科学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院教育学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院保健科学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院公共政策学教育部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院水産科学研究院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院理学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院先端生命科学研究院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院工学院規程
- ・北海道大学大学院工学研究院規程
- ・北海道大学大学院工学研究院附属エネルギー・マテリアル融合領域研究センター規程
- ・北海道大学大学院総合化学学院規程
- ・北海道大学低温科学研究所規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学低温科学研究所運営協議会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学低温科学研究所共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会規程
- ・北海道大学遺伝子病制御研究所規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学遺伝子病制御研究所共同利用・共同研究拠点運営委員会規程
- ・北海道大学遺伝子病制御研究所共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会規程
- ・北海道大学触媒化学研究センター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学触媒化学研究センター協議会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学触媒化学研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学スラブ研究センター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学スラブ研究センター協議会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学スラブ研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学スラブ研究センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会規程
- ・北海道大学情報基盤センター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学情報基盤センター全国共同利用委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター共同利用・共同研究拠点運営委員会規程
- ・北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター共同利用・共同研究拠点共同研究委員会規程
- ・北海道大学電子科学研究所規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学電子科学研究所附属ナノテクノロジー研究センター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学附属図書館利用規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学高等教育機能開発総合センター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学高等教育機能開発総合センター科学技術コミュニケーション教育研究委員会規程
- ・北海道大学脳科学研究教育センター規程及び北海道大学脳科学研究教育センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学観光学高等研究センター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学環境健康科学研究教育センター規程

- ・北海道大学環境健康科学研究教育センター運営委員会規程
- ・北海道大学保健管理センター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学保健管理センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学評価規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学教育研究支援本部運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学創成研究機構規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学学生委員会規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学情報セキュリティ委員会規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学遺伝子組換え実験等安全委員会規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学放射性同位元素等管理委員会規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学病原体等安全管理委員会規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学情報公開・個人情報保護審査委員会規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学埋蔵文化財運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程
- ・教育職員免許状授与の所要資格の取得に関する規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学職業紹介業務規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学職業紹介業務に係る個人情報適正管理規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学寄附講座等規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学利益相反マネジメント規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学職員表彰規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学全学運用教員規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学安全衛生管理規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学遺伝子組換え実験等安全管理規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学病原体等安全管理規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学放射線障害予防規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学エックス線障害予防規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学文書処理規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学における財務及び会計に関する職務権限規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学予算決算及び経理規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学アイソトープ総合センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学留学生センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学総合博物館運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学量子集積エレクトロニクス研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学北方生物圏フィールド科学センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学文書館運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学観光学高等研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学アイヌ・先住民研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学社会科学実験研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学情報法政策学研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学環境ナノ・バイオ工学研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学数学連携研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学サステイナビリティ学教育研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程

- ・北海道大学トポロジー理工学教育研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学環境保全センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学名誉教授称号授与規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学旅費規則の一部を改正する規則
- ・国立大学法人北海道大学旅費規程の一部を改正する規程
- ・国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員就業規則の一部を改正する規則
- 5月号**
 - ・北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学外国人受託研修員規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学産業イノベーション事業による同位体顕微鏡システム利用規程
- 6月号**
 - ・国立大学法人北海道大学組織規則の一部を改正する規則
 - ・国立大学法人北海道大学危機管理規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学事業所内保育所ともに規程
 - ・国立大学法人北海道大学事業所内保育所ともに運営委員会規程
 - ・国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程
- 7月号**
 - ・北海道大学客員教員規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学招へい教員規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学総長室規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学国際本部規程
 - ・国立大学法人北海道大学国際本部日本語・日本文化研修コース規程
 - ・国立大学法人北海道大学国際本部日本語研修コース規程
 - ・国立大学法人北海道大学組織規則の一部を改正する規則
 - ・国立大学法人北海道大学内部監査規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学入学者選抜委員会規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学教務委員会規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学学生委員会規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学名誉学位規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学研究生規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学短期留学プログラム規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学受託研究員規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学私学研修員等受入れ規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学外国人受託研修員規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学中国・人材育成事業研修員規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学ハラスメント防止規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学職員兼業規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学利益相反マネジメント規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学における研究活動上の不正行為に関する規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学における研究費の不正使用に関する規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学における公益通報の処理及び公益通報者の保護等に関する規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学職員労働時間、休憩、休日及び休暇規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学職員の懲戒の手続きに関する規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学教員のサバティカル研修に関する規程の一部を改正する規程

- ・北海道大学名誉教授称号授与規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学客員教員規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学招へい教員規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学安全衛生管理規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学危機管理規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学文書処理規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学法人文書管理規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学情報公開規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学個人情報管理規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学における個人情報の開示等に関する規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学における財務及び会計に関する職務権限規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学予算決算及び経理規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学固定資産管理規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学寄附金規則の一部を改正する規則
 - ・国立大学法人北海道大学インターナショナルハウス規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学借上宿舍等規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学北京オフィス規程を廃止する規程
 - ・国立大学法人北海道大学入構車両規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学情報基盤センター教育情報システム学内共同利用委員会規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学保健センター運営委員会規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学安全保障輸出管理委員会規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学共同研究取扱規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学受託研究取扱規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学安全保障輸出管理規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学産学連携本部規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学産学連携本部運営委員会規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学人材育成本部規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学創成研究機構規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学動物実験委員会規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学遺伝子組換え実験等安全委員会規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学放射性同位元素等管理委員会規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学病原体等安全管理委員会規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学職務発明規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学情報基盤センター情報ネットワークシステム学内共同利用委員会規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程
- 8月号**
- ・国立大学法人北海道大学遺伝子組換え実験等安全管理規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程
 - ・北海道大学観光学高等研究センター規程の一部を改正する規程
- 9月号**
- ・北海道大学外国語教育センター運営委員会規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学自家用電気工作物保安規程の一部を改正する規程
 - ・国立大学法人北海道大学水産学部等の施設に係る自家用電気工作物保安規程の一部を改

- 正する規程
- ・ 北海道大学量子集積エレクトロニクス研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- 10月号
- ・ 北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程
 - ・ 北海道大学アイヌ・先住民研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
 - ・ 北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学高等教育推進機構規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学組織規則の一部を改正する規則
 - ・ 国立大学法人北海道大学内部監査規程等の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学アドミッションセンター規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学アドミッションセンター企画運営会議規程の一部を改正する規程
 - ・ 北海道大学教務委員会規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程
 - ・ 北海道大学研究生規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学安全衛生管理規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学文書処理規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学個人情報管理規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学における財務及び会計に関する職務権限規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学予算決算及び経理規程の一部を改正する規程
 - ・ 北海道大学図書館委員会規程の一部を改正する規程
 - ・ 北海道大学情報基盤センター教育情報システム学内共同利用委員会規程の一部を改正する規程
 - ・ 北海道大学情報基盤センター情報ネットワークシステム学内共同利用委員会規程の一部を改正する規程
 - ・ 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター運営委員会規程の一部を改正する規程
 - ・ 北海道大学全学教育科目規程の一部を改正する規程
 - ・ 北海道大学学生寮規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学自家用電気工作物保安規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学水産学部等の施設に係る自家用電気工作物保安規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学インターナショナルハウス規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学インターナショナルハウス使用料等規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員就業規則の一部を改正する規則
 - ・ 国立大学法人北海道大学契約職員就業規則の一部を改正する規則
 - ・ 国立大学法人北海道大学短時間勤務職員就業規則の一部を改正する規則
 - ・ 国立大学法人北海道大学子どもの園保育園臨時職員就業規則の一部を改正する規則
 - ・ 国立大学法人北海道大学特任教員就業規則の一部を改正する規則
 - ・ 国立大学法人北海道大学職員労働時間、休憩、休日及び休暇規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学船員労働時間、休日及び休暇規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学子どもの園保育園規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部を改正する規程
 - ・ 国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程

11月号

- ・ 国立大学法人北海道大学化学系研究設備有効活用ネットワーク設備利用規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学大学院工学院規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学総長選考会議規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学産業イノベーション事業による同位体顕微鏡システム利用規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学サステイナブルキャンパス推進本部規程
- ・ 国立大学法人北海道大学組織規則の一部を改正する規則
- ・ 国立大学法人北海道大学総長室規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学内部監査規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学ハラスメント防止規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学職員兼業規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学利益相反マネジメント規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学における公益通報の処理及び公益通報者の保護等に関する規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学職員の懲戒の手續きに関する規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学危機管理規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学文書処理規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学法人文書管理規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学情報公開規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学における個人情報の開示等に関する規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学入構車両規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学アドミッションセンター規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学アドミッションセンター企画運営会議規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程

12月号

- ・ 国立大学法人北海道大学創成研究機構共用機器管理センター分析受託規程の一部を改正する規程
- ・ 北海道大学入学者選抜委員会規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学契約職員就業規則の一部を改正する規則
- ・ 国立大学法人北海道大学短時間勤務職員就業規則の一部を改正する規則
- ・ 国立大学法人北海道大学子どもの園保育園臨時職員就業規則の一部を改正する規則
- ・ 国立大学法人北海道大学特任教員就業規則の一部を改正する規則
- ・ 国立大学法人北海道大学嘱託職員就業規則の一部を改正する規則
- ・ 国立大学法人北海道大学役員給与規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員給与規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学病原体等安全管理規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学予算決算及び経理規程の一部を改正する規程
- ・ 国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程

資 料

計 報

- 1月号 ・ 名誉教授 木村 道也 氏
- ・ 名誉教授 小澤 保知 氏
- 5月号 ・ 名誉教授 木下 俊郎 氏
- 6月号 ・ 名誉教授 入江 遠 氏
- ・ 名誉教授 柴田 拓二 氏
- ・ 名誉教授 小島 幸治 氏
- 7月号 ・ 名誉教授 加来 照俊 氏
- ・ 名誉教授 片桐 千明 氏
- 8月号 ・ 名誉教授 中村 通義 氏
- ・ 名誉教授 喜多 富美治 氏
- 9月号 ・ 名誉教授 香城 日出麿 氏
- 10月号 ・ 文学研究科 教授 花井 一典 氏
- 11月号 ・ 名誉教授 高畠 稔 氏
- ・ 事務職員 井元 敏勝 氏

資 料

- 4月号 ・ 平成22年度入学者の道内・道外及び卒業年度調べ
- ・ 平成22年度入学者の都道府県分布及び地域比率
- 5月号 ・ 役職員数（平成22年5月1日現在）
- 6月号 ・ 在籍学生数（平成22年5月1日現在）
- ・ 平成22年度外国人留学生数（平成22年5月1日現在）
- ・ 平成22年度国別外国人留学生数（平成22年5月1日現在）
- ・ 平成21年度卒業・修了者の就職等状況一覧（平成22年5月1日現在）
- 7月号 ・ 平成22年度外国人留学生数（平成22年5月1日現在・訂正版）
- ・ 平成22年度国別外国人留学生数（平成22年5月1日現在・訂正版）
- 11月号 ・ 役職員数（平成22年10月1日現在）
- ・ 在籍学生数（平成22年10月1日現在）
- ・ 広報誌等一覧（平成22年10月調査）
- 12月号 ・ 平成22年度外国人留学生数（平成22年11月1日現在）
- ・ 平成22年度国別外国人留学生数（平成22年11月1日現在）
- ・ 北大時報掲載記事事項別一覧（平成22年掲載分）

〈訂正〉

北大時報No. 680（平成22年11月）P. 1 の写真キャプションに誤りがありましたので、以下のとおり訂正するとともに、お詫び申し上げます。

P.1：左上のキャプション （誤）総会室 → （正）総長室

〈編集メモ〉

▼鈴木先生のノーベル賞受賞後初の記者会見が13日に成田空港で行われました。20社近く集まったマスコミを前にして、先生が受賞の感想、ストックホルムで出席された各種行事の様子などについて話されました。記者の一人から「ノーベル賞のメダルを見せていただけますか」という声がかかると、帰国直後で少々お疲れ気味の顔に、にっこりと笑みを浮かべて「そう言われると思ってね・・・」と言いながら、おもむろに鞆のなかからメダルの入ったケースを取り出し、日本で初のメダル披露となりました。会見後、声をかけた記

者の方が「駄目もとで言ってみました。本当にメダルを見せていただけたとは思いませんでした」と嬉しそうに言っていました。

▼鈴木先生からノーベル賞のメダルのレプリカを二つ寄贈いただきました。ひとつが総長室、もうひとつが総合博物館に展示予定です。私もメダルをもらいました。同行スタッフからのおみやげで本物よりひとまわり小さいのですが、それでも本物と変わらず金色に輝くものです。金色を剥くとなかからチョコレートがでてきました。



2008.7.20 大雪山黒岳

—— 北の息吹④ チシマキンレイカ (*Patrinia sibirica*) ——

別名をタカネオミナエシというように、北海道の高山帯に自生し、平地に咲くオミナエシとそっくりの花を付ける。両者は、同属の別種として分類されているが、北海道の海岸地帯のオミナエシには、チシマキンレイカと見分けがつかないほどよく似た個体が多い。同じ黄色の花を付けてても、秋の花で目立たない印象のミヤマアキノキリンソウに比べ、本種は姿や大きさが高山植物らしく、夏の初めの大雪山の稜線に点々と散らばって咲く様子はなかなか好ましい。

理事・副学長 岡田 尚武

北大時報⑫ December 2010 No.681

平成22年12月発行

北海道大学総務部広報課

〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL: (011) 706-2610 / FAX: (011) 706-4870 / E-mail: kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/